
魔法先生ネギま！～麻帆良に現れし赤龍帝～

IC

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法先生ネギま！～麻帆良に現れし赤龍帝～

【NZコード】

N8056K

【作者名】

I C

【あらすじ】

神の間違えで人生を終えた少年に神は新しい人生、アニメや漫画の世界に主人公を送ろうとした。しかし、またもやミスで当初の予定作品とは違う作品「ネギま！」へと飛んでしまう。その世界で主人公はあるキャラの兄として転生をする。さらには、貰ったはずの能力が使えない。諦めて一般人として生きることを決めるが、運命はそれを許してはくれなかつた。彼の未来はどこへ向かうのだろう。

原作知識有の転生モノです。できるだけ原作沿いに進めようと思

っています。オリジ、オリジキャラ有のの小説です。

Prologue (前書き)

始まります。

「まは、どうだ？」

『気が付くと俺はここにいた。』

上を見れば青空だが足元は真つ白い。

「これは、まるで雲だなってことは、ここはあるの世か？・・・・なんてな」

なんて、一人ノリ突っ込みをしてくると

「ふむ、半分は合つておるな」

「え？」

声のした方を振り向くとそこには

「ちやあつす！」

笑顔で片手を上げた白髪で露面の爺さんがいた。

「いやー、理解が早くて助かるわい。ところどりで、お主、マフィアのボスあるのはその幹部に興味無い？」

『待てこりーなこが、』『ところどりで』だーあのせつしが『半分合つてゐ』つてぢりこいつだーマジで、俺は死んだのか？』

爺さんの言葉をそのままつぶになつたことを聞いてみる。

「やんなこ、一週間に言わんでもちやんと答えてやるわ……めんどくせこがの」

「おこー今、めんどくせことか言わなかつたか」

「わやんと説明あらからキチンと聞こしておけよ」

「無視すんなよ」「ハー。」

「まず、リリは現世と天界の狭間の世界じゃ。そして、お主は死んだ。以上。」

「一回、一回で済む話をめんどくせがんなよ……てか、マジで死んだのかよ……」

「まあ、死んだのはリリのミスなのがやがの」

は？今なんつったの爺イ

「…………ビリの事だ」

「実はの、今回寿命で死ぬのはお主ではなく、お主の隣の部屋に住んでいる男の筈だったんじやよ。それを……」

爺さんが視線を後ろに向けると爺さんの後ろから美女が出てきた。その子を見て

「あ……や、そのう……」「あんな「一目見て惚れました。

結婚していくだやこ」「ふえ／＼／＼？！」

気づいたら呑っていました。

「え、え～っと、私達、会ったのは初めてですよね」

「時間なんて関係ない。一目見てあなたに惚れました。」

「で、でも・・・ほ、ほら、君死んじゃってるし」

「そんなの関係無い」

俺は彼女の手を取り目をじっと見つめる

「貴女の心が知りたいんだ」「

「へ、へう／＼／＼

やばい、すんごい萌えるんですけど

「おっほん！話を進めたいのだが

ちい、まだいたのか爺イ

「うちなみにその子はワシの娘じや」

「お義父さん、娘さんを僕にくだやこ」

挨拶は大切だよなーうんー

「まだ早いですってばーーー

「まだつて事は将来的にはアリと」

「……………／＼／＼

真っ赤になっちゃって…………かわいいなあ～もつ

「いい加減に話を進めるべ。それと、娘はやうご」

まあ、いきなりは無理かだが、俺は諦め無い！必ず彼女と…………
あ、そりゃあれば

「お嬢さん、お名前を伺つてもよろしくでしょうが」

「あ、はい。私の名前はアテナと申します」

「ちなみにワシはゼウスじゃ」

アテナさんか……なんか女神のような名前だ……ついでに爺さんはゼウスか……あれ？アテナとゼウス？……ゼウスの爺さんはアテナさんの父親？……どつかで似たような事聞いた事あるよつな・・・ M A S A K A

「まあ、お主が考えている通りワシは神じゃ」

やつぱり～

「ワシらは何百年とお主の世界の生死の管理をおこなつてきた。そして今回は娘のアテナのミスで間違えてお主の人生を立つてしまつ

たといつ・・・・

「やつぱり、年上じや駄目ですよね」

アテナさんが少し悲しそうに言つたが

「年の差なんて些細な事だ」

「でも、貴方の十倍近く離れているんですよ」

やつぱり、神様だから生き何だね

「それでも僕の気持は変わりません。愛します。こんな気持ちは初めてだ」

もう一度アテナさんの手を取り瞳を見つめる

「私もです・・・・こんな気持ち初めてです／＼／

頬を赤く染め瞳を潤ませたアテナさんと見つめ合つ。そして、二人の距離がゼロに・・・

「いい加減にせんか――――――――」

「うわー！」

「さやー！」

ならなかつた。

俺の名前は白河 佑太。地方の大学二年で大学の近場でアパートで一人暮らしをしていた。両親は既に他界しており親戚の家に世話になっていたが大学の入学を機に一人暮らしを始めた。もちろん彼女なんかいる筈もなく彼女無し=年齢である。顔はいたつて平凡でモテたためしがない。アニメや漫画が大好きないわゆるオタクだ。

「と、覚えてるのはこんな感じかな」

「ふむ、記憶に関しての障害は無い様じゃな。それでは行こうか」

「は? どう?」

「どうって、もう少くとも別世界に。そこで君にはマフィアのボスに・・・」

「ちょっと待て、話が見えいんだけど」

何言つてだ・・・ああ、ボケか

「ボケとらんわ」

な、心を読まれた、だと

「その顔を見れば普通にわかるわい。今回はこいつのミスじゃからの代わりに新しい人生をやろうと思つてな。つまりは転生じや」

「いや、いいし。俺はアテナさんと一緒にここで幸せに暮らすから」

惚れた女と一緒にいたい。そう思つのは普通だろ?

「私と佑太さんの一人で・・・・・・いやん／＼／＼

少し間をおいてから顔を真っ赤にしくねくねし始めたアテナさん・・・何を想像していたのだろうその想像を現実にしてみせるぜ!-

「ちなみに、行先はお主の大好きなアニメや漫画の世界じゃぞ」

なん、だと。・・・・・くそ、彼女を幸せにしたい気持ちもあるが新しい世界への好奇心もある・・・俺はどうちを選べば。

「行つてください、佑太さん

「アテナさん?」

「世界を見て來てもつと、もつと素敵になつてきてください。その世界で人生を終えた後、まだ貴方の心が私に向いていた時、その時に共に歩みましよう。私達、神に寿命はありません。永遠に続く生の中でほんの少しの時間です。その間も私は貴方を見守つています。」

「・・・・・わかった。爺さん頼む」

アテナさんの言葉に俺も決意した。

「よつやく話がまとまつたか」

「ああ。といひでさつきからマフィアだの何だの言つてゐるが俺の新しい転生先つて」

「もちろん、『家庭教師ヒットマンREBORN』じゃ。ここでボン『』のボスあることは守護者に転生して貰おうかと思つてゐる」

やつぱり、俺が知つてゐるマフィアが出てくるのつてリボーンくらいしかないしな

「おまけで、ハーレム属性も付けてやる。良かつたなモテモテじやぞ」

「マジで！これで初めて彼女とかできる……あ！いや待て、俺はさつきアテナさんに告つたばっかだぞ

アテナさんの事が気になりアテナさんえを見ると

「――」

普通に笑顔なんですけど

「あの・・・アテナさん？」

「私が惚れたのですから女性の一人や二人は恋人がいて当たり前ですよ」

あれ？これって浮氣公認つてこと？そつ言えば神様つて普通に何人も奥さんいたな。

でも、確かにボーンって女性キャラもそんなに多くはないよな……
・まさか

「よし、ではそれでいいな。ではわしゃへへへ..

「ちよと待て」

「なんじゅ~?」

一応聞いておかなければな

「仮にだ、仮にモテるとしてだ・・・・誰にだ・・・・」

「や、それは・・・・」

「つまづ、この爺イ

「他の守護者やボスとか言わなによな

「あ~~~と

田逸りしゃがったー」の野郎ー一部の女性が大喜びする展開を作りうとしてやがった

「……変えろ」

「……はい」

自分の企みがバレたのでおとなしく返事しやがったな。

「無理に転生先を強制した詫びじゃ 身体能力と魔力などは上げないとやる。それと転生先は『リリカルなのは』でいいじゃ？転生だから〇歳からのスタートじゃが」

「リリなのか～。いいかも！魔王の〇 H A N A S I が見れるかも

「それと、転生特典じゅうのサイロロを振るがよい」

爺さんの投げよこしたサイロロを見る。普通の六面サイロロだが書いてある数字が1～4で2と3が二つの1、4が一つの変わったサイロロだ

「はよ振らんか」

「あじよ」

サイロロを投げると少し転がり1の面を上にして動きが止まる。1はどんな特典だろ？

「まつまつまつあ～運がないの転生特典は一つじゃ

って、これって数を決めるだけかよ

「さて、どんなチート能力がほしい？なんでも一つだけやるわ

「つか～

「一応、身体強化とかは別で上げてくれたんだよな」

「つむ、それとは別に一つやるところの事じや」

『「すつかなへやつぱりあれかな

『『Fantasy』のヒーローの『無限の剣製』がいいな』

あの背中はは憧れる！あれもあんな男になりたい。

「駄目じや」

「なんで？」

一個なんでもくれるって言つたじやん

「人気のある能力は複数個分貰つ事にしておるのじや。『無限の剣
製』は四つ分じや。ちなみに同じ作品の『王の財宝は』一いつ、ナル
ト』『火輪眼』と『白眼』は三つ分じやな」

マジでかー・・・どうじよつ・・・おーあれならどうだ

「それじや、『ハイスクールD×D』の『赤龍帝の籠手』は？」

『ハイスクールD×D』は最近ハマった本だ。あの本の主人公は笑
えるけどやる時はやる男だ

「ふむ・・・・いいじやうづ。おまけで条件を満たせば白の方の能
力を使えるようにしてやるつ
右だけじやがの」

「OK！それで頼む」

「あいわかった。ホレ」

爺さんが片手を俺に向けると俺の体が光に包まれる。

「よし、これでお主には『赤龍帝』が宿つた。それでは飛ばすぞ」

「あ、待ってくれ」

「なんじや、まだ何かあるのか?」

「ああ、大事な事」

爺さんから離れたところにいたアテナさんの元に向かう

「アテナさん、行つてくれるね」

「はい、行つてらっしゃい」

アテナさんと挨拶を交わし再びゼウスの爺さんの元に向かう

「・・・・もつ屁こか」

あ～～、やっぱ少し怒つてらっしゃる

「は、はい」

「フンー。」

再びゼウスの爺さんの声で俺の体が光に包まれる。そして、足元か

らぬつゝと俺の体が消えていく

「あー・・・・・・・まづい」

「へ？」

爺さんの顔が少し焦つた感じになる

「・・・・・すまん、ミスつたわい」

「はああああ！」

「大丈夫じや、転生先を間違えたじや やけだから。まあ、頑張れ！」

「ふざけんなあ～～～～」

俺の絶叫と共に俺の体はこの世界から消えた

「佑太さん・・・・・」武運を

Prologue（後書き）

Prologueの投稿です。いきなり、一人落としかけています
が、彼女は今後出てくる見込みは今のところありません。ゴメンナ
サイ。

更新速度は遅いかもしれません。最後までお付き合い頂けると幸
いです。

一時間目「俺の決意は何処へいった?」（前書き）

一つ書けたので投稿します。

一時間目 「俺の決意は何処へいった？」

「ここにちはー白河改め佐倉 佑太です。

ゼウスの爺さんによつて転生させて貰つたが、あの爺さん最後に「ハスリやがつて予定とは違つ世界『ネギま!』の世界に飛ばされちました。

そこで俺は原作キャラ佐倉 愛衣の兄として転生した。

これは確実に原作に絡めと言つていいようなものだろ?。

よつしやー!バリバリ絡んでやるぜ・・・・・なんて思つていた時期もありました。

しかし、俺はゼウスの爺さんから貰つたはず力が使えないだけでなく両親が魔法使いなのに魔法が使えないといつ落ちこぼれだった。

しうがないので一般人として生きる事に決めました。

この先どうなるんだろ?俺・・・・・

一時間目 「俺の決意は何処へいった?」

「じゃあ～な～」

「おう！また明日な！」

別れ道で友達と別れ帰路につく。

魔法が使えないとわかつてから数年、俺は今普通の小学五年生をやつてます。

魔法が使えないのだから魔法使いにならずに一般人として生きると両親に告げると、当初は両親たちも自分たちの子なんだから諦めずに勉強すれば”立派な魔法使い”になれると言つてはいたが、俺の中に魔力がほほ感じられないとわかつてからは何も言わなくなつた。

こつして俺は、極普通の一般人として生きている。

だが、妹の愛衣ちゃんは普通に魔法使いの才能があつた。

しかも、普通にいい子です。

魔法が使えない俺に普通に接してくれるし、逆に兄妹の仲はいい方だ。

そんな彼女だが、現在はアメリカのジョンソン魔法学校に留学している。

この辺は原作でも説明があつたな、結構優秀らしさと嬉しそうに画

親が話していた。

俺が魔法使いになれなかつた分、妹に期待していのだろ。妹からも何度も手紙が届き魔法を覚えるのが樂しくつてしまつがな
いらしい。

そんな手紙を読むと羨ましいと思つ事もある。

などと考え方をしていたら、何時もと違つ道にあってしまった。

「あれ？道を一本間違えたかな。まあ、たまには違つ道で帰るのもいいかな」

と、せりてその道を進んでいく。

それが間違いだつたのかもしれない。

その道を少し進むと道端に爺さんが倒れていた

「うひ・・・・・・・」

うめき声が聞こえるので生きてはいるようだが・・・・このままま
つとくわけにもいかんしな

「おじこさん、おじこさん」

「大丈夫ですか？おじこさん」

「う・・・・・・」

「うつ…………は……」

「は？」

何か言葉が聞こえたので耳を近付ける

「…………は…………らが…………く…………つた…………」

「…………」

空腹で倒れてただけか…………としあえず近くのコンビニで弁当でも買ってきてやるか。

手持ちの金額を確認すると弁当二つ分くらいのお金は持っていたので近くのコンビニで弁当を買つてき爺さんへと差し出す

「お…………おおーーー！」

差し出された弁当を抱え込みます」に勢いで食べ始める。

「…………ふつはーー！助かったわい。小僧！感謝するわ！」

全て食べ終えた爺さんは満足そうな顔で俺の方を見ている。

「で、もう大丈夫なんですか？」

「ああ、おかげだな。いやー、知り合ひの元を訪ねようかと思つたら、その途中で路銀が尽きる空腹で倒れるとは思わんかったわい」

「そうなんですか。その知り合いかたはどの辺に住んでいるんですか？近いなら案内くらいはしますよ」

一応、親切で聞いたが、次に出てきた言葉で

「いや、まだ少し距離があるので、知つとるかどうかは知らんが、『麻帆良学園』といつといひじゅう」

「…………え」

俺の思考は急激に働き始めた。

まさかこの人、魔法世界の人か？いや、そうとは限らない。むしろ魔法関係者かどうかもわからないのに決めつけるのはどうかとは思うが、あまり関わらない方が賢明か？よし、すぐに帰るわ。そうしよう！

「そうですか、それでは僕はこれで」

すぐやまとその場を去るひつとするが

「まあまた坊主。何か礼でもせんとワシの気がすまん

「いいえ、大丈夫です。お構いなく」

「まあそういうな

引き止められてなかなか帰れない。

「ふむ…………」

そんなやり取りの途中、爺さんが急に黙り込む。

「坊主……お前……いや、お前の家族に魔法使いがあるじ
やう」

「……」

「驚いたか。お主から、ほんのわずかだが魔力を感じてのでな」

「」の爺さん・・・

「警戒せんでもよ」、ワシも関係者じゃからな

爺さんは大笑いをしているが俺は笑えなかつた。

「まづこ、」のままじや関わつあまひ。関わらないこと決めたはずなのに

「それと坊主、お前は魔法が魔法が使えるんだが」

「・・・・・」

「」の爺さんなんぞそんなことまだ・・・

「ワシはやの理由も知つているだ

「やうですか」

「ふむ・・・・飛びついて聞いてくるかと思ったのじゃが・・・

知りたいとは思わんのか？」

正直、気にはなった。だが、才能が無いだけだと自分を納得させてしまつていいので、変な期待は持ちたくなかつた。だから

「いいです。僕は魔法と関わらずに一般人として生きていこうと決めましたから。両親も承諾済みです」

「やうか・・・・・・・じやが世界がそれを許してくれはせんぞだらう（ボソッ）」

なんとなく納得はしていたようだが、爺さんの後半の言葉は俺にはとどいてなかつた。

「よし、飯のお礼じゃー。ワシのとひとおきの一いつをお前に教えてやるわ」

「取つておき？」

「ヤヒージャ、とある古武術じや。今の世にはワシしか使い手があらんがの」

「遠慮しておきます」

「古武術じやから魔力なんぞ必要ないし氣を多少使つへりこじやし」

「だから、いいですって。俺、暴力は嫌いなんで」

「なあ」「三年あれば普通に達人クラスぐらこはなれるわい」

「人の話を聞け！！」

「じゃ行くかの

「爺さんは立ち上がり俺を脇にかかる。俺の言葉には耳を貸す気は無い様だ

「ちょっと忙い事は両親とよく話してから・・・て、あんた 麻帆良に行くんだじゃ

「両親にはワシからキチンと話してやる・・・ 麻帆良は・・・・後でいいじゃらつ

「ちよつ

そして、俺は爺さんに抱えられその場から姿を消した。

はじめまして佐倉 愛衣です。

愛衣 side

私は今、アメリカのジョンソン魔法学校で魔法を勉強しています。

お友達もたくさんできましたし、毎日がとっても楽しいです。

「」で私は”立派な魔法使い”を目指して頑張っています。夢を諦めざるを得なかつたお兄ちゃんのためにも

私には一つ上の兄ちゃんがいます。

お兄ちゃんは家族の中でただ一人魔法が使えません。魔力はあるみたいですが魔力 자체が極端に少ないと両親は言っていました。

魔法が使えないといつと分かつた時もお兄ちゃんはただ一言

「やっか」

と、言つただけでした。その表情は少し悲しげでした。

子供のころからお伽話のよつて何度も聞いた”立派な魔法使い”的お話。

大きくなつたら一人で世界の人たちを助けて回りう”。”サウザンドマスター”のような魔法使いになるという夢をお兄ちゃんはかなえる事が出来ないのです。

それなのに、お兄ちゃんは私に変わらず優しくしてくれました。

本当は辛いはずなのに、悲しいはずなのに

だから、私はお兄ちゃんの変わりにそして私自身の夢である”立派な魔法使い”なるうと決めました。

お兄ちゃんとは留学した後も手紙で互いの生活の事を書か合っていました。

友達は私の事を「ラモン」と言っていますが別に気にしてません。だって私はお兄ちゃんが大好きなんだもん

優しいお兄ちゃん。

泣いている私の頭を撫でてくれるお兄ちゃん。

困った時は何時も助けてくれるお兄ちゃん。

そして、私の夢を応援してくれたお兄ちゃん。

魔法は使えないけど私にとってはお兄ちゃんは、私だけの立派な魔法使いです。

しかし先週、両親から送られた手紙を読み私は愕然としました。
何時も手紙を送ってくれるのはお兄ちゃんのハズなのに、両親からだつたので不思議に思って
いました。

私は不安になりました。お兄ちゃんが病氣にでもかかったのか、怪我でもしてしまったのか。

そして、私の不安はあたつてしましました。・・・・最悪な方向で

手紙を簡潔にまとめると「いつ書いてありました。

お兄ちゃんが行方不明になつたと。

一時闇田「俺の決意は何処へいった?」（後書き）

急すぎる展開になつてしましました。いきなり行方不明とかまづいかな?

ちなみに、愛衣ちゃんはブリコンといつ設定です。

次の話はまた少し時間が飛びます。できれば今週か遅くとも来週までには投稿したいと思つています。

一時闇田「麻帆良に行ひ」（前書き）

短いですが、書きあがつたので投稿します。

「一時間、「麻帆良に行こう。」

あの日から三年が経つた。

あの口爺さんに連れ去られ様々な地で修行と云ひながらの地獄の日々を送っていた。

ときには山に放置されその中で生き抜き

ときには野生の熊や虎を相手させられ

ときには海で、雪山で、砂漠で etc.

とてもじゃないがよく生きていたと思ひます。

そんなある日、突然こんなことを言ひだした

「佑太、ちょっと麻帆良まで言つて来い」

「は？」

「一時間、「麻帆良に行こう。」

「じゃから、麻帆良に行けと言つてゐるんだじゃ」

「だから、なんでいきなり麻帆良に行かなきゃならないんだ?」

「ほら、お主に初めて会つた時に麻帆良に行くと言つてたじゃろ」

「その途中で空腹で倒れてたんだよな」

「今でも思い出す。あの時いつも道で帰つていれば俺は今までいたんだよな

「実はあの時、近右衛門に警備の人手が不足しているから少々手伝つてくれと話がきてたんじゃよ。じゃから、ワシの変わりに手伝つて来い」

「それって三年前の話じゃ」

「もう、無効になつてんじやね?」

「ええい、いいから行つてこんか!これも修行じゃ……」

「いやいや、あんた何でもかんでも修行修行つて。この間だつて金欠だからつて年齢詐称薬で年を誤魔化してバイトせられた時だつて修行とか言って無かつたか?しかもあんたはその店で俺のつけでさんざん飯食いやがつて。

しかも、麻帆良の警備つて悪魔とか普通に出てくるし、死亡フラグ

満載じゃん！

「いや、そもそも師匠が受けた話じゃ・・・」

「ええ、いいからとつと行かんか！お前は既に修行をおさめたわ！..」

いきなり拳で俺を突いてくる

「修行を完全におさめる事は無いとあなたが言つたんだろう」

それを捌き蹴りで反撃するが師匠はそれを捌きながら拳を連続を繰り出してくる最初は捌き反撃ができたが次第に捌くだけで精一杯になり最終的に捌ききれなくなり拳を腹部に受け吹き飛ばされ意識が闇に沈んだ。

徐々に意識が覚醒してくる。

「では、確かにあずかった」

「おおう、好きにしてよいぞ」

そして意識がハツキリしたところ

「起きたか佑太！喜べ新しい仕事が決まつたぞ。しかも、学校にも通えるらしいぞ。よかつたの～」

俺の新しい修行場が決まつっていた。

「どういう事だ・・・このクソジジイ！」

「じゃから、お主はこれからこゝ麻帆良で学生と警備ついでに寮の管理人の仕事をやると決まつたのじゃよ。バカ弟子」

「勝手に決めるなーー！」

「めんどくさいの～いい加減諦めんか。ホレ」

師匠は俺を投げ捨てる。受け身を取りぶん殴ろうと飛びかかるが

「じゃあの、しかれやれ」

と言い残し転移の札を使いその場から消えてしまい。俺の拳は師匠の後ろにあつた大きな机を破壊するだけに終わった。

「くそつー逃げられた！」

俺が師匠を逃がした事でイライラしていると

「元気な子じやの～」

「なんだてめ・・・え・・・は・・・・・・・宇宙人?」

「誰が宇宙人じや。誰が」

あれ、この頭の骨格がおかしい人つて・・・

「ワシはお前の師匠の友で」の学園の学園長の近衛　近右衛門じや

あへやつぱり学園長さんでいらっしゃいましたか。

「あへつと佐倉　佑太です」

「ふむ、では佑太君、君は今いくつじや?」

?なんで年齢なんか聞くんだ?ええっと、確か・・・

「今年14になりました」

「そうか、木乃香と同じ年か、という事は今中学一年じやな」

「まあ、普通はそうですが、俺小五の途中で師匠に連れ去られたんで小五で止まってるんですが・・・」

学校に行かず修行の毎日だったからな

「ま、その辺は今後の努力で何とかなるじゃん」

いいのか、それって？まあ一応前の世界では大学に通つてたから丈夫だと思うけど・・・

コンコン

ん？誰か来たのか？

ほ！来たようじゃな。入りなさい夕か三升君

え
！
！

失礼します、学園長それで要件とは」

おーーー タカミチだー！ マジで渋いな

「彼はタカミチ君と語つてこの学園の教師で同時に広域指導員じゃ」

「佐倉佑太です。よろしくお願ひします」

「はじめまして高畠・T・タカミチだ。よろしくね」

「彼は君のクラスに転入することになつたからの」

「え！ ウチのクラスですか？ しかしウチのクラスは・・・それに明日からは・・・」

つうか、既に俺の意思に関係なくここに残る事が決定されてるし

「あと、寮の管理人と警備も兼任じゃ。じゃがまだ管理人室のかた
すけが住んでないのじゃ。だから、ほんばんは君の部屋に止めては
貰えんかの？」

「それは構いませんが……本気ですか？」

「何がじゃ？」

「あのクラスに編入といつ事は……」

「ホントじや？」

なんか揉めてるな～

「……………そうですか」

あ、タカミチが諦めた……………？タカミチが担任のクラス？
…………あれ？それって……

「あの……学園長？」

「なんじや？」

「俺の編入するクラスって女子中だつたりしません…………よ
ね」

「……………そそんな事があるはず無いじゃやうが」

なんだ、今の間は。しかもかんだし

「まあ明日になればわかる事じや。今日せもう遅いからゆつくりと休むとよい。タカミチ君頼んだぞい」

「そそうだね。では佐倉君案内するよ付いてきてくれ」

そう言つとタカミチはさつと学園長室を後ににしてしまつた。見失うわけにはいかないのですぐに後に続く。

なんか・・・・・マジでのクラスに編入させられそうな気が・・・
・・まさか

一時畠田「麻帆良に行ひ」（後書き）

まさか、昨日の今日で書きあがるとは思ひませんでした。展開が急すぎるかな？

次のもだいぶ書きあがつてるので遅くとも今週中には投稿できそうです。

三時間目「一人の子供先生？」（前書き）

二話目、投稿します。

三時間目「一人の子供先生？」

翌日、タカミチは朝少し用事があるという事なので一人で学園長室に向かつた。

「ノンノン

「佐倉です」

「あいとるよ」

「失礼します」

学園長室にいたのは学園長一人だけだった。今日も不思議な骨格してゐるぜ

「昨晚はゆっくり休めたかな？」

「はい」

「ところで、君の転入するクラスじゃが、女子中等部の一・Aになつたから」

「はい？」

「マジですか？」

三時間田「一人の子供先生？」

「ふむ、すんなり了承の返事を出すとは見上げたものじや。それでは後はタカミチ君に・・・」

「いやいや

了承の返事じやないって

「”男子”中等部の間違いですよね？」

「いや、”女子”中等部じや」

「・・・・・ええと救急車は119ひとつへ」

学園長室の電話を使い119番を押すが11で手を掴まれた

「いやいや、ワシまだボケとかないから」

「どう考へても、ボケでしょう。男を女子中等部に入れようとしてる時刻で」

「表向きは、共学化に向けての試験といつ事になつてゐる」

「ナリにいつ事じやねえ！そんなん俺じやなくともいいだろ！」

あのクラス危険盛りだくさんじやん！ネギとか木乃香とか明日菜とかネギとかネギとかネギとか

「まあ落ち着くのじや、ちやんと訳もある。やつれり来るといづつんじやが」

「あ？」

来るつて何が？

「ン」

学園長に抗議をしてこると扉をノックする音が聞こえる

「高畠です」

「入りました」

扉が開くとタカミチの姿

そしてその後ろに一人の少年と二人の少女の姿がある

「学園長、ネギ君とエリカ君を連れてきました」

は？ネギ？・・・・ちょっと待て

改めて入室してきた少年の姿をよく見る

赤毛にメガネそしてリュックから飛び出でている布で巻かれた長い棒、おそらく杖だらう

俺の転入と同じ日にネギも来るのか……てことは、その後ろにいるオッドアイの少女が明日菜でロングの黒髪の少女が木乃香で……あと一人はさつきの学園長とタカミチが話していたエリカという少女だろう。…………あれ？ エリカなんてキャラいたっけ？ 容姿はネギにそつくつといつか……

女装したネギ？

「ふむ、『J・スプリング』やつたな。麻帆良学園によつじや。ネギ君、エリカ君」

「は、はい。はじめましてネギ・スプリングフィールドです」

「ネギの双子の妹のエリカ・スプリングフィールドです。はじめまして学園長先生」

ああ、双子か道理で似てるわけ……って

「はつああああ！ 双子おおおおおおおー！」

俺の大声で室内にいる全員の視線が集まる。

「ど、どうしたんだい佐倉君？」

「あ、い、いえな、なんでもありません」

やつべ～あまりの事に大声上げちまつたよ～・・・ああ、眞の視線が痛い

「学園長一体どーゆー」となんですか？」

この後はほぼ原作道理に進んでいった。ネギが一一Aの担任で英語担当、妹さんのエリカちゃんが副担任で数学担当。

そして、ネギは明日菜と木乃香と同室にエリカはまだ決まって無いそうだ。その間、エリカという少女がずっと俺の方を睨んでいた。一通り話が済んだといふで

「といふであんた何なの?」今は女子中等部よ、なんで男のあんたがいるの?」

明日菜が俺の存在が気になり

「やついえば、そやね」

木乃香も俺の事を不思議そうに見ていく

「彼は佐倉 佑太君、転校生じゃ。女子中等部の共学化へのテスト生としてこのたび君たちのクラス一一Aに転入することになつた」

「共学になるんですか!?!?」

「いや、そういう話が出ておるだけで、まだ決まったわけではないが一応テストとしてやってみよつという話になつただけじゃ、ついでに彼には女子寮の管理人もやつてもらう。のう?」

「ん、そつみたいだな」

「でも・・・・」

やはり明日菜はいまいち納得ができないようだ。

「そろそろエリカの時間じゃ、早く教室に向かいなさい」

学園長の言葉にうなづき教室に向かう。

その途中、ネギと話していた明日菜が何か叫んで先に教室に行ってしまった

「どうかしたのか？」

「は、ははは」

「はあ」

ネギは苦笑いしエリカはため息をついていた

「じゃあ、佐倉さんは僕たちが呼んだら入ってきてください。・・・
よしー行くよエリカ」

「ええ」

二人はタカミチと一緒に先に教室に入つて行く

そして、エリカとすれ違つた時

「授業が終わったら、話したい事がある」

「え？」

俺だけに聞こえるように言葉を残し先にいつてしまった

なんとも断りきれない雰囲気。この感じは、前の世界であの人が俺をパシラされた時と同じだ。それに学園長室でのあの視線何とも言えない恐怖を感じた。

・・・なんでだ？

その後、教室に入ったネギはそこで原作通り全てのトラップにかかっていた。

教室の中でひと騒ぎあつた後

「それでは佐倉さん、入ってきてください」

ネギの声が聞こえたので、教室に入るがかなり居心地が悪い。そりや、転人生が男だったらそうなるわな

「佐倉 佑太です。よろしく」

「「「「男———」」」

教室内大絶叫。「ひるせえし

「あ、あのー」

「お、落ち着いてください」

スプリングファイールド兄妹がなんとか落ち着かせよとするが効果は無い。そりや、女子中に男が転入してくれば騒ぎ出すのには十分だしな

「しづかに！」

タカミチの一聲でクラスが静まる

「しつもーん、えつと佐倉君? はなんで女子中に転校できたの」

「彼は女子中等部の共学化へのテスト生として選ばれこのクラスに転入することになったんだ」

「えー、共学になるんですか?」

「いや、一応テストしてみるだけで、すぐじどうにかなることいつ事ではないよ」

「ネギ君とエリカちゃんでこくつなのが~?」

「二人とも一〇歳です」

「どに住んでるの~」

「女子寮の管理人室に今日から住む」

「えー、それって佐倉君も女子寮に住むってこと?」

「そうなるな

「　「　「キヤー」「」

「趣味はなんですかー？」

「恋人とかはいるんですかー？」

一人の生徒が質問を始めるとき、クラス全体にそれが広がっていく
このクラスってホントに騒がしいんだな・・・とか、女子のレ
ベル高！普通に皆かわいいんですけど

そのまま、質問タイムに途中入りネギは授業ができなかつた。

そして、授業が終わつた後、当然のこと、教員は教室からいなくなる
が、生徒の俺はそこに残るわけで、結局一日中質問攻めにあつた。

「やつと、終わった」

一日の授業が終わり、俺もようやく解放された。

「やつと帰る」

荷物を持ち教室を後にすると、そう言えばなんか忘れてるような・・・
・・まあ覚えてないんだからたいしたことじやなかつたんだろう

そのまま、昨日タカミチに教わった女子寮へと帰つていった。

しばらく歩くと女子寮に着く、今日から生活する俺の部屋、管理人室のドアを開けると家具などは据え置きとして普通にあつたし俺のカバンも部屋に運び込まれていたのでで今度の休みに衣類を買ってこなければ着るもののが無いな、など考えて荷物をかたずけていると

こんこん

「?誰だろ?はーい、開いてますよー」

そして扉が開くとそこには女装したネギ・・・ではなくて、エリカ・スプリングフィールド先生が部屋に入つて来た。

あ、そう言えばこの子に放課後、話があるって言われてたんだ。すっかり忘れてた

「少しお時間よろしいでしようか?」

「あ、はい・・・ビアヘン

なんだ、顔は笑顔なのにすんごくやな予感がする

「それでは・・・」

すると彼女は懐から短い棒、いや、あれは杖だ、を振ると部屋に光

の粉のようなもの周囲に散らばた。

「一応、他人に聞かれると困りますので外部に声が漏れないよう結界をはらさせてもらいました」

やつぱり、ネギの妹なのだから魔法使いなのは普通か・・・・。
悔しくなんかないやい。

「さて、これで大丈夫ですね。それでは本題に入りますね」

そして彼女は

「佐倉 佑太さん・・・・・いえ」

とんでもない事を

「”白河 佑太”さん」

俺の過去の名前を口にした

三時間目「一人の子供先生?」（後書き）

なんとか投稿ができました。

正直、ネギがオリ主の部屋に来てエリカが明日菜達の部屋にいけば
よくね？男が女子寮の管理人つてのも無理があるような・・・な
どあるかもしませんがそこは「都合主義」という事で。
次も遅くても来週中には上げようと思っています。

四時間目「一人目の転生者 そして・・・」(前書き)

四話目です。投稿します

四時間目「一人目の転生者 そして・・・」

エリカ・スプリングフィールド

本来、原作には登場していないはずの俺と同じくイレギュラーな存在
存在しないハズの俺がいる事によつて世界が改変させただけの修正
だけなのだと思っていた

しかし、彼女はこの世界では俺しか知らない事・・・俺の前世の名
前を言った

なぜ、彼女が俺の前世の名前を知つているんだ？

いや、ただの人違いかもしれない

でも、彼女の言つた”白河 佑太”が本当に過去の俺自身の事を指
すのだとしたら？

その事を知る彼女は何者なのだ？

「君は・・・いつたい・・・」

「そんなに警戒なさらなくても・・・私と貴方は・・・同じなんですか？」

「おな・・・じ？」

「ええ。同じ・・・・転生者ですよ」

四時間目「一入目の転生者 そして・・・」

彼女は・・・今なんと言つた?

「転生者・・・だと」

「はい、そうですよ」

「仮にだ、仮に俺が君の言つ転生者として、それを証明できるのかい?」

「証明も何も、転生者なら分かるはずです。本来、原作には存在しない私達が何故存在するのか。考えられる理由としては二つ。一つは自分というイレギュラーな存在に対する世界が及ぼした修正力による存在。・・・そして、もう一つが転生者という可能性です」

たしかに、俺や彼女の存在が”おかしい”と感じる方が”おかしい”のだ

「私の知る原作では女子中等部に転校生の男の子は存在しません。それに、貴方は今朝、私と兄さんを見て『双子!』と叫びましたね。」

普通なら私達が双子と解つてもあそこまで驚きませんよ

そういうと、彼女はかすかに笑う

そりやそりや。別に双子だからってあんなに大げさに叫ぶのは不自然だ。『ネギま！』という作品の原作の知識が無い限り

「…………わかった。俺が、そして君が転生者という事は認めよう」

確かに、ここまで言へるめられれば認めるしかないだろう、俺と彼女が同類だと

「ありがとうござります。では・」「だが」・・なんですか？

重要な事が一つ残っている

「なぜ、君は俺の過去の名を知っているんだ？」

そこが、どうしても気になつたのだ

「…………さうですね、その事に関してもお話を……いえ、

先に私の過去の名を名乗つましょ

「…………どうして彼女の過去の名前を聞けばわかるんだ？」

「私の名は”赤羽 江利香”よ。覚えてるでしょ佑太

「赤羽 江利香って…………えええ……」

その名前を俺は知っていた・・・いや、忘れられるハズがなかつた

「え、江利香さん～～～！！」

「はい 」

俺が彼女の事を知つて、彼女は嬉しそうにしているが、俺はそれどころではなかつた

”赤羽 江利香”別に、彼女とは恋人だつたとかそういうわけではない

普通に言えば”年上の幼なじみ”

悪く言えば”ガキ大将とパシリ”

そう、俺は過去この幼なじみにさんざん振り回されていたんだ

彼女は表向きは美人で文武両道、性格良し、絵に書いたような優等生

表向きの顔がいいため周りからも人気があつたそのせいで、俺は周囲から嫉妬や欲望の眼差しをさんざん浴びせられた

だが、裏では頑固で気が強く、自分の思い道理にいかないとすぐ手が出る腹黒女。まあ、これは俺に対してだけらしいが

そんなこんなで、俺は彼女が苦手なのだ

「ちなみに、あなたの事はゼウスという人？から聞きましょ」

あの爺イ～余計な事しやがつて！～

「…………アテナという女性を口説いたそうですね」

「！～」

「こやかに話してはいるが、彼女の目はまったく笑つてはいなかつたこの表情は…………やべえ

「ナ、ナーラソンナーナコツテラツシャルンデスカ？」

「あら～別に怒つてなんかいませんよ」

いや、怒つてないつてその田で言われても説得力無いんすけど

「でも、少しイラツとはしますね」

「すいやせんでした。」

謝り方の最上級の土下座を繰り出す。傍から見て10歳の少女に土下座する俺つて……

「でも、あれはマジで惚れたから口説いたわけで……」

ギンツ！～

彼女の殺意の籠った視線が俺をとらえる

「イ、イヒ、ナンデモアリマセン」

「ひつ怖いえ～つて

「まあ、その事に関しては後で御仕置きをするとして……」

お、御仕置きは確定ですか・・・・・

「あなたがこれまで何をしてきたのかを話してください」

「なんで、そんなことを」

「話してください」

「だから、なに「話してください」・・・・・は」

なんでこいつなるんだわ！」

それから、彼女にこれまでの事を話した

原作キャラの兄として転生した事

ゼウスの爺さんから貰った能力が使えなかつた事

魔法が使えず一般人として生きていた事

その中で師匠にあつて強制的に弟子にされ修行の旅をしていた事

そして、師匠の変わりに麻帆良の警備の仕事をするためここに来た事

「ちうですか・・・・・つまり、貴方は今のところ原作に関してはここに来た以外はほとんど関係をしてないのですね

それが江利香さんの感想だつた……ってあれ？

「なんで、江利香さん『エリカでいいわよ。』では私の方が年齢は下なんだし」わかつたじや、エリカ」

「なにかしら」

「エリカってなんで『ネギまー』の内容知つてんの？」

「え？」

「え？ って、エリカって漫画とかアニメって興味無いつて言つて無かつたつけ？」

「そ、それは・・・・」

エリカは視線を逸らす

「まさか、俺から取り上げた『ネギまー』を読んだの？」「そ、そんなことよ！」

「つ、次は私のこれまでを話すわね」

話し変えやがった

「とはいえ、特には何にもしてはいないわね。ほぼ原作通りにネギと一緒に魔法学校に通つて、ネギと一緒に飛び級して卒業、そして麻帆良にきました。ああ、ちゃんと村も悪魔達に襲われましたよ」

「んじゃない」とをわざつと言わなかつたか？

「原作と変わつた所は私がいる事と・・・ネギのシスコンが少し強くなつたくらいかしら」

その辺は大して問題にはならんだろう。元からネギはシスコンだし

「それで、どうします？」

「どうするつて？」

「原作に介入するかどうかです」

ああ、その事

「まだわからん。とりあえずは巻き込まれたら巻き込まれたでんとかするつてくらいかな」

「やうですか・・・では、現状確認はこれくらいにして、例の事についてですが」

「?例の事?」

「御仕置きの事です」

「ですよね~」

「そんな嬉しそうにするんなや

「といつ事で、私と仮契約していく下さい」

「おかしくねソレー！」

「なにがとこ'う事でだよ

「も～相変わらず頭の回転が悪いですね」

「うぬせえよ！」

「ほっとけーでか急にキャラ変わんなや

「つまり、御仕置きとして私の従者となつて馬車馬のように働かつてことですよ」

「じゃねえよ！完璧に奴隸扱いじゃねえかよ

「奴隸なんて人聞きの悪い・・・単なる樋変わりですよ～」

「もつと酷えしーつうか人の心読むなよーーー」

「さ～てど、仮契約の魔法陣は～つと」

「人の話を聞けよー」

「で～きたー！」

「無視がよーしかも書きあがるの早シー！」

「セツきから、うぬわこですよ。こんな美少女と合法的にちゅーで
あらんだからこじやないですか」

「俺はロリコンじゃない！」

確かに美少女と言えば美少女だが、あんた今は10歳だろう

「あ、ちなみに数えて10ですから今はまだ9歳ですよ」

「なお悪いわ！」

徐々に魔法陣の上へと追い込まれていく

「それじゃあ逝きますよ

「字が違~う~！」

俺とエリカの顔が徐々に近付いてくる

エリカは言葉とは裏腹に顔は真っ赤だ

俺も自分の顔が赤くなっているのがわかる

そしてついには互いの距離はゼロになり唇が重なった

仮契約！

そして部屋が光に包まれた

その時、俺の中で何か鍵のような物が外れる音が聞こえた

四時間目「一人目の転生者 そして・・・」（後書き）

四話目を投稿しました。幼なじみの転生者が登場！なんか、主人公が彼女に対してはヘタレだなこりや

これからのお話についてですが、基本的に毎週の火、水、木のいずれかに更新できるように頑張ります。

五時題田「月夜の出合」（前書き）

予定とは変わりますが書けましたので投稿します

五時體田「月夜の出金」

「…………」

「…………」

「…………」

く、空気が重い

今俺達はせつちゃん」と桜咲
へと向かっている
刹那ちゃんに連れられ2-Aの教室

し、視線が……痛いです

せつちゃん……警戒してるのはわかるけど、視線に殺氣籠めす
ぎだつて……

「あ、あの～……や、桜咲さん」

「なんでしょう」

「俺の顔に何か付いてますか?」

「いえ、別に」

「そうですか」

「…………」

「…………」

「…………」

会話が無いです。エリカさんも黙つたまんまでし

五時間目「月夜の出会い」

「「「「よつじー・ネギ先生！エリカ先生！佐倉君ー」「」「

教室の中は歓迎会ムード一色でした

「わざと、主役たちは真ん中に」

「え、ちよ」

「わあー嬉しいな

「少し照れますね」

それぞれ背中を押され席の真ん中の方へと押し進められる

ワイワイ、ガヤガヤ

それぞれが中心となり四つにわかれていた

ネギが中心にいるグループ

エリカが中心にいるグループ

俺が中心にいるグループ

そして、その様子を外側から眺めている人達

となっている

その途中途中で色々あつた

本屋ちゃんがネギにお礼を言いに行つたり

委員長がネギに銅像を送つたり

明日菜と委員長がケンカという名のじやれ合いを始めたり

ネギがタカミチに読心術を使つてしたり

ネギと明日菜の二人が抜け出し一人でなんかやつてたのを委員長がみて暴走したりと

とりあえずは原作通りに進んでいた

俺も何だかんだで色々と質問攻めにあつていた

つか、あんたら日中にさんざん質問してなかつたか？

しかも、始終テンション高いし・・・・俺、このクラスでやつていけるかな？

そして、歓迎会も终わり俺は一人帰り道を歩いている

「ふあーあ、さつさと帰つて寝よ。なんか色々あつて今日は疲れた」

えつと、朝学園長室で女子中への編入を言い渡された事に始まり

ネギが魔法使いの修行のために麻帆良に教師としてやってきたり

そのネギに双子の妹がいたり

しかもその妹が俺と同じ転生者だつたり

その人が俺の前世の知り合いだつたり

脅されて仮契約させられたり

せつせつやんに始終殺氣の込められた視線を向けられたりと

「原作に介入するつもりなんて無かつたハズなのになあ・・・・」

どうして、いつなつたのだか?

「・・・・・はあゝしかも、また厄介事か・・・・」

それに都合悪く満月だし

「転入初日で目を着けられるような事した覚えは無いんですけどね~」

俺の後ろに浮かぶ気配に視線を向ける

「ハウアンジエリンさん」

そこには夜闇に浮かび黒いマントを纏つた金髪の幼女エヴァンジリン・A・K・マクダウェルの姿があった

「ほう、なかなかいい感をしているな」

「とりあえず、いきなり後ろに立たれると怖いのですが」

「エケケケケッ……私が貴様の背後に現れる前に『氣』してはいたくせによく言つわ」

「臆病者なもんでね」

そりや一応は気づいてはいたけど……師匠なんか完璧気配絶つて現れやがるからな

「やうかそつか・・・・・では、その臆病者とやらの実力を見せて貰うとするかな」

するとエヴァは懐から魔法薬の入った試験管を取り出してこちらに向かい投げつけてくる

「氷爆！！」

投げつけると同時に呪文を詠唱する

「へへー！」

迫りくる凍氣と爆風をぎりぎりで躱す

「マジかよ」

ボヤキながらその場から逃げだす

「付き合つてられつか」

「まつまつまつまつ・・・・逃がすかバカ者が！」

なんであいつそんなに楽しそうに追つてくれんだよー。

「魔法の射手 連弾・氷の3矢！」

再び試験管を投げ詠唱してくる

「今度は魔法の射手かよーっと」

鋭い3つの氷柱が飛んでくるがそれを体勢を崩しながらも躱すが

「ほり、まだまだ行くぞ魔法の射手 連弾・闇の3矢!」

「ちーーー！」

次に飛んできたのは黒い弾丸。口のままでは避けきれない！

「くわーーー！」

左手を黒い弾丸に向かい突きだし氣を飛ばし撃ち落とす

「ほー、遠当てか。多少は鍛えてこよつだな」

「やつや じつや」

「うつつかなあー、俺の使えるのってほとんどが近距離ばっかだし
遠距離系つてやつもの遠当てぐういだしな

「ならばこれならびつある！魔法の射手 連弾・氷の9矢!ーーー！」

こんどは3つの氷柱が飛んでくる

「いや無理かも・・・・しかたない

「いきなりだが使うしかないか

ポケットから一枚のカードを取り出す

「行くぜ、来い（アデアット）ーーー！」

カードが光り形が変わっていく

光が両腕を包み込み、光が止んだとき、俺の両腕には赤色の籠手の
らじきものが装着されていた

その籠手を着けた腕で氷柱を全て殴りつける

これこそが、俺が一度は望み一度は諦めた力

「つたぐ・・・・まさかアー・ティ・ファクトとして出てくるとわな」

全ての氷柱を殴り消した後、手の甲にはめ込まれた丸い宝玉が一瞬
きらめく

「・・・・それが貴様のアー・ティ・ファクトか」

「ああ、名を赤龍帝の籠手だ！」
ブーステッド・ギア

「ククククツ・・・・もつ少しは楽しめそうだな

エヴァは再び試験管を取り出し構える

俺も構えを取る

「行くぜ。ブーステッド・ギアー！」

『Dragon booster!』

手の甲の宝玉が輝きます

籠手に赤い龍の紋章と『？』という文字が浮かび上がり俺の体に力が駆け巡る

「氷爆！！」

エヴァの放つ凍気と爆風が俺を襲おうとするがそれを俺は余裕を持つて躲しエヴァに向かい駆け出す

「ちい！魔法の射手 連弾・闇の9矢！！」

迫りくる9つの黒い弾丸さつきまでは躰す事ができなかつたが

『Boost！』

宝玉からの音声で浮かんでいた文字が『？』から『?.』へと変わり、さらに体を駆け巡る力が増す

「遅え！」

9つの弾丸を交わしエヴァに向かい飛び上がる

目の前に迫る俺の姿にエヴァの表情が変化する

「な、なんなんだ・・・貴様は」

「行つくぜえええ！！」

『Exploration!』

宝玉から音声が響きその輝きが眩しいくらいに輝く

力が左腕に集まる感じがわかる

「レ、氷楯！！」

エヴァは魔法薬を使い氷の魔法障壁を出現させるが

「吹つ飛びやがれえええ！」

俺の拳は止まらずそのまま氷楯の上からぶん殴る

「あやああ！」

俺の拳の勢いは止まらず氷楯を破壊しエヴァを吹き飛ばす

「げ！ やべ

あまりの威力に俺自身も予想外だった

吹き飛びながらもエヴァは何とか体勢を整える

俺も何とか地面に着地する

あ、強化が切れて体力が一気に無くなつたわ

「くつ！ 貴様は一体・・・」

エヴァが俺に何か問おうとするが

「 「 」 」

轟音によつて言葉が止まる

「くつー戦いに没頭しすぎて感知が遅れたか」

「どうこつ事だヒヴァンジエリン」

「そのままの意味だ。貴様も来い」

「は？」

「さつそく警備の仕事だといつ事だ」

そのままエニアは俺の首根つこを掴むとそのまま音のした方へと飛び立つ

「ちよ、猫じやねえんだから」

「つぬせーーー猫の方がよっぽどかわいげがあるわーーー」

「わああああーーー」

結局、俺はそのまま運ばれて行つた

五時體田「月夜の出会い」（後書き）

ようやくブーステッド・ギアを出す事ができました。そして短いですが初のバトルシーン！書くのが初めてなんで上手く表現できているかはわかりませんが・・・

次回は予定通り来週になります。

今後ともよろしくお願いします

六時闇田「月夜の出会い」（前書き）

何とか書きあがつたので投稿します。
それとあとがきにてお知らせがあります。

六時間目「月夜の出会い」

夜天の空を一つの影が走る

「いい加減、その持ち方やめてくれないか？苦しいのだが」

「我慢しろ」

影は一つだが聞こえる声の種類は男女2種類の声が聞こえる

「見えてきたぞ」

「は？なに・・・・が・・・・なんだありや？」

六時間目「月夜の出会い」

現在も音の響く方に目を向けるとそこには大きな黒い影
近づいて行くにつれその影の形が次第にわかつていく

「あれって・・・クモ？」

「クモだな」

「大きいな」

「ああ、自然界ではありえない大きさだな。おそらく式神かなにか
だろ?」

黒い大きなクモが森の木々をなぎ倒しながら学園に向かつて進んで
いた

「止めなくていいのか?」

「やうだな」

などと普通に会話しているが俺は内心ビビっていた

あんなでかいクモなんて初めて見いたな

師匠と様々な場所を回り多くの物と対峙したがあのよつた物と対峙
した事は無かつた

「おそらく関西のまわし者だろ?」

「関西・・・・」

つまり狙いは木乃香といつ事か?

「ん?」

ふと、クモの前に動くものが目に入る

「なあ、エヴァンジエリン、クモの前で何か動いてないか?」

「ん？…………確かに…………」つまび黙のよひなものが動いているな

すると、森の中の少し開けた場所に一つの影が飛び出し月明かりで
その姿がハッキリ見える

「！お、あれってクラスの！」

「ああ、不味いな・・・・よし！お前が行け！」

۱۷

そう言つてヒヅアは俺を

卷之五

投げた！

「ええええええええ！」

「術者の方は私に任せろ」

とんでもなくいい笑顔で言葉を残し飛んでいく

ちょ、俺、飛べないんですけど

女の子に、しかも封印されたにしてはおかしいと思つくらいのスピードで投げられ次第にクモと追われていた女生徒との間に近づいていく

「ああーもう！ブーステッド・ギア！－！」

『Boost...』

ブーステッド・ギアを発動させ力を倍にする。力が体を駆け巡る
これで少しは着地の衝撃を和らげるかもしれない

「びっけえええ～～！」

ズン！－！といふ音と共にその場に着地する

「いてて・・・・アンにやろ、後でぶん殴つてやる」

特に大きな痛みは無く、足が少し痺れた程度だ。その場に立ちあが
りクモの姿を見つめる

クモの顔にある上に4つその下に3つある赤い目が俺の姿をじらえ
その動きを止める

「大丈夫か？」

背後に庇つた少女達に声をかける

アキラ side

「今日の歓迎会楽しかったねえ~」

「そうだね」

私は同室の明石 裕奈と部屋で今日の歓迎会の話で盛り上がっていた

「ネギ君もエリカちゃんもかわいかつたよね」

「そうだね。それに十歳の子達が先生って言つのも驚いたよね」

ネギ先生とエリカ先生、十歳で教師なんてす”ことと思つ

「驚いたと言えば、佐倉君にも驚いたよね。まさか女子中に男の子
が転校してくるなんてねえ~」

「うん」

そして、彼らと同じくの学園に来た佐倉 佑太君。共学のための
試験入学って話だけど・・・

「本当に共学化しちゃうのかな?」

「うへん・・・すぐって事じやないみたいだけど・・・どうな
んだねうへ~」

いきなり「共学になつた」って言われるよりかはいいけど

「女子中に男の子一人つてなんかかわいそまだね」

「やう? もしかしたら、ハーレム・バンザーリーとか、言つてるかも
よ」

裕奈は冗談で言つてるとわかっているが少し考えてしまつ

歓迎会の時にも少し話しては見たが、変に話しづらことこの訳は無く少し私達相手に照れているという感じだった

「あつ!」

いつの間にか裕奈がカバンを漁つていたが、急に声を上げる。どうしたんだろう?

「現国の教科書忘れた」

現国? · · · ああ、そう言えば宿題が出てたはずだ

「どうしよう、宿題忘れたら新田に怒られる」

生活指導員の新田先生、厳しいけどここ先生だとは思うが、裕奈や他の子達は苦手なようだ

「裕奈、私の一緒に見てやう?」

「アキラ～ありがとう～」

「はいはい」

抱きついてくる裕奈を慰めてから立ち上がり自分のカバンの中から教科書を探す

「あれ？」

もう一度よべ探すが

「…………」「めん裕奈、私も教室に忘れてきちゃったみたい・・・

L

「ええ！？」

まいっただなあー、私も宿題忘れて怒られるのもヤダし・・・

「しょうがない……アキラ、教室に取りに行こう」

「わざがにこの時間に学園に行くのは不味いと思つけど……」

「でも」のまほじや、鬼の新田に怒られちゃうよ

「それもそつだけど」

でもさすがに・・・・

「じゃ、早く行こー！アキラ！」

そのまま、裕奈につられ私は学園へと向かつた

学園に向かう途中

「アキラ、ここに森抜けると近道なんだよ」

ところづ裕奈の言葉に暗くて危ないかもという事も頭にはあったが今田は雲がほとんどなく満月なので大丈夫かなと思いそのまま森の中へと入つて行く

その事が大きな間違いだと気付いたのはその少し後だった

だいたい半分を過ぎたぐらいだろう。

「ここやー！」

「え！」

突如私達の前の地面が光だした。その地面で光る光の形はよくマンガなどで出てくる魔法陣によく似ていた。私と裕奈の足が止りその光景を眺めていると、その中心に黒い霧のような物が現れ、次第にそれは大きくなつていいく。そして、霧の中心当たりの7つの赤い目が光つた。何故、それが目だとわかったのかはわからない。でも、私の中は一つの感情に埋め尽くされていく

”怖い”

それは、私だけではなく

「ちよ、ちよっとヤバくない？」

裕奈も同じく”怖い”と感じたんだろう

「裕奈ー！」ひーちー。

裕奈の手を引き来た道を駆け戻る

早く逃げなきゃ！

私の頭の中はそれでいっぱいだった。

「なんであんなに大きなクモがいるの？」

「わかんないよ」

とにかく私達は走った

しばらく走ると少し空けた場所に出る

「わっー！」

後ろの裕奈の声に振り向く

「つと、大丈夫」

転びそうになつたのを何とかこらえたよつて倒れはしなかつたが少し足が止まつてしまつた

その少しが致命的だつた

裕奈の後ろに迫つて来ていた巨大なクモが裕奈のすぐ後ろに来ていた

「裕奈ーー！」

「え？」

私の声に裕奈も自然に後ろを向きその巨大なクモの姿が目に移る
私の眼とそのクモの目が合つ

「い、いや・・・・・」

「あ、ああ・・・・・」

体が震えているのがわかる。裕奈も同じく震えている

私達は今、恐怖に支配され体が震え動かないのだ

ゆっくりと私達との距離が縮まる

「た、助けて・・・・・」

私の声は震えていた。誰に助けを求めたかはわからないが自然との言葉が出てきた

「お願い・・・・・誰か・・・・・」

裕奈からも震える声で助けを求める声が聞こえる

そして、その声は

「・・・えええええ！」

遠くから近づいてくる声と共に・・・・・

ズンっといつ目の前に何かが落ちてくる・・・・・

「いてて・・・・アンにやる、後でぶん殴つてやる」

落ちてきた何かは声と共に私達を背に庇うように立ち上がる・・・・・

「大丈夫か？」

そして、耳に聞こえた声は聞き覚えのある

女子中等部に転校生してきた男の子

「さ、佐倉・・・・君」

佐倉 佑太君の声だつた

六時間田「月夜の出会い」（後書き）

六時間田をおどびけしました。ここで一つ訂正があります。実際のハイスクールD×Dでは赤龍帝の籠手は左手のみでしたが私の小説では両手という事にさせていただきます。これは主人公の戦闘スタイルが無手のため片手だけでは防御が難しいからです。よって、本作品では片手ではなく両手という事にしました。

そしてもう一つお知らせが。現在、次の話を執筆中ですが、来週はGWという事でバイト先に「特に予定はありません」と言つたところGWフルで ireられてしました。よつて、来週中は今書いているのとは別で最低で一本投稿できるかどうかなので、もしも私の小説を楽しみにしている方がいらっしゃったら申し訳ないと思つております。

七時題田「月夜の逃亡劇」（前書き）

なんとか書きかけが書き終わりましたので投稿します

七時體田「月夜の逃亡劇」

「ち、佐倉・・・・君」

背後から聞こえるのは大河内 アキラさんの声

「おうー！佐倉君だ」

「な・・・・んで・・・・・」

続いて明石 裕奈さんの声も聞こえる

「なんでも何も助けに来たんだよ」

異形のクモから視線をそらす間に答える

まあ、来たといつより飛ばされたと言つた方が正しいが

「先手必勝！」

片手の掌をクモに突き出し遠当てを顔周辺にぶつける

「まだまだいくぜ」

くりと連続で遠当てをくらわす・・・・・そして

「よし、逃げるぞ」

「 「は？」」

一人を脇に抱えその場から走り出した

七時間目「月夜の逃亡劇」

「え？・え？」

「ちよ、ちよっとー」

俺の行動に驚いたのか二人とも困惑したような声を上げる

「な、なんで逃げてるの

「ふ、普通あそこまでカツ 「よく登場したんならそのまま倒したりとか・・・」

「明石・・・・・だっけ?」

「うそ」

「普通に考えてあんなに勝てると思つ?」

「…………」やははは…………無理だね

「だろ」

話しながらも走り続ける。ブーステッド・ギアの力のおかげで通常の倍の速度で移動できるが現在は全力より少し抑えた状態で背後に神経を集中しながら走っている。俺が全力で走つたらさすがに二人にはGがキツイだろうし誤つて舌を噛んだりしてしまうかも知れないしな

「それで、佐倉君何処に向かってるの？」

「あ～…………とつあえず適当に走り回つてしまひつかと…………」

アキラの問いかに少し間を空けながら答える

今は森の中を縦横無尽に駆け回つている

エヴァが術者を向とかするつて言つてたからといつあえず時間を稼いでいればおそらくあのクモは消えるはずだろつ

「それともつ一つこい？」

「どうぞ」

「せつや、手から出でての大きなクモの顔に当たつたのひどくな」

「あ～～

これは……言つてもいいのかな？…………魔法じゃないし大丈夫だよな

「やつるのは遠当ひつて言つて武術の一種。気を打ち出す技だよ」

「武術？」

いまいち理解しきれないみたいだが

「まあ、やつこりもあるつてだけ……」「ちよ、ちよ、佐倉君！」なんだ明石っ？」

裕奈が焦った声で会話を遮る

「なんかさつきのクモがすん」「勢いでこっちに向かってきてるんですけど」

「え？」

裕奈の言葉にチラリと後ろを振り向くとあのクモがすん「勢いで8つの足を動かしながら走つてきている

なんか、ものけ姫で似たような場面を見たことがあるような……。
ありやタタリ神か

先ほど見た時と雰囲気が違う。先ほどまではこちらを探つてこない感じだったが、今はこぢりの事を完璧に獲物と認識しとらえようとしてくる

「…………やつちのひきせひをしたか？」

「どおさんの一あきらか私達が追われてた時より早いんですけどー。」

「ん~~~~~どりすつか~」

裕奈 side

「ん~~~~~どりすつか~」

彼の言葉を聞いて私は少し呆れてしまっていた

彼は「」の状況をわかっているのだろうか

実際にはあり得ない大きさのクモのようなもの追われて逃げている
のに彼からはそんな感じは感じられなかつた

何とかできるところ余裕、もしくは何も考えていいか……お
そらく後者だと思つ

「どりすつか~じゃないよー！」

はあ~、最初私達の前に助けに現れた時は不覚にもドキッとしてし
まつた

だって、あの時の彼はまるで物語に出てくるヒロインを助けに来た
主人公みたいだったのに……今は情けなく逃げ回つているだけ

「どうあえずは、逃げながりやるわ」

「なんてマイペースな・・・」

アキラも彼の態度に若干呆れているようだ

正直、私はこの時なんでこんなことを考えていらっしゃる余裕があるのかわからていなかつた。やつきまで恐怖で体がおもづ様に動けなかつたハズなのに

「よつと」

彼はそんな声と共にジャンプをするが

「へ?」

「あやー。」

おもわず彼に抱きついてしまつたの高さが異常だった

「わっー。あらー。」

「た、高いって!」

田の前には囲まれていたハズの木は無く一面の星空だった

さうしてこな先ほどまで私達を襲つてきたクモの姿が・・・やつぱりありえない大きさだつて

「ひとつ」

クモを飛び越えて着地

「と、飛ぶなら飛ぶつて言つてよね」

「悪い悪いそんな余裕なかつた」

「口うと笑つた彼の顔に再びドキッとしてしまつた

だ、駄目よ私にはお父さんが・・・・でも・・・・

再びすく速さで走りだす

「・・・・高飛び・・・・いや、走り幅跳びで世界取れるかも」

・・・・なんか調子狂つな・・・

side out

いや～危なかつたのんびり話してたらいつの間にか足の一一本が迫つてきてたし

おもわず飛んだら思つた以上に高飛び出たな・・・・もしかして

「・・・・高飛び・・・・いや、走り幅跳びで世界取れるかも」

などと考えていると、背後から嫌な感じがしたので反射的に横へと

飛びと次の瞬間先ほどまでいた場所に白いものが飛んできた

「わ！」

「何アレ？」

そしてその白いものは着弾した地点からクモに向かって細長く延びていた

「あれって……」

「もしかして……」

「糸……かな？」

などと話していると今度は連続で白い糸が迫つてくる

「つま危ねえって」

それを除けながら逃げるがそのたびに糸の量が増えていき次第に追い詰められていく

それにもしても……

「遅え……」

あんの口リ婆！まだ術者見つけられないのか

(小僧……貴様今を変な事を考えなかつたか?)

「イ、イエナンニモカンガエテナイデスヨ・・・・・つてキティか
！」

「?キティ?」

(なつーき、貴様何故その名を知つているー)

あ、やべつい

(まあ、いい。だが後できつちつ説明して貰つからなーいいなー)

拒否権はなしですか・・・・・

(それと術者は捕えた)

「なら、あれを早く消すとかして貰えません?結構いっぱいぱいなんですよ」

「?せつきから一人でなにいつてんの?」

どうやら俺にしかエヴァの声は聞こえて無いらしい

このままじゃ、変人と思われるんじゃね?

(そのことだが、こいつが自分の力量も考えずに無理やり召喚した
らしく自分では送還できないらしい。だから貴様が何とかしろー)

「は?」

(私はもうほとんど魔力が残っていないからな貴様に任せると)

「ちょ、待てって！」

強制的に話を終わらせられた

「ちつ！絶対後で一発ぶん殴つてやる」

「どうしたのさつきから？」

「頭大丈夫？」

独り言が多くて裕奈に頭の心配をされました。ちくしょう

「気にはんな。それと頭も大丈・・・・ちい・」

「「さやー。」」

抱えてた二人を軽く投げ飛ばす。やべ、怪我とかしてないかな

次の瞬間右腕に白い糸が絡みついてくる

「「佐倉君ーー。」」

「二人とも大丈夫か？」

「う、うん」

「ちょっと擦りむいただけだから」

大きなケガはなかつたか

「二人ともすぐここから逃げるんだ」

右腕に続いて左足にも糸が絡みついてくる

「でも…」

「ここにいると危ないからさ」

その間にも迫つてくる糸を遠当てで撃ち落としていく

「それは佐倉君だつて」

「俺は大丈夫だから」

「そんな、やっぱ」「いいから…」・・・

つい怒鳴ってしまう

「そこにいる方が邪魔だ」

少し、声のトーンを落として言つ

その言葉にゅつくりと立ち上がり一人はその場から走り出して行った

これで大丈夫だ。さつきからあいつは俺に向かつてしか糸を吐き出
していない

つまり、途中からあいつの標的は俺一人だったんだ

これであの一人は無事だらう・・・

これであの一人は逃げきれるだらう・・・

これで・・・

遠当てで防ぎきれなかつた糸が今度は右足に絡みつく

これで・・・

「テメエをぶつ飛ばせるぜ」

俺の中のスイッチを戦闘モードへと切り替える

「覚悟しろよクソ虫が」

アキラ side

邪魔だ・・・そう言われ私は再び裕奈と二人で森の中を走つている

「・・・」

先ほど今までよく喋つていた裕奈も無言で走つている

理由は私にもわかる・・・不安なんだ

さつきまで一緒に逃げていた佐倉君がいないだけでこんなにも不安

になつてゐるんだ

そして、あの場に残つた佐倉君が心配なんだ

あの場で彼にあそこまで言われなかつたら私はその場に残つたまん
まだつただろう

多分彼はそれをわかつた上で私達にそう言い放つたのだ・・・
けど

裕奈の足が止まつつられて私の足も止まる

「・・・・・アキラ」

「・・・・・うん」

私にも裕奈の考へてゐる事がわかつた

「「戻るついー」」

やつぱり心配だ

何もできないかもしれない

本当に邪魔かもしれない

けど、このままでは見捨てるみたいで嫌だつた

六時題材「月夜の逃亡劇」（後書き）

次回の投稿は前回あとがきに書いたとおり今週中は難しいと思いま
すができるだけ早めに投稿できるよう頑張ります

八時間目「一日の終わり」（前書き）

だいぶ遅くなりましたが八話が完成したので投稿します

八時闇田「一日の終わり」

裕奈 side

アキラと二人、森の中を駆けていた

向かう先は私達を逃がしてくれた彼の元

邪魔だと言われあの場を後にはしたがやっぱり心配だ

(それはアキラも同じみたいだし)

私達があそこに戻つても何ができるかはわからない

もしかしたら佐倉君の言つ様に本当に邪魔になつてしまつかもしない

だけれど、もし佐倉君がこのまま帰つてこなかつたらと思つてしまふと、私は・・・いや、私達はクラスメイトを見捨てた事になる

周りの人たちはそれは違うといつかもしれない

だけど私達の中にはその事が残り続けるだらう

まだ、半日しかたつていないが佐倉君の事が少しづかつた

マイペースで少し抜けてる男の子

そして、優しくてあの時の笑った顔はあんな状況だった私を安心させてくれた

(だから・・・)

そう考えを巡らせ森の中を駆けもう少しで佐倉君と別れた場所にたどり着くといつとこるので・・・

「そこから先は通行止めだ。明石裕奈、大河内アキラ」

「え？」

後ろから聞こえた声に驚く。その声は聞き覚えがあつたからだ

振り向いた先にの声の主は私達の考えていた人物

「悪いが、お前らをここから先に進めるわけにはいかんのでな」

エヴァちゃんと・・・

「申し訳ありません明石様、大河内様ここから先は危険なので」

茶々丸さんがいた

佑太 side

アキラと裕奈をこの場から逃がしてからは膠着状態が続いていた

クモの野郎は俺の様子が変わった事に警戒を強めており俺はと叫び

この糸をどうやって外すか・・・

この状態からの脱出を考えていた

今の状態は両足と右手が糸によりあいつと繋がった状態だ

しかし、逃げ回り時間を稼いでいたのでアーチファクトであるブーステッド・ギアの効果で力は漲っている

「やつぱ、今はこれしか考えつかいかな」

右手に絡まり繋がっている糸を左手で掴み思いつき引つ張る

「おもいっきりぶん殴るーー！」

俺の引く力に対し巨大クモは踏ん張るがブーステッド・ギアで力が上がった俺には関係ない

クモの抵抗も一瞬で終わり体が浮き上がりこちらに勢いよく引き寄せられて飛んでくる

ପ୍ରକାଶକ ପତ୍ର ଏବଂ ମହିନେର ପରିଚୟ

飛んでくるクモに対しタイミングを合わせて左の拳を叩きこむ

殴られたクモは吹き飛んでいくが・・・・・

「あり?」

同時に繋がっていた右手と両足も一緒に引っ張られていく

一
あれえええええ

そのまま俺は巨大グモと同じ方向へ飛んでいく

木々をなぎ倒して行くクモの勢いが次第に治まっていきようやく止まるがダメージが足らなかつたのか消えるまでには至らなかつたが

「ああああああああ・・・がつ！」

二二一

勢いが治まらないまま突っ込んできた俺の頭突きが止めとなり声にならない叫び声を上げ消えていった

「いきいき！」

頭の痛みを堪え立ち上がると

「終わつたか小僧」

「まあな」

背後に空から降りてきたエヴァに声を掛けられた

しかし、エヴァ以外にも数人の気配が感じたので振り向くと

「は?」

「じんじむは」

茶々丸さんと

「やー。」

「どもー。」

茶々丸さんに抱きかかえられていたアキラと裕奈がいた

時間はエヴァ達と一緒に遭遇したところにまで戻る

「え、エヴァちゃん？」

「茶々丸さんもどうして」

「ただの見学だ。茶々丸はただの付添だ」

あの小僧の本気が見れるかもしれんからな

「それよりも先に進むなって……」

「言葉の通りだ大河内アキラ」

「でもエヴァちゃん！佐倉君が！」

「あの小僧なら大丈夫だ。だからガキはとつと帰れ」

「ガキって…………エヴァちゃんの方が見た目子供じやん

「ぐつ・・・う、うるさい！」

人が気に入っている事を……成長しないのだからしじょうがないだろう

「いいかよく聞け、ここから先は貴様らからしてみれば非現実の世界だ！命の保証は無い世界だ」

「…………」「

「貴様らのよつな平和ボケしたよつな奴ら」は過酷過ぎる世界…」
「から先はそういう世界なんだ」

少し、昔を思い出してしまつ。畠忘無しに放り込まれ力なく逃げ回る事しかできなかつたあの頃を

「ヒガアちゃん…・・・」

「ヒガアンジヒロンさん…・・・」

「わかつたら、せつぞ「佐倉君は

最後の通告を大河内アキラが遮る

「佐倉君はその世界で生きているんですか?」

「・・・・・・わからん」

あの小僧が何者なのかは、まだハツキリとはわからぬ。ただ一つ
わかる事は

「だが、これから先ほぼ確實にその世界を歩んで行くだろ?」

だからこそ私は知る必要がある

あの小僧がどういう人間なのか

だからこそ、あの妖魔をあの小僧に押しつけ力の一戻でも多くをこの田にしようと考へたのだ

「そんな・・・」

「・・・」

その言葉と共に黙つてしまつ

ええい、こんなことしてゐる時間はないところの・・・仕方ない

「知りたいか」

「「え?」」

「世界の裏側をあいつが生きていいくであらひ世界の一端を知りたい
かと聞いているのだ」

「佐倉君の」

「生きていく世界・・・」

時間が惜しいのとただの気まぐれだが

「特に明石裕奈、貴様に関してはまるつきつ無関係とこつ訳ではな
い」

「え?」

「私が?」

そうだ、こいつの両親は関係者だ

「もし、これから見た事を忘れたいと思つたならば私が記憶を消してやる。そうすればお前たちは今までと同じ日常に戻れる。だが、知つてしまつたら普通の生活に戻るのは難しだう」

無理といつわけではないからな

「まずは選べ。このまま全てを忘れるか。それとも私について来て別の世界を垣間見るか」

「…………」「

少しの沈黙が過ぎ

「私はエヴァちゃんと一緒にいくよ」

「裕奈ー。」

先に答えを出したのは明石裕奈だった

「私は全く無関係つてわけじゃないんでしょ」

「ああ・・・いづれは知る事になるかもしかん・・・が知らないままでいるられる可能性もあるだ」

「遅かれ早かれ多分知る事になつたと思つよ。私つて好奇心みたいなの強いから」

「・・・私もエヴァンジロリンさんについていくよ」

「アキラ・・・」

大河内アキラも直りの答えを出した

「ほんの少しだけど知っちゃたもん。だから確かめたいエヴァンジ
ヒリンさんや佐倉君のいる世界を」

「それがお前達の答えか・・・」

「「「うんー。」」

二人とも頷く

「いいだろう！見せてやろうお前たちの住む日常の裏側を！・茶々丸
！」

「了解しましたマスター」

私の言いたい事を理解し明石裕奈と大河内アキラの二人を両脇に抱
える

「わっ！」

「ちょ、またあー！」

なにか騒いでいるがそんな事は知らん

「さあ、行くぞ！」

茶々丸と共に月夜の空へと飛ぶ

少し飛ぶと小僧と妖魔のクモとが戦っているのが見えた

「あー・アキラ・・あそー」

「佐倉君・・・良かつた・・・」

一人もあいつを見つけた事でまずは一安心といつといろか

途中から合流した茶々丸から聞いた状況とまったく変わっていなかつたので少しの間膠着状態が続いたのだろう

すると、奴は唯一自由な左手で自分の方へとクモの糸を引っ張ったのだ

あれほど巨大なクモなのだから普通なら引き寄せる事などできはないが

「なつー！」

妖魔のクモは引きずられるどころか浮き上がり引き寄せられていった

そしてタイミングを合わせ殴りつけると妖魔は元いた方へと吹き飛んでいく

「うそー！」

「すごい・・・」

この一人は驚きを隠せないでいた

今の奴の行動はどんな武道の素人でも子供でもわかる戦い方だ

糸の先にしている物を引っ張ってタイミング良く殴る

ただそれだけだからこそ奴が普通の人間と違つといつ事がハッキリわかる

普通の人間はあんなモノを引き寄せる事は出来ない

「あれって・・・佐倉君？」

「・・・たぶん・・・」

この一人にも奴の異常さに気が付いたのだろう

そして、今の奴の戦い方で一つわかった奴は

「強力な一撃を持つパワータイプか・・・」

「こまではよかつた

このまま終われば末恐ろしい奴という判断で終わつたのだ

だが・・・

「あれえええええ」

繫がつたままの糸に引かれ奴も妖魔と一緒に飛んでいく

「・・・・・」

呆れて何も言えん

「あれって佐倉君だよね？」

「間違いなく」

さつきまでの見方と一八〇。変わり元の評価に戻つたらしい

そして止めの頭突き

それにより妖魔は消え去つたが私の中での奴の評価はわけのわからん奴という評価に変わった

「…………とりあえず奴の元へと行くか。茶々丸」

「了解しました」

戦闘が終わり頭を押さえている奴の元へと向かつた

「終わったか小僧」

「まあな」

空から降り奴の背後に立つ

「は?」

そして、振り向いた奴は困惑の表情を浮かべていた

視線の先には

「！」といひは

「やー。」

「どもー。」

茶々丸と抱きかかえられている大河内アキラと明石裕奈

ああ、そうか

「！」といひは私が連れてきた

s i d e o u t

。

「！」といひは私が連れてきた

何やつてんだよ！」といひはーー！

「言つておぐがこいつらが貴様のところに戻りつとしたのを保護してやつたんだからな」

「え？」

一人を見ると茶々丸さんに離してもらい立っている

「どうして・・・」

「そんなの心配だからに決まってるじゃん」

「俺なら大丈夫だつたら」

「それでも・・・・心配したんだよ・・・」

「・・・・」

二人の言葉に何も言えなくなつてしまつた

こんなに心配してくれるとは思つていなかつたから

「・・・・ありがとう」

俺の言葉にキヨトンとした顔になるが次第に笑顔に変わり

「なんで佐倉君がお礼を言うの」

「お礼を言わなくちゃいけないのは私達だよ」

「助けてくれてありがとう」「」

笑顔で感謝の言葉をくれた

「気にするなつて。俺がそうしたかったから行動しただけだから」

「もついいか

俺達のやり取りを一通り聞いていたエヴァがキリのいことひりで声をかけてくる

「まずは佐倉佑太。とりあえずはよくやつたと言つてしまつ……最後は何とも言えんがな」

「ははははは・・・・・・・面白ない」

「途中まではかっこよかったですのに最後のはにゃ～

「あはは・・・・・・・

バツチシ一人にも見られましたか・・・・・・

「そして、明石裕奈、大河内アキラ。お前らには一晩やる今後どうするか明日の朝までに決める。明日の朝、私の家で答えを聞かせて貰う」

「～答えて何の～？」

「こいつらが今日の事を忘れるか覚えたままこいつら側の世界に来るところだ」

「なー」

まさかのことじで驚くがよく考えればどうしてこう後半年ぐらいで知る事になるんだっけ？

「うん」

「わかつたけど、私達エヴァンジエリンさんの家って知らないんだけど」

「茶々丸を迎えに寄こす佐倉佑太貴様も同様に三人で明日の朝家に来い。貴様にも色々と聞きたい事もある」

えつと・・・・・

「拒否権は?」

「あると思つてているのか?」

ですよね~

「とりあえず今日はもう帰れ。私は爺のところに行く

「わかつた。それじゃ帰ろうか明石、大河内」

「うん」

「わかつた」

その後特に一人は真剣に考え方をしていたからか会話も無く俺達は女子寮に戻った

こつして俺の長かった転校初日は終わった

八時間目「一日の終わり」（後書き）

どうも、作者のH.C.Iです。連日のバイトと大学の疲れでなかなかパソコンに向かえなかつたため投稿が遅れてしまつたことをまずは謝罪します。

とりあえずようやく転校の初日が終わりました。バトルシーンが短すぎて本当にすみません。しかも主人公かつこつかないし・・・正直バトルシーンは書きなれてないので読みづらい点もあると思いますがそこは皆様の広い心で受け止めてやってください。それでは次回も頑張りますのでよろしくお願ひします。

九時間目「一人の決意と仮契約」（前書き）

編集しました 5月31日

九時間目「一人の決意と仮契約」

「ふあ・・・・・六時・・・・・か」

本当だつたらもつ少し寝てゐるんだが

「エガアに呼ばれてるんだつけ」

布団の中で体をほぐしながら脳を覚醒させる

「朝飯でも作るか」

布団から出て備え付けのキッチンへと向かう

数分後・・・・・

コンコン

「はい」

「茶々丸です」

「どうぞ、開いてますよ

「しつれいします。おはよーひー」「れこまゆ佐倉さん

「おはよー佐倉君」

「おはよー、佐倉君」

「おはよう絡繆、明石、大河内」

茶々丸に続き裕奈とアキラが入ってくる

「マスターがお呼びですので一緒に来ていただけますか」

「わかった」

茶々丸について行こうと立ち上がるが・・・

「うわー何これ」

「どうしたの裕奈」

いつの間にかキッチンの方に入り込んでいた裕奈の驚く声が聞こえ
アキラもキッチンの方に行くと

「これは・・・酷いね」

アキラもその状態に驚いた様だ

なんか変なところでもあったかな?」

「佐倉君どうしたのこの電子レンジ?」

ああ、あれね

「手軽にゆで卵作るついで思つたらそうなった」

「・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

あれ？

「どうかした？」

「こや・・・・・」

「えつヒ・・・・・」

一人とも氣まずそうだ

「佐倉さん、電子レンジではぬで卵は作れません爆発してしまってます」

なに！

「わうなのが？」

「はー」

俺達のやり取りに裕奈とアキラは呆れたようだ

「もしかして佐倉君って・・・・・」

「料理ができない？」

ぐう・・・・やう言えば前の世界でもほとんどの外食がコンビニ弁当だ

つたもんな。一度、料理した時なんか江利香さんと一緒に所に立つなどしめられたつけ・・・

「どうあえず片付けは置いといてエヴァのところに行け」

「やうですねマスターもお待ちしますし」

話しきを区切り俺達は茶々丸に連れられエヴァの家に向かつた

九時間目 「一人の決意と仮契約」

「マスター佐倉さん達をお連れしました」

「遅い！何時まで待たせるつもりだ！」

最初の言葉はお怒りの言葉でした

「いろいろとあつたんだよエヴァンジロンド、俺に話してなんだ」

「ふん、お前への話は後だ。先に明石裕奈、大河内アキラ、十分考
えてきたのだな！」

「もちろん」

「うん」

一人が先ほどまでとは違つ真面目な表情になる

「それでは答えを聞かせて貰おつ。だが、この選択によつてお前ら
の未来が決まるそのつもりで答える。まずは・・・貴様からだ大河
内アキラ」

エヴァがアキラへと視線を向ける

「私は・・・」

「私は・・・・忘れないよ」

「これが私が一晩考えて出した結論

「何故だ?全てを忘れれば今までと変わらない平穏な生活があるのだぞ」

エヴァンジエリンさんの視線が少しきつくなる

「たしかにそうかもしれない」

たしかに、全てを忘れてしまえば幸せかもしれない

今までと同じ生活が平穏な生活がそこにはあるかもしれない

でも・・・

「・・・知つちやつたから・・・佐倉君もエヴァンジエリンさんの生きている世界を。私達の生活の裏にある世界の事を。それに・・・」

「それ?」

改めて佐倉君を見る
「佐倉君はその世界で生きて行くんでしょ?」

「ん?まあ・・・な

「だから、私は・・・彼を・・・佐倉君を支えたい。何ができるかわからないけど心配だもん」

「――――

私の答えに驚いて・・・る?・・・あれ?なんで佐倉君あんなに顔が赤くなってるんだら?・?

「へへへへ、そつか。いいだろ?貴様の答えはわかつた・・・が」

「?」

「最後の言葉はまるで告白のようだったな

「へ?」

告白?あれ?私・・・・・・

「一・ひ、違うそうこうの意味じゃ・・・・・・・・・・

わ、私なんて事言つちやつたんだら?って、裕奈なんか視線が怖いよ

「ああ、わかつてる。言葉のあやつてやつだ?気にしないから大丈夫だって」

「う、うん・・・・

（気にしないって・・・それはそれでなんか嫌だな・・・・

でも、あれが私の本当の気持ちだし……エヴァンジョンさん
に告白つて言わっても嫌じゃなかつた

もしかして私、佐倉君の事……

「—————」

「いつまで顔を赤くしている大河内アキラ。貴様はこちいらの側に來
るという事だな」

「う、うん！」

これが私の答え彼を・・・佐倉君を支えたいんだ

「そりか、なら次は明石裕奈。貴様はどうある

side out

裕奈 side

エヴァちゃんのアキラが佐倉君に告白したようだと聞いた時、少し
ムツとした

なんでだろう？私の好きな人はお父さんのハズなのに・・・

確かに佐倉君は嫌いなタイプつてわけじゃないけど・・・

アキラは佐倉君の事を支えたい、心配だつて言つたけど私はどうな
のかにや～？

「次は明石裕奈。貴様はどうある？」

「私も忘れないよ」

これは私も決まつていた

「・・・大河内アキラが「あら側に来るからといった理由でつと
いうわけではないだろうな」

「うん」

アキラも忘れないと言つた時、私はやつぱりと思つた

昨日の晩、部屋に戻つた時にアキラはお互い結論は自分自身の中
出してエヴァちゃんに言つまで聞いたりしないといつ様に決めていた

たぶん、アキラはあの時既に決めていたんだと思つ

あの提案も自分の答えを聞いた私が流されて決めないようにしてく
れただと思つ

やつぱりアキラは優しいな

それに

「私も知っちゃつたし、それに・・・私はまったく関係ないって
わけじやないんでしょ」

「・・・・・ そうだ」

「だつたら尚更だよ。私はその事も知りたいし・・・・・ 佐倉君の事も気になるしね」

言つて気づいた

そうか、私は佐倉君に引かれ始めてるんだ・・・

助けて貰つたあの時から・・・

一日惚れに近いかな

だから・・・

「だから私もアキラと一緒に佐倉君を・・・ 佑太を支えるー・」

負けないよアキラ

side out

佑太 side

「・・・ いいだろう」

二人の言葉に正直俺は驚いていた

原作を知っているのでいざれこちら側に関わってしまうという事はわかつっていたがこの時期にもう関わってしまうとは・・・これも俺やエリカさんというイレギュラーの存在の影響か・・・なら、このままってわけにはいかないよな

「エヴァンジエリン、頼みがある」

「なんだ」

「二人に戦い方を教えてやつてくれ」

「え？」

「戦い方？」

二人は首をかしげているが

「こちら側に関わる上で必要な事だ」

「・・・・・」

二人は互いに視線を合わせ納得したように頷いた・・・が

「・・・・・断る」

エヴァから出たのは拒否の言葉だった

「ええ～いいじゃんエヴァちゃん

「嫌だ」

「セイをなんとか・・・」

「私は悪い魔法使いだぞ」

「せつまえばそつだつたな、なら

「タダとは言わんぞ」

「ほひ、取引とこづわけか・・・それで何を差し出す」

「情報を一つ

「ダメだ。貴様のその情報がどれほど価値があるかは知らんが・・・」

「サウザンドマスター・・・ネギの父親に関しての情報だといつたら?」

「こいどー一つの原作知識というカードを切る

「なんだとーー!」

「ネギ君の・・・

「お父さん?」

どのみち新学期には知る事になるんだし大丈夫だろ？

「ああ、どうするエヴァンジェリン？」

「……いいだろう。明石裕奈、大河内アキラ貴様ら一人に戦い方を教えてやる」

「やつたあ！」

「お願いします」

「これで、一応は大丈夫だろ？」

「本格的に始めるのは放課後からにしてやる……が、とりあえず最初にやっておく事がある」

「やつておく」と？』

「パクティオ
仮契約だ」

「パクティオ　？」

「そうだ、パクティオ　つまり仮契約だ。魔法使いにはミニーステル・マギと呼ばれるパートナーがいたほうがいいと言われていてな。魔法使いは詠唱中に無防備になる途中で攻撃を受けてしまえば詠唱は途切れ呪文は完成しない」

「つまり、その間の無防備な魔法使いを守るのがミニーステル・マギと呼ばれる存在……」

エヴァの説明からミニーステル・マギがどうこうものかわかつたらしい

「その通りだ大河内アキラ。しかし、規則としては契約できるのは一人だが、お試し期間として複数の人数と契約できるのが仮契約といつやつだ」

「でもエヴァちゃん、私達戦つたりする事は出来ないいんだけど」

「そうだな、それはこれから鍛えていくとしてだ、仮契約するといくつかの能力が得られる。その中の一つパートナーの存在能力を引き出すことができる固有のアーティファクトが今回の目当てだ」

「アーティファクト?」

「その人専用の武器つて考えればいい。昨日俺が付けていた赤い籠手がそのアーティファクトだ」

「ああ、あれ」

「なに、なに! あんなカッコイイ武器が私達も貰えるわけ」

「まあ、簡単に言えばな。だがエヴァンジェリンもしゃアーティファクトが戦闘向きで無かつたらどうするんだ?」

「そんなもんその時になつたら考えるさ。当面の目標は体とアーティファクトの使い方を覚える事だな」

「そうか」

「それではさつさと済ますぞ、茶々丸!」

「準備はできていますマスター」

姿が見えないと思つていたら仮契約の準備を進めてたんですね

「ところでエヴァちゃんその仮契約つてどうすればいいの?」

「そういえば言つて無かつたな。なに簡単な事を仮契約の魔法陣の上でキスをするだけだ」

「「あ、キス!?!」「

エヴァは意地の悪そうな笑みを浮かベアキラと裕奈の二人は顔を真っ赤にして驚いている

エヴァの奴ワザと言わないで反応を楽しんでいるみたいだな。それにしても

「契約するのはエヴァなんだし、女同士なんだから少し過激なスキンシップって事で特に問題は無いんじゃないのか?」

「え?」

「エヴァちゃん?」

何故一人とも少し残念そうな顔をしているんだ

「何を言つてるんだ貴様は?一人と契約するのは貴様だぞ」

「は?」

この幼女はいきなり何を言つてゐるんだ？

「だから大河内アキラ、明石裕奈は貴様と仮契約をさせると言つて
いるんだ」

「いや、俺魔法使いじゃないし、魔力もほとんどないから無理だと
思うんだけど」

ゆえに俺は魔法使いにはなれず落ちこぼれと言われた・・・・・懷
かしい話だ

「いや、僅かながらにも魔力があれば大丈夫だ。ほら、わざわざせ
んか」

背中をおもこつきつ押し押され魔法陣の中に押し出される

「それでは明石裕奈、大河内アキラの順でやれ」

エヴァの言葉にまずは裕奈が魔法陣の上に進み俺の前へと進む

「こやはは～これ、なんか変な気分になるね～」

魔法陣の効果で裕奈が少しもじもじしてゐるが、急に真面目な顔になる

「私、強くなるから佑太の事を支えられるへりへり・・・・」

「・・・上等だ」

自分の顔に笑みが浮かぶのがわかる

裕奈との距離が次第に縮まり、唇が重なる。その瞬間足元の魔法陣が一層輝きを増す

仮契約

「にやはは・・・なんかてれるにやは・・・・・・・一応ファーストキスだからね」

そう言うと顔を赤くしたまま裕奈は離れていき入れ替わりにアキラが魔法陣の上へと進みでる

「私も裕奈と同じ・・・・・」

その言葉を口にしたアキラの表情も裕奈と同じく真剣だった

「支えるから・・・・・佐倉君が・・・ううん、佑太君の隣に立てるようになつて・・・一人で佑太君を支えられるようになるから

「ああ・・・期待して待つてるぜ」

アキラの唇が俺の唇と重なる。再び魔法陣が光り輝く

仮契約

「・・・・・私も・・・・・」これがファーストキスだから

こうして、俺は一人と仮契約を交わした

「本格的な修行は放課後からだ。放課後またここに来い」

「わかった」

「部活も無いから大丈夫だよ」

「わかつたらさつとと学園に行け時間が無いぞ」

「ああ！ 本当だ」

「急いづ裕奈」

「うん！ 佑太も早く」

「後から追い付くから先行ってくれ」

「わかった」

「遅刻しないでね」

「そう言い残しエヴァの家から走り出ていった

「それで、何故貴様はここに残った？」

「いや、聞きたい事があるって昨日言つてなかつたか？」

のために呼ばれたハズだつたんだが

「ああ、その事か特には無いぞ」

「無いのかよ！」

「じいて言えばあいつらの答えを貴様にも聞かせておきたかっただけだ。ああ、後ついでに一人の答え次第で、仮契約させるつもりだつたからな」

「そうですか」

確かに重要な事だけさ・・・・・なんかな

「ほかに用がないのなら貴様もさつあと学園に行け」

「ああ、もう一つあるわ」

「なんだ！」

そんなイラつかなくとも

「知りたいんだろうネギたちの父親の事」

「・・・・・」

「簡潔に言おうサウザンドマスターは生きている」

「なに！？」

おつかれ、すばらしい喰いつきっぷりだな

「十年前に死んだと言わっていたが、六年前ネギたちはサウザンドマスターに会い助けられたらしい」

「奴が・・・サウザンドマスターが・・・生きていたのだと」

エヴァの瞳には僅かに涙が浮かんでいた

「フ・・・ハハハハ」

生きていると知つて余程嬉しいのだろう本当に嬉しそうに笑つてる

おつと、そろそろ俺も学校行かなきゃ

九時間目「一人の決意と仮契約」（後書き）

ども、作者のH.C.です。いや、まさか連日で投稿できるなんて私自身思つてもいませんでした。まあ、一話一話が短いんですけどね。今回はアキラと裕奈の決意と心情を書いてみました。上手く表現できるかどうかわかりませんがどうだつたでしょうか？それにしても・・・キャラの喋り方がうまく書けない・・・。

次回も早いうちに投稿できるように頑張ります。

最後に、お気に入り登録が気づいたら150件いってました登録をしてくださつてる方々、本当にありがとうございますこれからもがんばります。

5月31日編集しました。

十話題「鬼」ついでとして修行開始（前書き）

だいぶ時間が空いてしまいましたが十話題が書きあがりましたので投稿します。

それと、九話題を修正という形で最後の方に話を足しましたので読みなおして頂いた後で十話題をお読みください。5 / 31

十時闇田「鬼」ついで?そして修行開始

「へへ、それで明石さんと大河内さんがいじめ側に関わる事になつてしまつたと」

「ああ」

「さらには一人と仮契約までした・・・・・と」

「・・・・・ああ」

一日の授業が終わり約束の時間まで少しがあるので昨晩あつたことをエリカさんに話していたが次第に彼女の顔から笑みが消えていく
仮契約をした事を話した時なんて背後に般若が見えた・・・・・なんで?

「まあ、夏には嫌でも巻き込まれてしまうのだから特には問題は無いとは思うけど・・・・」

背後の般若が消え呆れたといつよつた表情に変わる

「原作とは違うイレギュラーな出来事が起きてしまつたのだから今後原作通りに進むとは限らなくなつたと思つの」

「そうだな、といつか俺達の存在自体がイレギュラーの塊みたいなもんだからな」

原作から少しだが既にずれ始めているからな・・・・・気を配る事を

「あれなこいつに」しなむか

「だから、こやむとこいつのためのためにあなたもアーティファクトを完璧に使いこなせるものにしておなまこよ」

「わかつてゐるよ」

「それとH'カ'アちやんのヒーリングの修行に關してだけど、一応私もスプリングフィールドの血縁者だからさすがに参加はできなこわよ」

「ああ、わかつてゐる。H'カさんには悪いとは思つてゐるナビ、修学旅行が終わるへりこまで我慢して貰つつか・・・・・」

修学旅行まで終わればネギがエヴァに弟子入りするはずだからそつすればエリカさんも普通にエヴァの別荘に入る事が可能だろう

「・・・・・・そうね・・・・・」

しかし、エリカさんは少し浮かない表情だった・・・・・どうしたんだろ？

会話を続けながら教室の方へと向かつて

「あれ？あれは兄さんと神楽坂さん？何をやつてゐるのかしら？」

「まあ？」

十時間目「鬼」JUJU?そして修行開始

教室の前で言い争つてゐるようなネギとアスナを見て氣になつたので一人に近づき声をかける

「何してんだ二人とも?」

「佐倉ー! リカちゃんー! ちょいびといいわ

「?」

「ちゅうじここつてぢりこづ」と?

「佐倉ー! あんた、今喉渴いてない?」

「なんでだ?」

「ネギが紅茶をいたんだけど私は喉渴いてないし捨てるのも勿体無いからあんたにあげるわ

「ア、アスナさんー!」

何か焦つてゐるネギの口を押さえて、コップを俺の方に差し出す

「もうか、なら遠慮なく

そのまま受け取り一気に飲み干す

「「あー。」」

飲むのと同時に二つの声が上がる。一つはネギ先生のそしてもう一つは

「ん? エリカ先生も飲みたかったのか?」

「あ、あんた何考えてるのよ!」

「ん? 何って」

ただ紅茶を貰つて飲んだだけだが?

「あ、あのなんともありませんか?」

「いや、ちょっと普通の紅茶より苦いかなって思つたくらいだけど
?」

なんだ、その変な物を飲ませてしまつた的な顔は

「ホラ、何にも起こんじゃないじゃない」

「失敗があ・・・」

「何も起こらない? 失敗? ・・・

「なあ、どうこう・・・ってなんで顔をそむけてるんですか? エリ

力さん？」

「…………忘れてたのねあなたは……今、あなたの顔を見るのは不味いからよ」

「は？忘れてるって……何を」「あれ、エリカちゃんと佐倉君もおつたの？」近衛さん？

外の騒ぎが気になつたのか教室からこのかが出てくる

「…………」

そして、俺の顔を見て動きが止まり徐々に頬が赤くなつて目の色が変わつていく

「…………佐倉君って……なんか、かつこええくな～」

「は？」

このかの言葉の意味が一瞬よくわからず呆けてこると、その間にこのかが俺の前に腕を巻きつけてくる

「な～佑太くん～」

「ちよ、い、近衛さん」

「いややわ～このかつて呼んで～な～

だんだんこのかの顔が迫つてくる

「近いって！」

「ん～～なにが～」

「顔が！」

その間も止まらずに近づいてくる

「「「ちよ、何やつてんのよこのか」」」

騒ぎの声で教室から柿崎、釘宮、椎名の三人組が出てくる
その声に反応しこのかの腕の力が一瞬緩んだ隙に何とか抜け出しこ
のかから離れる

「あ～～ん、なんで逃げるん？」

「なんでもなにも一体どうなってるんだ・・・とりあえず三人とも
助かった・・・」

感謝をしつつ顔を三人の方へと向けると

「「「・・・・・」」」

三人の顔が先ほどこのかと同じようになに変化してゐる

これつて・・・まさか・・・

「「「佐倉く～ん！～」」」

「お前らもかあ～～！」

「」のか達の急変に困惑つてこると後ろから話声が聞こえる

「ほ、本物だつたんだ・・・・・・ね」

「兄ちゃん・・・・なんて事をしてるんですか」

「ノレ、ノレめんエリカ・・・」

「お前ら、俺に何飲ませたんだ?」

ネギとアスナは少しそうまな顔で

「ホレ薬」

「ぞけんなあああああああー！」

「」「」「佑太ぐーんー」「」「」

俺はその場から逃げだした

「・・・・おバカ」

最後に聞いたエリカさんの呆れ声を耳にしながら

「あいつら、運動能力上がつてないか?」

もう十分近く走り続けているが普通に一定の距離で追いかけて来ている

何度もかの角を曲がりすぐ近くの開いている部室らしき所に逃げ込み扉を閉め鍵をかける

「何とか逃げ切ったか・・・後は時間を潰して効果が切れるのを・・・」

「あら、どちらさま?」

安心したのもつかの間、室内から女性の声が聞こえる

「あら、あなたは・・・佐倉君?」

「あなたは・・・誰だ?」

「千鶴よ、那波千鶴。あなたのクラスメイトよ」

「ああ、那波な」

その部屋にはクラスメイトの那波千鶴がいた

「それで、天文部に何か用でも?」

「天文部?いや特には・・・・?なんで天文部が出てくるんだ?」

「なんでって、ここは天文部の部室ですよ」

とつさに逃げ込んだから確認なんかしてなかつたからな・・・

・ん? なんで彼女は平然としてるんだ?

「やつなの? 急に駆けこんで来たものだから何かあつたのかと」

「ああ、ちょっと色々あつてクラスの奴らに追われててな」

ああ、薬の効果が切れたのか以外に早かつたな

「…………何かしたんですか?」

「い、いえ…………何も…………」

千鶴さん、顔は笑つてゐるのに目が笑つてないのですが……

完璧に誤解されてんな

「でも、追われているんですねよね」

「は、はい」

ちよ、なんでだんだんと迫つてくるんですか

「これは、御仕置きが必要ですね……」

「は? 御仕置き? ……なんで?」

「私が不愉快だからです」

いや、意味わからんし

千鶴が一步進み、俺が一步下がる

「ちよ、那波さ・・うわっ！」

しかし、それを何度も繰り返していながらに何かに躊躇を仰向けに転んでしまう

「ててて・・・てええええ！」

いつの間にか千鶴が俺に覆いかぶさっている

「ふふふ・・・さあ、観念してくださーいね」

「お、おーー！」

まさか、時間差・・・だと

そして、千鶴の両手が俺の頬を抑え・・・

「ふふ・・佑太は私の物よ・・・ん」

「んん」

俺と彼女の唇が重なった

「ん、うん・・・」

「んん」

唇はまだ離れないが千鶴の手が俺の服にかかる

「ん・・・んあ！・・・・・えーわ、私・・・」

が、その途中でようやく薬の効果が切れ千鶴は正氣に戻る

「なんで佑太・・・君? の上に乗っているのかしら?」

片手を両分の頬に当て頭を傾げてこら

どつやうり薬の影響を吸かいていた時の記憶がないよつだ

「どうあえずどこでくれないか?」

「あい、『あなた』――――

自分達の体勢を理解したのか顔を真っ赤にしながら俺の上から降りる

「あ、あの、なんであんな体勢に・・・・・・・・

「転びそうになつた俺を支えようと支えきれず一緒に倒れちまつただけだから気にすんな

とつやに思ついた嘘で未だに顔を赤くしている千鶴を無理やり説得させる

「や、そう・・・・・――――

「じゃ、俺はこれから用があるから行こう

「え、ええ。また明日」

「おう、またな」

そう言い残し早々に天文部の部室を後にする

「・・・・・／＼／＼／＼

未だに佑太を見つめている千鶴に「気づかず」・・・

「ははははは・・・・・・」

現在、訪れた家の家主が目の前で大笑いをしている

今朝の約束通りに俺はエヴァの家を再び訪れた

「ははは・・・しかし、あのボウヤも大胆な事をするもんだ」

「ああ、人の心を操る薬、魔法は禁止なんだろ?」

「ああ、そうだ。バレたれ即ち「ジョジョだな」

「・・・・・なにやつてんだが」

「「」んにちわー」

「エヴァちゃん、来たよ~」

用事があつたため少し遅れたアキラと裕奈がやつて來た

「お、來たか。では行くぞ」

「行くつて・・・」

「何処に?」

首をかしげる二人に対しエヴァは勝ち誇つたよつた笑みを浮かべ

「私の別荘だ!」

と言い放ち先導して歩いて行く

俺達はその後に続していく

しかし、エヴァは外へと通じる扉ではなく家の地下へと続く階段へと向かっていく

俺はエヴァの別荘がどういう物かしているから不思議に思わないが二人は不思議に思つているようだ

階段を下り少し薄暗い部屋に着くとその中央で大きなボトルとその周りがうつすらと光つていた

近づいてよく見るとボトルの中には建物のミニチュアがある

「これが・・・」

「エヴァちゃんの別荘?」

「そうだ」

「・・・・おもちゃじょん」

裕奈眩ぐとアキラもなんとなく苦笑いを浮かべている

「いいから黙つてついて来い」

そう言いボトルの方に近づいていくと急にエヴァの姿が消える

「えーーー」

「消えた?」

「ほり、俺達も行くぞ」

あっけにとられている一人の手を掴み進んで行くと突然、体が浮かぶ感覚がした

「わー!」

「あやー!」

その感覚に一人は驚き俺の腕にしがみつく

しかし、数秒でその感覚は無くなり足の下に地面を感じる

そして目に入つたのは

「わあ～～～」

「す」

南国の島だつた

「やつと来たか、早くついて来い」

せつと進んで行ってしまうエヴァの後を追いかける俺達

「エヴァンジリーン、ここはせどりだ？」

「私の造った別荘だ。しばらく使って無かつたがお前らの修行にちよつといいこ^トと思い掘り出した」

裕奈は驚きあたりをキラリと見回していく

「ああ、っこでこ！」は一日単位でしか利用できないからな。丸一日は出れないぞ」

「『ええ～～～！』」

「じゃあ、明日まで出れないってこと?」

「明日の授業ビデオよー！」

「よしー授業サボれるー！」

一人違う反応に二人の視線が刺さる・・・・・[冗談なのに

「最後まできちんと話を聞けー！」

エヴァの一聲で俺達は黙る

「（）は外と時間の流れが違つ。浦島太郎の竜宮城つてのがあつた
だろ？（）はその逆だ。（）で一日過（）しても外では一時間しか
経過していない」

「つまり一日いても明日の授業には出れると」

「そう言つ事だ」

「残念だったね～佑太～」

だから、【冗談だつてのに

「それでは修行を始める前にこれを渡しておいつ

エヴァは懐からカードを四枚取り出す

「（）たちの一枚が貴様のだ佐倉佑太」

エヴァから受け取ったカードを見ると裕奈とアキラの姿がそれぞれ描かれていた。おそらくこれがパクティオーカードのオリジナルなんだろう

「そしてこっちのがそれぞれ大河内アキラ、明石裕奈のパクティオーカードだ」

残りの二枚の複製カードをそれぞれアキラと裕奈に渡す

「・・・・綺麗・・・」

「これで私も超能力者か〜」

「それは違うと思うのだが・・・」

アキラは純粋にカードに見惚れているが裕奈は違うといひで感動している

「それがお前らのパクティオーカードだ契約したという証だからな。
無くすなよ」

「うん」

「はい」

「わかつてゐるよ」

それぞれが返事をする

「次にカードの使い方を教えてやる。佐倉佑太貴様も自分のカード

を出せ」「

「ああ」

自分の仮契約カードを出すとアキラと裕奈の目がそれをどちら見る

「佑太君も誰かと仮契約してたんだ」

「ん? という事はその子とキスしたってこと…!」

二人の視線がきつくなる

「佑太、誰と仮契約したのか私達に教えてくれないかにや〜」

笑顔で俺に詰め寄つてくる裕奈だがその背後に般若の面が見える。
その恐怖に負け正直に答える

「えっと…・・・エリカ先生です」

「「…」」

裕奈とアキラの顔が驚きに変わる

「佑太君つて・・・・ロリコン?」

「ぐはっ…」

生涯最大のダメージを受ける…・・・ そりだよな十歳の少女とキス
するつて…・・・・〇一二

・・・あれ？でも彼女は前世から呑わせれば普通にいい年じゃん！問題な・・・くは無いな見た目どう見ても子供だし

「貴様が口リコンだぬうとそんないと今はビリでもここにからむつてヒアーティファクトを出せ」

絶望に打ちひしがれてる俺に対しキツイ一言を浴びせるヒガア・・・
・ここに俺の味方はいないのか

「はいはい。来い（アデアット）――」

とりあえず言われた通り仮契約カードを出しヒアーティファクトを出す

「もういいぞ」

「あいよ。去れ（アベアット）」

「このよひに、アデアットで呼び出し、アベアットで戻せる。そつそくヒアーティファクトの名前を確認し呼び出してみる」

「うん」

「わかった」

二人とも自分のカードを見る

「私は流水の羽衣か・・・アデアット」
リュウスインハコロモ

出てきたのは水色の羽衣

「羽衣・・・・だね」

「羽衣だな」

「おそらく防御向けのアーティファクトなんだわ」

「防御向け・・・か」

アキラは少し嬉しそうだ

彼女は基本的には争い」とは苦手なのだからここで防御向けのアーティファクトが出たので少し嬉しかったのだろう

「どうあえず身に着けてみれば

「うん」

アキラは羽衣を身に纏つと

「うわあ～・・・・これ、すげー軽い・・・・あれ、これ浮いてる
？」

羽衣は身に着けるといつよりもアキラの周りでゆつたりと浮いていた

「おや、らへそのアーティファクトの特性が能力だらう」

「へ～」

「次は私がやってみるね。私のは嵐の双銃か・・・アデアットアラシノソウジュウ」

出てきたのは漆黒の装飾銃が二丁……ってあれ？

「わあ～カツコイイ～」

「見たまんま銃だなしかも二つ」

両手に現れた装飾銃を見つめながら言つ裕奈だが俺はその銃に見覚えがあった

あれって・・・black catのハーディスちゃん数字は刻まれてないけど

「でも、これ弾が入つてないみたい」

「おそらく魔力や氣が弾代りになるのだる。それは後々教えてやろ」

「う～ん、すぐには使えにゃいのか・・・残念」

アーティファクトの確認が終わつたところでエヴァが俺達の前に立ち修行内容を話し始める

「さて、アーティファクトの確認が終わつたところでお前たちの修行内容が決まつたぞ。まずは大河内アキラ！お前は体の動かし方基本的には攻撃の避け方それとアーティファクトの特性を理解するところだ」

「うん」

「次に明石裕奈！お前も大河内アキラと同じく体の動かし方を覚え

て貰う。それとお前には魔力の使い方つまりは簡単な魔法も覚えて
貰うぞ」

「ア、解

「基本的な動き方は茶々丸に教われ。茶々丸！」

「了解しましたマスター。それでは大河内さん、明石さんいらっしゃへ

茶々丸の後に続いて行く一人。その後に俺も続行とするが

「佐倉佑太、貴様はここに残れ」

「は？」

エヴァに呼びとめられてしまった

視線の先、少し距離が開いた場所でアキラと裕奈に茶々丸が訓練を
着けている

「さて、貴様のアーティファクトもう一度見せん

見せろって

「さつき見ただろ?」

「さつきはあこいづりに見せるためでちやんと見てはいなかつたんだ。
だから見せろ！」

強制つか

「わかつたよ・・・アデアツトー」

アーティファクト・赤龍帝の籠手を出す。するとエヴァアが俺の腕を
正確には籠手を掴みじつと見ている

「ここの紋章・・・まさか、神滅具の一つをここの田で見る事があると
はな」
ロングヌス

エヴァアの言葉に驚く

「なん・・で」

「何を驚いている、それぐらいの知識はあるぞ・・・赤龍帝の籠手、
赤き龍の力を宿した神滅具。言い伝えによると十秒ごとに持ち主の
力を倍にしていく能力・・・時間を稼げればいづれは神にもならぶ
力を得られる。狂ったような力の結晶だな。だが、時間を要する分
リスクもある・・・一応は貴様も知つてはいるようだがな」

そうエヴァアは言うが、俺が驚いたのは別のところだ

神滅具の概念が存在しているということだ

この力は転生者のチート能力としてゼウスの爺さんから貰つた他の
作品の武具だこの世界には存在しない
ハズの・・・しかし、エヴァアは神滅具・赤龍帝の籠手の事を知つて

いた

「どうしてなんだ？」

「エヴァンジョン……聞きたい事がある」

「……なんだ」

俺の表情から重要な事だと判断したのだろうエヴァの表情も真剣な物になる

「お前が知っているだけで他にどんな神滅具がある」

「……私が知っているのは貴様のを合わせて三つ……伝承から調べても神滅具は三種類しかない」

「その中に……白龍皇の光翼ディバイン・ディバイディングといふのはあるか？」

俺が一番聞きたいのはここだった。もし白龍皇の光翼が存在したならば一天龍の因縁で戦う事になるかもしないからだ

「……いや、伝承に残っている神滅具は剣、槍、籠手の三種それ以外は存在しない」

「……そつか」

エヴァの言葉で少しばかり安心した。これで余計な因縁は無いだろうと

「事のついでだ貴様もここで少しばかり鍛えたらどうだ」

エヴァの提案は魅力的だ・・・・・・

「タダじゃないんだろ」

「察しがいいな・・・赤い龍の力を宿した者の血を一度は飲んでみたいと思つてな」

「さいですか」

やつぱり・・・俺の血なんて上手くは無いだらう

「まあ、どちらにしろあこいつらの使用料として貴様の血はいたぐがな」

「どちらにしても血い吸われんのかよ！」

既に逃げ道は無かつた

十時間目「鬼」について？そして修行開始（後書き）

まずは、一週間ほど更新ができずすみませんでした。二人のアーティファクトがなかなか決まらなかつたこと風邪でダウンしていくなかなか小説を書くことができませんでした。今週から再び更新を再開できるように頑張ります。

あと、「こ意見、「こ感想も受け付けてあります。

十一時間目「居残り補習とドッジボール」（前書き）

十一話目投稿します

十一時間目「居残り補習とドッジボール」

エヴァの別荘で修行を初めて一週間……まあ、二日では三日しか経つてないんだが過ぎた

それは今朝のHRでの出来事だった

「と、言つ事なので綾瀬さん、アスナさん、まき絵さん、長瀬さん、ケーフェイさん、佐倉さんの6人は放課後に居残り授業をしますので残つてくださいね」

「はい？」

突然言われた言葉が理解できず

「ちょっと待て！居残り授業ってなんだよ！」

立ち上がり発した声に教室中の田が後ろの隅俺の席の方へと集まる。ちなみに俺の席はエヴァの横だ

「そのまんまの意味ですよタカミチが授業をやっていた時にたまに行っていた小テストの得点があまりにも低かった生徒には居残り授業をしていたんですよ。それを今回からは僕がやる事になりましたので……」

「そうじゃなくって俺が聞きたいのはなんで俺も居残り授業に出なぐちゃいけないのかってことだ」

なんでそんな面倒なモン出なきゃいけないんだよ

「佐倉さんの場合はタカミチの授業を受けた事がありませんので、でとつあえず出て貰うところです。それに・・・」

言葉の途中でネギの言葉が言い淀むと隣にいるエリカさんがその続話を口にする

「あなた、まともに授業受けにならじょう」

「受けたるよわやんと教室にいるだらうが」

「このだけで大半寝てゐるじゃないの」

そういうやうだな・・・・・だって一度受けた事のあるのをもう一度聞くつて・・・

「だから、とりあえず受けときなやー」

「いや、放課後は用事が・・・・」

HGアの別荘での修行を言い訳にしていつとしだが、

「別に貴様がこよつとこめこと特に問題は無いからしつかりと残り授業をやつてこそ」

「・・・・・ わいですか」

HGアから念話で戦力外通告されたびしら俺の存在せびつでもいいらしい・・・・といふかHGアさんや俺に対しての態度が冷たくはありませんかね

「いや、なにかこのお前を見てるとこじめたくなつてな」

「このアリス幼女め！」

「…………今日は特別だ私が直々に手ほどきを加えてやる
う」

「ごめんなさい！俺が悪かつたんで勘弁してくださいー！」

いつもの俺の別荘の過「」し方としては茶々丸とチャチャゼロとの組み手がほとんどだ。どうやら俺自身戦つといつ事の経験が足りないらしくその辺の経験を積ませてこる

たまにエヴァともやるがその時一方的に攻められ何もできずに終わるのがほとんどだ。一度だけまともにダメージをあたえた事があるがその後エヴァの魔法をくらい半日ほど氷漬けになつたけ……

「あははははあー…………」愁傷をまわす

「が、頑張つてね佑太君」

ちなみにこの会話は裕奈とアキラにも聞こえていた

「ネギ先生ー俺、すんげえ勉強してえから居残り授業に参加するわー！」

「ホントですかーわあー一緒に頑張りましょー」

「おう！」

俺の急変にネギは喜び数人の生徒を覗いて他の生徒は少々戸惑つて
おりある人は仲間ができたアルなど

まあ、誰とは言わんが

残り数人、俺達の会話を聞いてた三人と副担任は呆れ顔と苦笑いつ
だつた

十一時間目 「居残り補習とドッジボール」

「というわけで……2・Aのバカ五人衆バカレンジヤとおまけがそろつた
わけですが……」

バカブルーこと綾瀬夕映

「うわ～

バカブルーこと長瀬楓

「てへへ」

バカピングこと佐々木まき絵

「アル」

バカイエローこと古菲

「誰がバカレンジャーよつ！」

バカレッヂこと神楽坂明日菜

「おまけって俺のことか？」

そして俺の六人が残っている

しかし、長瀬と古菲その腕で波を表わすようなフニャフニャな動き
はなんだ

その間に明日菜とネギとのやり取りがあつたがその辺はどうでもいい
いだろ？

「えーと、じゃあまずこれから10点満点の小テストをしますので
6点以上とれるまで帰っちゃダメです」

それぞれ前の方の席に着き説明を聞くま�、小テストで合格点を取
れという事か

横では余裕だという一人が・・・お前らはさつきから緊張感とかま
つたくねえな

「じゃあ始めてください」

開始の合図聞き問題に向かいつつ……なんだこりや？普通に簡単じゃねえか

数分後

「できましたです」

「俺もできただぞ」

俺と綾瀬の二人が立ち上がりネギの元へとテストの用紙を渡す

「えっ、もつですかー！？」

一枚の用紙を受け取り採点を始めるネギ

「…………うん、4番綾瀬夕映さん、点合格です」

綾瀬は頬笑みその後ろで待っていた富崎と早乙女が共に喜ぶ

「全然できるじゃないですかー」

「……勉強キレイなんですよ」

ほめるネギに少しすねる綾瀬

「次に佐倉さんなんですかどうと……」

何か言い辛そうなネギ。なんでだ？普通に全問解けたハズだが？

「……………」

「は？」

「どうこいつだ？キチンと解いたはずだが

「えいと……佐倉さんの場合理解もできていて答えるんだ
すけど……スペルがところどりの
間違つてこます」

「マジでっ。」

「はい……でもおおやめできているのでもう一度同じ問題題
を今度はスペルに気よ付けてやってみてください」

わざわざしたのと同じ問題が書かれた用紙を受け取り席に戻る

から数分後

長瀬楓 3点

古華 4点

佐々木まき絵 3点

首をかしげる三人

「あれ？アスナさんは？」

「う・・・」

差し出した用紙には2の文字が

「よつしゃ、今度こそはできたぜネギー！」

「・・・・・えつと、佐倉さんまたスペルが違います」

アスナと同じ2の文字だった

それからネギがポイントの説明をした事で長瀬、古菲、佐々木の三人は合格し教室にはネギ、アスナ、俺の三人だけになつた

さうに時は進み田が暮れるが・・・・

田の前には1～5の数字が一つずつ書かれている紙がならんでいる

まさか、中3の問題ができるとは

「おひ、やつぱり例によつてアスナ君・・・となんで佐倉君まで
いるんだい？」

タカミチが廊下側の窓から顔を出している

「たつ・・・・」

「うぬせー！んなに難しいとは思わなかつたんだよ」

アスナはうつむいたえ俺は愚痴を吐く

「ははは、そうかいじや、がんばってね三人とも」

そう言い残すとタカミチは去っていった

するとアスナはうな垂れ僅かに震えていると

「うわああー——ん

「ああー!？」

急に駆けだして行ってしまったアスナ。その後を追つていったネギ

「…………俺はどうすればいいんだ?」

そして教室には俺一人残された…………寂しい

「…………帰つか

とりあえず先に帰ると書置きを残しカバンを持ちエヴァの家へと向
かった

翌日の昼休み

「俺はタカミチと一緒に歩いていた

「学園生活はどうだい？佑太君」

「周りが女だけで疲れる」

「ははは、確かにあのクラスは元気がいいからね」

「元気がいいにもほどがあるだろ？」

タカミチは笑つてゐるが実際あれは辛いんだぞ休み時間のたんびにあつちに引っ張れこつちに引っ張られて半分パシリ扱いだ

「ん？ 何か騒がしい様だけ？」

タカミチが視線の先に騒いでいる集団をとらえる

「あれは神楽坂と雪広と・・・黒い制服の集団？」

「あれは聖ウルスラ女子高の制服だよ」

この学園いくつの学校があんだよだよ。あ、取つ組み合いのケンカが始まった

しかしあいつらも好戦的すぎるだろ？

「つたく、あいつら止めてくるわ

「大丈夫かい？」

「何とかなんじゃね」

タカミチから離れアスナ達の集団へと向かう

「あ！」

「佑太！」

アキラと裕奈の二人は俺に気づいた様だがここはスルーをし

ビシツ × 2

「あいた！」

「きやー！」

「落ち着かんかドアホドも」

特に好戦的な一人の頭に軽いチョップを決める

「さ、佐倉！あんた」

「じゃ、邪魔をしないで下せいませんか佐倉さん…このままではネギ先生が」

「どう言われようが先に手を出したら負けだ。それに女が取つ組み合ひのケンカなんてみつともねえよ」

「う・・・

「ですが・・・」

納得の言つて無い二人を無視してウルスラの生徒の方を向く
「クラスメイトが手を上げるような事をしてしまいますみませんでし
た」

「いえ・・・ってなんで男性が・・・もしかしてあなたが噂の・・・
男子生徒?」

俺の事ウルスラの方にまで行つてゐるのね

「はい!しかし、先輩方も中学生相手にするのはいささか大人げな
いのでは?」

「う・・・それは・・・」

「ちょっと佐倉!何謝つてんのよ!悪いのはあいつら・・・」

「さつきも言つただる。手を出したらお前の負けだぞ神楽坂」

「こいつは人の話を聞いていたのか?・・・まあ、興奮してて耳に入んなかつたんだろうが

「そうだね。佑太君の言つ事は正しいよ」

そこにタカミチが遅れてやつてくる

「た、高畠先生」

その後はタカミチがまとめ上げその場は解散となつた・・・なん
か最後の最後はタカミチ任せになつてしまつたな

その事でタカミチに礼を言つがタカミチは笑つて

「ほんと君が収めてくれたからね。それほどの手間はかかるな
かつたわ」

と言われた

そして午後の授業へと進み科目は体育。皆は教室で着替えているが
さすがに男の俺は教室で着替えられるハズも無く（教室で見た目小
学生の双子の片割れに脱がされそうになつたが）教室より遠い教員
用の

更衣室で着替えてから屋上に向かう。今日の種田は屋上のコートで
バレーだからだ

屋上に着くと

「ハクションー！」

突風と共にめぐれ上がる女子生徒のスカート・・・・ふむ、眼福眼福

「ではどうでしょ両クラス対抗でスポーツで争つて勝負を決める
んです」

いつの間にかクラス対抗で勝負することになつていた

「いいわよ、私達が負けたらおとなしくこのパートから出でていって、今後昼休みもあんた達の邪魔はしないわそれでどう?」

「だが、高校生と中学生だと身体能力に差が出ませんか?」「とりあえず俺の存在が空氣に近くなつてるのでここ少し出ししゃばつてみる

「佐倉さん!」

「あんた今頃来たの!?」

俺の登場にネギは驚きアスナは文句を言つが

「教員用の更衣室は遠いんだよ。それと先輩方、年齢や体格の差はどうするつもりですか?」

「それならハンディをあげるわ。種目はドッヂボールでどう?」「今は全員で一人そつちは倍の二人でかかってきていよいよ」

いや、種目はともかくそれはハンディじゃないから

「あの先輩? ドッヂボールのでは人数の多い方がふ「わかつたわ約束よ!」おい、神楽坂」

「大丈夫よ! 一対一は無理でも一対一なら勝機はあるわ!」

このバカレッドがそれじゃ逆にハンディ背負つちまうんだよ

「皆こへやー！！」

۱۷۹

「後悔するなよ」

裕奈に双子あおるなよ

たたし！私達が勝ったる先生を教生としてはずしてもらひやれ

二二二

一
な

あ～～～もう知らんかってにしろ

ポン、
ポン

茶々丸が花火をあげ、チア部の三人組が音楽に合わせて踊っている。・・・前の世界ではチアって実際に見た事が無かつたから新鮮だな。」

「佑太（君）！」

「んあ？」

振り向くとアキラと裕奈

「「私たち頑張るから見ててね」」

「お、おう」

一人の気迫に押される。そんなに高等部が嫌いなのかな？

「くくく・・・やはり貴様は鈍いな」

後ろからエヴァが声をかける

「まあいい、大河内アキラ、明石裕奈貴様ら一人は一度でも当たつたら今日の修行はいつもの一倍だ」

「「ええ～～！」

いや、一人とも最近ようやく付いていけなくなったところなのに一倍とか鬼でしょ

「嫌だつたらあんなガキ達の球に当たるな。いいな」

「「は、はい・・・」

ガキって見た目はエヴァの方が子供みたいなんだけな

「貴様、今変なこと考えなかつたか？」

「イエベツー」

「まあいい、変わりに一人でも当てたら」こつを好きにしていいぞ

「はい……」

この幼女いきなり何を言に出しますか

「佑太君を・・・／＼／＼

「好きに・・・／＼／＼

何を想像して頬をそめるんだ

「俺の意思是は？」

「あると思つていたのか？」

「・・・セイですか

こんなやり取りを終え二人はコートへと入り試合が始まる

「しかし、あいつらはバカなのか」

そのまま腰を下ろすと隣に座つて居るエヴァが話しかけてくる

「バカなんだろ。逆にハンディを背負つて居るんだから

「どううな、あんなコートに22人もいたら的が多くなり圧倒的に

不利だからな

アスナ達もそれこよひやくそのことござりいたらしく

だから止めようとしたのに

その後も何人かがアウトになるがアスナがボールを取り高等部の生徒に向け投げるがあつさつと・・
いや、普通にとつてはいるが少し痛そうだ

そして、彼女達は実はドッヂボールの関東大会優勝チーム「黒百合」だとわかつた

ちよつと制服を脱いでる瞬間ドキドキしていったのは秘密だ

いや、お前らバカにしてるけど関東優勝つて普通にすごいからな・・
・・・全国では知らんが

その後、雪広がトライアングルアタック（まあ普通に三角形でパス回しして当てるだけだけど）でアウトになりアスナが一度当てをくらい怪我を（かすり傷だが）しアウトになつたがアスナの言葉でネギがネギの言葉でクラスが一つになり結果2 - Aの勝利となつた

「やつたー」

「勝つたー」

裕奈とアキラも最後まで避けきり共に相手をアウトにしていた

クラスが喜びを分かち合つなか、アスナの背後でリーダー格の高等

部の生徒がボールをあげスパイクの
体勢に入る

「まだロスタイムよ！」

繰り出されたスパイクはすごい勢いでアスナへと迫る

「危ないアスナさんっ！」

「え？」

ネギが叫ぶがあの状態では避けられないだろ？…………クソが！

バチイツ

一瞬でアスナの背後に回り片手でボールを受け止める

「な……」

「佐倉さん……」

「ひつやう後ろにはネギもいるよつだ

「…………『どんな汚い手を使つてでも勝つ』お前らのポリシー
を否定するつもりはない…………だが！」

「ひつ……」

ウルスラの生徒を睨みつける

「それは試合の・・・ルールの中でだけにしろ!」

ボールをおもいつきり投げ返す

「あやつ!..」

俺の投げたボールを受け止めきれずはじかれて倒れてしまつ

「ルールの守れない奴にスポーツをする資格は無い!..これ以上こんなことを続けるつもりなら・..・..」

はじかれて宙に上がっていたボールが再び俺の手元に戻りそれを突き出す

「今度は俺が相手をしてやる。もちろん・..・..手加減なしでな

「..・..・..・..・..」

呆然と俺の方を見ているが

「お、覚えてなさいよーーー!」

「あ!..」

「ちよ、待てって」

俺の視線に耐えきれなくなつたのかリーダー格がコートから逃げ出し他の生徒も次々と屋上を後にする

「心」

やつと一息付くと

か・・・・・・・・

۱۰۷

「かっこいい～～～」

፩፻፲፭

クラスメイトが俺の周りに集まつてくる

『ルールの守れない奴にスポーツをする資格は無い！！』たゞて

「俺が相手をしてやる。もちろん・・手加減なしでな『だ』」

卷之三

なんかす」とい事になつてゐんですけど

「佐倉さん！すこしへす！」

興奮気味のネギ・・・・って、ああ！なんてこいつたあの場面は本來ネギがアスナを助けて女子高生の服がはじけ飛ぶシーンだつたハズだったのになんてことしちまたんだ――俺は――orz

「ど、どうしたのよ佐倉」

俺が突然うなだれたので不審に思ったのかアスナが近づき声をかけてくる

「い、いや、なんでもない……それよりも神楽坂は怪我は大丈夫か?」

「え、ええ、大丈夫よ。あ……ありがとうございます。佐倉」

視線をそらしながら礼を言つてくるアスナ

「ん?なんか言つたか?神楽坂?」

最後の方がよく聞こえなかつた

「つーーーーーーーーあ、アスナでいって言つてんのよ呼び方を!…!」

「お、おひ。わかつたよアスナ」

「ふん」

なんで助けたのに怒られなあかんの?

「「「改めて、試合終了!——ツ!—!」」

ネギを胴上げし高等部とのドッヂボール試合が終わつた

ちなみにその頃エリカさんは他のクラスで普通に授業をしていたらしい

余談だが、翌日から外を歩いているとよくウルスラのドッヂボール部の「黒百合」の人たちに声をかけられるようになった・・・。何で？

十一時間目「居残り補習とドッジボール」（後書き）

やつと一巻目の内容が書き終わりました。今回は珍しく主人公がかっこい！・・・のかな？そして、エリカさん・・・ほぼ空氣です。私が未熟なせいでほとんどオリキャラのエリカさんが目立ちません。次回はオリジナルを一話入れてみてから図書館島の話へと入ろうと思っています。

十一 時間田「やべいの力」（前書き）

十一話目投稿します

十一 時間田「わへーつの力」

「くっ！」

狙いをつけられないよつて縦横無尽に走り回る

エヴァの魔力の込められた拳が迫る。それを捌き受け流すが

「ほり、脇ががら空きだ」

逆の手が迫るがそれは捌ききれず腕でガードをするが耐えきれず吹き飛ぶ

「ひつ」

吹き飛ばされながらも何とか体勢を立て直す。エヴァは攻撃をしたその場に浮いていて距離があるがのんびりして余裕はない

休む間もなく両サイドから茶々丸とチャチャゼロが迫ってきている

目の前で一人が交差し左右が入れ替わり茶々丸の拳がチャチャゼロの両手に持っているナイフのうちの一つか俺に迫る

迫りくる一方から攻撃のうち俺は茶々丸の方へ一步踏み出し茶々丸のパンチに勢いが乗る前にその腕に手を添えその勢いをそのまま流し茶々丸を投げ飛ばしそのまま回転し逆方向から迫つてくるチャチャゼロのナイフを籠手で受け止めさらに回転の勢いを殺さずチャチャゼロに回し蹴りを繰り出すがそれはもう一つのナイフによつて防がれるが勢いは殺せず吹き飛ぶ

「ふつ」

追撃しようとしたチャチャゼロが吹き飛んだ方向へ駆けだが横からの殺気にとっさに腕を上げガードの体勢を取ると一秒も立たないうちにガードした腕に衝撃が走る

「よく防いだが・・・リク・ラク ラ・ラック ライラック 来れ
(ケノテートス) 虚空の雷薙^{アストラブルサト}ぎ払え(テ・テメトー)！」

エヴァの詠唱が聞こえ中断をせようとエヴァとの距離を詰めようとすると、詠唱と同時にエヴァは後方へと飛び開いたスペースに茶々丸が現れる

急いでエヴァとの距離を詰めようとしたため茶々丸への対処が遅れ一本首負いのよつよつで投げ飛ばされ

「雷の斧^{ディオス・テココス}！！」

「があああー！」

雷系の魔法が全身を襲う

十一時間目「もう一つの力」

「し、じびれる～～～」

「ふむ・・・・五分か・・・まだまだだな」

「あ、あれでまだまだつて・・・」

「私達からしたらすばらしいしかいこようがないいんだけどね」

アキラと裕奈は組み手を見学していたが途中からどうなったかわからなくなってしまったからしい

「三対一でアーティファクトの能力無しとはいえ最低一時間は粘れるよひひひひ」

「いや、こくらなんでも一時間は・・・・・」

一時間粘らなければこけないならなら途中で逃げるし

「それぐらいでないと貴様の場合は生き残れん。貴様はそれ程危険なモノを宿しているんだからな」

「まさか・・・」

「冗談ではないぞ、神滅具とはそれほどまでしても手にしたいと思^{ロシキヌス}う代物なんだからな」

「ふ〜〜ん」

「すごいんだね」

アキラと裕奈の驚きは薄いようだ。まあ、いきなりそんなこと聞いたり、一人はいまいちロンギヌスについてわかつてないみたいだし

奴らに狙われる可能性もあるんだぞ」

「え？」

それを聞いて一人の顔色が変わる。いつもの組み手は手を抜いたレベルであれだからな

「今ならまだ」いつとの仮契約を解約して元の日常に戻れるぞ」

「だ、大丈夫です！」

少し声が震えてるようだが一人の決心は揺らがないようだ

エヴァの顔も満足そうだ

「ま、いざとなつたらアレを使うから大丈夫だろ」

「ん? アレとはなんだ?」

初めて聞いたぞという表情をしている

そりや そ う だま だ 言つて 無いし。だから・・・

「…………ひ・み・つー」

某アニメの未来から来た少女の禁則事項のしぐさを取る……。
え? キモいって? ほっとけ!

「…………」

Hヴァの手に魔力が集まる

「…………あのHヴァンジエリンさん? その手の魔力は……」

「いや、ちょっと今の貴様にムカついたからな……凍てつく氷
柩」

Hヴァの魔法により氷柱に封じ込まれました

やつぱり男がやるもんじゃねえな

数分後

「そんなものまで持つていたのか貴様は……」

「Hヴァさんやそろそろ体の感覚が無くなってきたのですが……」

現在、俺の体は未だに氷柱の中にはいた。全身を封じ込めた状態ではO H A N A S I ができるので首から上だけは氷から解放された

「茶々丸！大河内アキラと明石裕奈のアーティファクトの特性と能力は理解できたのか！」

無視ですかい・・・・

「はい。まず、大河内さんのアーティファクトは水を操る事ができ、羽衣 자체は攻防一体の武器です」

・・・・・氷紋 の羽衣版みたいなもんか？

「次に明石裕奈さんのアーティファクトですが、マスターの予想通り魔力を弾として打ち出せますが魔力の込め方の違いでどうか五種類の弾丸が確認できました」

・・・・・某あさり貝のマフィアの右腕ですか？

「そうか・・・・よし、そのまま続けアーティファクトを使いこなせるようになります」

「「はい！」」

「了解しましたマスター」

そのまま一人は修行を再開し茶々丸もその後に続いて行ってしまった

あ、そろそろ眠くなってきたかも・・・・

「おい、いい加減起きんか！貴様はこれから見回りの仕事だらうが」

意識が遠のきかけたところで氷柱を解かされエヴァに蹴り起こされる

「ついっす」

そう言えばそうだったなと思い出す。昨日までは転校したばかりだからまだいいと言つのでやらなかつたので今日が初の見回りだ

何とか起き上がり別荘を出て学園長室へと向かつた

「・・・・・」

「・・・・・」

「・・・・・」

く、空気が重いです。俺は今、桜咲さんと龍宮さんと三人で学園長に頼まれた通り園内を見回つてます

当初は一人で見回るハズだつたが学園長室に言つたら一人がいて最初だから一緒に回るように言われました

そつ言うわけで三人で見回りをしているんですが・・・・

「・・・・」

「・・・・」

二人とも終始無言さらに桜咲さんに關してはすんごく睨んできます。
・・・アンでだよ?

刹那 side

私と龍宮は今最近転入してきた佐倉佑太という生徒と共に夜の学園の見回りをしている

彼には最初だから私達が同行すると言つてついて来ているがもう一つ目的がある

『彼、佐倉佑太の実力を確認する』

これが私と龍宮が学園長に依頼されたもう一つの依頼だ

私にとつてこの依頼都合がよかつた

学園長がどういう思考で彼を女子中等部にしかもお嬢様のいるクラスにこの男を転入させたのかわからないが、この男がお嬢様にとつ

て害をなす者がどうか、西の刺客かという考え方も完璧に無いとは言えないのだから

学園生活での彼とお嬢様は「よく普通の親しい友人」という感じだ

他のクラスメイトに関しても同じようだが、特に仲がよさそうなのは大河内さんや明石さんの運動部の四人、鳴滝姉妹にクーぐらいだろう

もつともクーに関しては先日のドッヂボールの一件以来、彼が強者だと感じ勝負を挑み続けそれを断られ続けなお諦めず挑み続けているだけで、鳴滝姉妹に関してはいたずらの対象になっているというような感じだが

(刹那)

(ああ、この辺ならいいだろ？)

龍宮からの念話で考えを止める

いつの間にか世界樹前の広場に出ていたようだ

そこで私は夕凪を龍宮は銃を取り出し

「止まれ佐倉佑太」

彼、佐倉佑太に突きつけた

side out

「止まれ佐倉佑太」

世界樹前の広場に出たとたん桜咲さんは刀を龍宮さんからは銃を向けられていた

「…………どうこいつもりですか？ 桜咲さん龍宮さん」

あくまでも冷静に変に焦ると酷い目に遭つ・・・・主にエヴァとの修行に関してだが

「君の実力が知りたくてね。万が一の時に足手まといは邪魔だからね」

二人の眼は真剣そのものだった

どうしてこう俺は力試しどうかそういうのが多いのだろうか・・・・

「はつー。」

落ち込む暇もなく桜咲さんが斬りかかってくる

それを後ろに飛びかわすが続けざまに斬撃が迫る

「試せてもうひど貴様がお嬢様に害を成す者かどうか」

「へ？」「

リーチの違いで中々攻撃に移れない

「神鳴流奥義…」

まづい！

足に氣をためその場から飛び退く

「斬岩剣！！」

一太刀で斬岩剣をも切り裂く神鳴流の奥義…・・・マジで殺す氣ですか
あんた

服一枚で斬岩剣をかわす。腹のあたりがパックリ切れてい

そこでかわした事に安心したのが不味かつた

「私のことを見失っては困るな」

「しまつ」

気づいた時には遅く龍宮さんの放った銃弾がギリギリのところを掠
める

「今のは威嚇だ・・・今度隙を見せたら君の体に打ち込むよ

服を掠めた程度ですが現在彼女の銃の照準は確実に俺の左胸に
あっている

・・・・・つたくよ、」の一人マジで殺る気だよ・・・・・

桜咲さん・・・いや、桜咲は再び構え龍宮も銃を構えたままだが、
さつきよりも一人の殺氣は増している

・・・・・そこまでやるなら仕方ねえ

「おい、テメハ！」

・・・・・久しぶりに使うか

「後悔しても知らねえからな

頭の中でスイッチを切り替える。そして・・・

「格の違ひってヤツを見せてやるよ

押えていた殺氣を少しずつ解放した

「格の違ひってヤツを見せてやるよ

刹那 side

その言葉と共に私達の周りを重い・・・・とてつもなく重い殺気が
包む

この男は誰だ？

さつきまで田の前にいたのは多少は腕があるかもしれないがどこか抜けているひょうひょうとした男だつたはずだ

だが、今私達の田の前にいる男は違つ。あの田は・・・

「いぐせ・・・・・

「ツーーー！」

男の姿が消えた瞬間衝撃が私の体に走る

「刹那ーーー！」

龍宮が呼ぶ声と遠ざかる姿を見て初めて私は自分が吹き飛ばされている事に気が付いた

「くつーーー！」

空中で体勢を立て直し着地するも飛ばされた勢いが残つてるので少し着地地点から後方へと流れるが背後から首を掴まれその勢いが止まる

「よおーー！」

背後から聞こえた声に私は背筋が凍つた

「さつきまでの威勢はどうしたよ

振り向いたそこにはあの男が・・・

「刹那あ！！」

「ちつ」

龍宮の放った銃弾が迫つて来た事に男は再びその場から消えた

「大丈夫か刹那」

龍宮が駆け寄つてくる

「ああ、先ほど掴まれていた首が少し痛む程度だ」

「彼を少し甘く見ていたようだな」

「ああ」

彼は力を隠していたんだ・・・

「相談は終わつたか？」

少し距離を空け彼は悠々と歩いてくる

「こんなもんじや終わんねえんだろ」

「い、いや、お前の力はわかつ「アデアットー」

私の止める声も聞かず彼はアーティファクトを呼び出す

「逆転する世界！」
リバースワールド

その手には一振りの刀が握られていた

「やるしかないようだな」

「ああ」

再び夕凪を構えるが先ほどのダメージが残っているせいしか少し震えている。いや、これは攻撃が残っているのではない

怖いのだ。彼が・・・彼の殺意の籠った瞳が

「はあああ！」

恐怖を無理矢理消すかのように叫びながら彼に斬りかかる

後方には龍宮の援護がある

「神鳴流奥義…斬空閃！」

これは斬撃を飛ばし遠距離の敵を斬る奥義だ

「さあ、どうかわす！」

当たるとは思ってはいない彼ほどの実力があるなら手の刀で弾くか
避けるはず

そこで龍宮が銃で足止めし私が斬りかかる

そう考えていた・・・

しかし、彼は私の予想していなかつた行動を起こす

「なつ！」

避けずにそのまま斬空門をくへらつたのだ

何故？

その疑問はすぐに解けた

「ぐうっ！」

右肩から腹部にかけての激痛で私は倒れる

その場に倒れた私は自分の体を見る。激痛の走った位置の通り右肩から腹部にかけてざつくりと斬られていた

そして彼の方を見ると彼はまつたくの無傷だった。これは・・・どういう事だ？

「刹那！くそ！」

「ま、待て龍宮」

痛みで小さくなつた私の静止の声は届かず龍宮が彼の四肢に向かつて放つが再び彼は避けずその銃弾をその身に受けるが・・・

「つーーー！」

痛みの声をあげたのは撃つた龍宮の方だった
そして、撃たれたはずの彼はまたもや無傷・・・何が起こっている
んだ？

「まだやるのか」

なんなんや・・・なんなんやあんたは

彼が一步ずつ近づいてくる

「その程度かと聞いてるんだ」

勝てへん・・・つけはこの人に勝てへん

体が震える恐怖でどうにかなりそうや

「その程度ならてめえは何も守る事はできねえよ

何も守れへん・・・

その言葉が心に突き刺さる

その言葉が昔の出来事を思い出させる

守れへんかった大切な友達

守ると誓つた大切な友達

「お前にお嬢様は守れない」

守れない・・・・・お嬢様を・・・・・のちやんを・・・・・

・・・・・それだけは

・・・・・その言葉だけは

「言わせへん」

刀を杖にして立ち上がる

「守ると・・・・書いたんや」

だから・・・・私は

「死んでもこのちやんを守るんや

「なら死ねよ」

「え」

彼の握る刀が腹に刺さる

「がつー！」

「刹那ああああー！」

痛い傷が燃えるように熱い・・・遠くで龍宮の叫び声が聞こえる

「死んでも守るなんてのは弱え奴のこいつ事だ」

彼の言葉が頭に響く

「守られて死なれたら守られた方も迷惑だ」

私はこのまま死ぬんだ

「今のテメエに必要なのは生きる覚悟だ。守りながら生き抜いてみせり」

生きる・・・・・覚悟・・・・・もつすぐ死んでしまうかもしれない私が?

「お前はどうしたい?」

・・・・私?・・・私は・・・

「生き・・・たい」

「・・・・・」

そうだ私は

「生きた・・・い。生きて」のやがんを守るんや

「刹那・・・」

龍宮が二つの間にか私のそばにいた

自分の心に素直に慣れた・・・

「『悪夢』は見れたか？」

「これは・・・」

「え？」

「ジャスト一分だ」

その声と共に世界がまるでガラスのようくに砕け散り崩壊した

そこにいた彼は先ほどまでとは違う年相応の意地の悪い笑みを浮かべていた

「なに・・・が

龍宮も意味がわからぬようだ

やいじ私は気づく先ほどまでの焼けるような痛みが無いのだ

急いで自分の服を巻くしあげ確認するが先ほどまであった傷が無い

「されば・・・

龍宮も自分の体を確認するが先ほどおつた傷が無かった

「どうこういひとだ」

理由を知つてゐるであらう彼に田を向ける

「怪我が無いのは当たり前だお前らがさつきまで感じていたのは全て長い長い一分間の幻、夢だつたんだからな」

ニッコリと笑つてゐる彼の表情が少し憎らしく

「幻・・・だと」

「ああ

「・・・・聞いたことがあるありとあらゆる物に一分間の幻を見せ
る事ができる魔眼の一つ『邪眼』とこうモノがあると

一分間の幻だと

「よく知つてんなその邪眼だよ」

彼はあつさりと認める。恐らくそれを知られたところで彼からしてもたいした問題ではないのだろう

「桜咲」

「はい」

「お前の覚悟は立派だ。守りたい大切な人がいるそのためには命すら投げ出す・・・・だが、実際に死を体感してみてどうだった？」

「・・・・もの凄く・・・怖かつたです」

怖かつた・・・意識が闇に包まれていく感覺

頭に過る友人達

そして・・・・」のちゃんの顔

思いだして少し震えが走った

ポンと頭の上に彼の手が置かれる

「だつたら死んでもなんて悲しい」と、もつもつと

「・・・・はい」

その手は温かく心までも温かくなり私の目から涙がこぼれていた

「もう、大丈夫です。ありがとうございます」

「ん、
そ
う
か」

少しの間、涙を流していた私の頭を撫でてくれていた彼に礼を言う

さて、いいモン一つも見れだし、俺はもう帰るわ

— そひたな
もう解散してもいい時間だな

- 1 -

いしモノとはなんたゞい?

桜咲の泣き顔にてのは貴重なんだぞ」

た
！
／
／
／
／

わ
私の泣き顔って

「そういえば私も初めて見るな」

「た、龍宮」

そういえば最後に泣いたのは何時だつただろ？

「ま、普通に笑つてりや桜咲も龍宮もかわいいんだから少しほ笑えよ一人とも」

「「なつー／＼／＼」

何を言い出すんだこの人は

「じゃ、お先に～」

そう言い残し彼は駆け出しが少し離れたところで振り返り

「せうだ、桜咲～」

「はい？」

「男の前でおもいつきり服を捲るのはやめた方がいいぞ～俺は眼福だつたけどな～」

「？・・・・・・・・・・」

言われて思い出す傷の確認とはいえ私は彼の前で服を・・・・

「や、佐倉さん！～！／＼／＼／＼

怒鳴り声をあげるがそこには既に彼の姿は無かつた

「くくく。さんざんだつたな刹那」

「龍宮・・・かもな、でも彼に教えられたよ自分の命の大切さを・

・・する事の本当の意味を」

私は・・・お嬢様の事を守る事ばかりで自分の命まで見えてなかつたのだな

「しかし、どこからが夢だったのだろうな」

「邪眼のことか?」

そういうえば・・・

「一番最初の攻防は現実だつたのだろう?彼の服は切れたままだつた。そこから刹那が切れれる前までの間だな邪眼をかけられたとしたら」

「その途中が彼の実力・・・もしくはアレらが全て幻だったのか」

「佐倉佑太・・・悪いやつではなさそうだが実力は不明か」

「ああ」

十一 時間田「わへーつのか」（後書き）

十一話目を投稿しました。 今回はほぼ刹那サイドのお話でした。
回は期末試験の話になるか、飛んで春休みの話のどちらかです。
うするか考え中なので少し更新が遅れるかもしれません。
 ど 次

十二時間田「図書館島の探検」（前書き）

十三話田です。今回ばかりはすこしく短いです

十二時間目「図書館島の探検」

図書館島それは明治中頃に麻帆良学園創立とともに建設された世界でも最大規模の巨大図書館。ここには一度の大戦の戦火を避けるべく世界各地から様々な貴重書が集められた。蔵書の増加に伴い地下に向かって増改築が繰り返され、現在ではその全貌を知る者はいない。

そんな図書館島に今、俺は……いや、俺達（バカレンジャー + ネギ、木乃香、俺）はいた

「なんで、俺はここにいるんだ？」

「さつきも話したでしょ図書館島の深部にある読めば頭が良くなる『魔法の本』を探しに来たのよ」

「いや、だから何で俺まで一緒に行かなきゃいけないんだって聞いてんだよ……」

「アンタが頭悪いからよ！」

アスナよ……お前にだけは言わたくないんだが……あと、人を指さすな

「実はな……」

俺達の様子を頬笑みながら説明をしてくれる

十三時間田 「図書館島の探検」

「つまり、学期末試験でのクラス平均点が最下位のクラスは解散し
その中で特に成績の悪かった人は留年どころか小学生からやり直し
……と」

「やうやで。それでこの図書館島にある『魔法の本』を探しに来た
んや」

「…で、なんで俺も連れてこられたんだ?」

「それがな、ネギが佐倉君もあんま頭よくないつてゆうからついで
にって」

「ほりほり、あのガキヤシバクぞ

現在は図書館島地下二階、中学生を入れるのはここまでらしく

「ほりほり、アスナさん見てくださいーこれなんかスゴく珍しい本
…」

ネギははしゃぎながら近くの本棚の本に触るとカチッ...と音がする

「あ、先生、貴重書狙いの盗掘者を避けるために…」

夕映の言葉と同時にネギがいる本棚の反対側の本棚から矢が飛び出してくるが

「…せひ」

寸前で長瀬がその矢を掴む

「ワナがたくさん仕掛けられていますから気を付けてくださいね。マトモな図書館は地上部だけです」

長瀬は掴んだその矢を折つた

卷之二十一

死ぬわよそれ——つ！—

佐々木は半泣きでアスナは普通に叫んでる

しかし、なんだろう確かにこんなイベントはあったがその後どうなったけ？

最近、原作の内容がほとんど思い出せないんだよなあ…まあ、もう十数年前の知識だからかな

「では出発です！」

つ一つの間にか話がまとまり再び進みだす

その後もいろいろあった

高い本棚の上を歩いていたら佐々木が落ちかけたが新体操のリボンを使い難を逃れたり

上から傾き落ちそうな本棚をクーフェイが蹴りで元の位置に戻しその本棚から雪崩落ちてきた本を長瀬が全て空中で回収したり……と

いうかお前らソレ運動神経がいいってレベルの話じゃないからな
そして、ネギに関してだがどうにも様子がおかしい……いや、ネギというよりもアスナが妙にネギに気をかけているという感じだ

途中、休憩を入れ再び進むが、ここは本当に図書館か？

本棚に本はあるが道らしい道が本棚の上だつたり湖があつたり本棚を崖みたいに降りたり…ここはSASUKEかSASUKEの方が楽に見えるわ！あ、俺とネギ以外女だからKUNOICHIか

今は、床と天井が本の縦一冊分しかない隙間をほふく前進で進んでいる

「あ～んもういや～」

佐々木は何だかんだ泣きないとを言しながら走りはじまで通て来てるな

「夕映けつこう燃えてるやう」

「ふふ……わかっています?」

木乃香が夕映に尋ねると夕映は丶サインで返す

いや、わからねえよー少しほ表情に変化をみせりやーてか、よく氣づいたな木乃香

「ここまで来れたのはバカレンジャーの監さんの運動能力のたまものです。……佐倉さんもよくつこて来れましたね」

よくつこてつこておい

「よかつたのか?俺は別に一緒に来なくつてもよかつたのか?」

「……おめでとうです。わあ、この上に田代の本がありますよ」

「無視か、おい、無視かよー。」

俺をスルーし皆がさつさと上に上がつてく……無理矢理連れてこられてこの仕打ちつて

悲しくなんて無いやい

なんか田から汗が出てきたけど仮にせず俺も上に上がる

「…伝説の剣でもあるのか?」

そう口にしてしまうような部屋の造りだつた……まあ、魔法書も似たようなモンか。FFだと専門店があつたけど

他の面々のラスボスの間だのRPGで見た事あるのだ

「魔法の本の安置室です」

だから夕映、感動してんのはわかるが少しは表情を変化させんか

「こ、こんな場所が学校の地下に……」

アスナは苦笑いだ

「見てっ……あそこには本が……」

佐々木が指さす先には本が開いた状態で置いてある

「……あっ……あれば……」

「ど、どひしたのネギ……」

ネギが上げた声にアスナがいち早く反応する

「あれは伝説の『メルキセデクの書』ですよ」

何?メルケレド……その何とかの書つてなんだ?つうか、この位置からよく見えんな

ネギの言葉に皆が本物だと思い本に向かつて駆け出す……って

「おー、待てっ!」

「あんなに貴重な魔法書、絶対にワナがあるに決まっています。氣をつけて！」

しかし、そんな言葉も届かずネギや木乃香も含め七人の姿が消える本が置いてある祭壇への橋が急に無くなつたのだ

「つー」

急に姿が消えた事に焦り急いで駆け出しが

「は？」

「いたたたあ」

「え？ 何これ？」

以外に浅かつたらしい

「大丈夫か？ お前ら」

「はいです」

「なんとか」

「ならないが…… 英単語 TWISTER？」

全員の無事を確認した後ふと田に入つた言葉を読む

「?ツイスター ゲームがどうかしたの」

「いや、そこに書いて……」

言いながら俺もそこに降りると

「フオフオフオフオ」

祭壇の左右に立っていた石像が動き出す

「！」の本が欲しけば、わしの質問に答えるのじゃ～

「キヤーーーーー！」

「せ、石像が動いた～～～」

これがワナねえ～・・・・・びつ聞いてもこの声って学園長じゃん

そして、質問といつか英語の問題が始まる。答えを教えると失格らしいのでネギがジユースチャーや関連性のある言葉で遠まわしに説明をする。そして…

「す、い体勢だな」

「やね

わかつてはいたがツイスターゲームつてのは互いに体が交差やらなんやらで大変だからな～

「最後の問題じゃー！『DISH』の日本語訳は？」

答えは皿だが

「おー。」

「アーッ。」

そつ、こりまではよかつた

「うー。」

『ひ』だと思ひ『アスナと佐々木が手足を付けたのは

「・・・・おそれる。」

「ああ、たしかに『る』を押してゐるな」

『る』の文字だった

「ハズレじゃな

笑いながら石像は手に持つていたハンマーで床を叩き割つた

「ひゃああああ～～～～

「アスナのおそれる～～～～！」

そして全員が暗闇の中へと落ちていった

十二時間田「図書館島の探検」（後書き）

いつも、H.C.です。今回は図書館島編の前半を御贈りしました。まとめるとなれば長くなりそうなので前後半に分けたら前半がこんなに短くなりました。すみません。今回は前回のあとがきで書けなった事も書こうと思います。佑太の邪眼に関してですがこれはGet Backersの主人公の物ですが持っているのは邪眼だけでもう一つの力の方は持つていません。そもそも、これは本当は佑太は持つはずではなかつた物でした。その事に関してはそのうち物語で出すと思いますのであしらう。

次回の更新は早くて土日、遅くとも来週には投稿するつもりです。

十四時間目「地底図書室と期末試験」

「キヤアア～～～」

「みんな」

落ちながらアスナと共にあそこへいた8人が落ちていく

「あわわーた、助けて～つ

「ネギー！」

ネギも手足をバタつかせながら落ちていくがアスナがネギに近づき自分の方へと抱きしめる

「いや～ん

「わあ～

「ちひ

俺の近くにほいのかと佐々木がいるのでほいのままでは不味いと思

「先に謝つとくわ」

「わっ！」

「ひやー！」

二人を胸元に引き寄せ抱きしめるクーフェイと長瀬は既に空中で体勢を整え夕映は長瀬が抱えているので大丈夫だろう

そしてそのまま暗闇から抜け明るくなつたのと思い当たりを確認するまもなく水に叩きつけられ意識を失つた

十四時間田「地底図書室と期末試験」

「…………」

誰かの声が聞こえる

「…………」

ついさむいな、もう少し寝かせろつての

「…………！」

だあーーもう一起きればいんだろ起きれば

ひとつと皿を空けないと皿の前には黒い影

「ん……」

それにしてもなんか今日の枕は妙に寝やすいな

「あ、起きたん？」

「この声は

「この……え？」

「やつやえ、佐倉君」

そつか、田の前の影は近衛か・・・・・ってはあ？

「なんで……っ……」

起き上がりうると右肩に痛みが走る

「あ、まだ大人しゅうじとかんとあかんで。右肩外れてたんやから」

「ああ」

そうだ、思い出したわ。俺達は図書館島に魔法の本を探しに来て安置室まで行つたはいがトラップに

ハマリ

「落つこちたんだつけ？」

「せうやで。ごめんな佐倉君私達を庇つたせいで怪我をせつまつて

「お前らは怪我なかつたか？」

「うそ

「ならこころ」

底つときながら底つた相手に怪我をせるなんて事になつたら意味ねえからな

「それで、『』は図書館島のどのへんなんだ？」

「なんか、夕映が『』には”幻の地底図書室” ゆうりじくてな、地底なのにあたたかい光に満ちた貴重な本がぎょひたる本好きの楽園なんやで」

「楽園つて……んで、あそこで騒いでる連中は？」

少し離れた場所でネギを中心に泣いたり笑つたりしてゐ

「ああ、あれな。あれはネギ君が期末に向けて『』で勉強するゆつてな」

「ああそれでか……ん？期末までに戻れるのか？」

魔法を使えば話は別だが

「困難らしくけどネギ君は何とかなるつて」

まさか、魔法を使つとか言わないよな

「……とにかく近衛よ」

「なんや？」

「なんでお前の顔が常に俺の田の前にあるんだ？？」

「わっせからずつと同じ位置にこののかの顔がある

「ん？ 膝枕氣持ちようない？」

「いや、わうこうわけじや…ん？ 膝枕？」

「ん、膝枕」

あ～、さっきから後頭部に当たつてるふにふにした物はこののかの太股だったのか

「……もう少し頼むわ」

「はいな」

まさか、こんなところで”かわいい女の子に膝枕して貰う”といふ男の夢が叶うとは思つてもみなかつた。役得役得

「お、田を覚ましたで」「さるか佑太殿？」

「ああ」

「ちつー糸田が何しにきやがつた

「外れた肩は拙者がはめ直しておいたが、少なくとも一月は腕を吊

つて安静にしていた方がいいでござるな

「わかつた。ありがとな治療してくれて」

それと糸田と言つて悪かつた

「礼には及ばんでござるよ。それでは拙者達は食料を探してくるでござる」

「俺も言つた方がいいか?」

このかの膝枕は惜しいが

「大丈夫でござるよ。佑太殿は安静にこのか殿は佑太殿を見ていて下され」

「わかつたえ

「すまんな

糸田……いいやつだ!

「つーわけだ」

(何が「つーわけだ」よーあんたまた原作忘れてたわね)

「しょうがなーだろ、もつ十年近く前の事なんだから」

(その十年近く前の事を私は覚えてーるけど…)

「生意気言つてすみませんでした」

授業をやつてーるネギ達からトライアードと書いて離れ仮契約カードを使
い地上のHつかさんと念話をしてーる

(とつあえず、全員無事なのね)

「ああ、少しの怪我と俺の肩が外れたらいいだ」

(あなたの事はどうでもこーわ。Jリチではあなた達は学園長の許
可を貰い兄さんが特別授業を行つて事になつてるわ)

「まあ、Jリチの元の原因は全部あのジジイの所為だからな

(やうね、それと非常口の場所はおぼえてるの?)

「ああ、確認もしてきた」

(ナニ?…あ、あと、私にも最終課題が出たわ)

「どなんなんだ？」

(兄さんおよびあなた達がいない2-Aを纏めて、期末試験のクラス平均を前回の試験よりも上げれば正式に教員にしてくれるそうよ)

「大丈夫そうか?」

(ええ。だからじつらの心配はしないであなたもしっかり勉強しなさい)

「わかつたよ」

エリカさんとの念話を終え続いてアキラと裕奈にも念話で状況報告をした佐々木の無事を伝えると一人は安心しそうして自分たちにも声を掛けなかつたのかと文句を言われ最後にエヴァからの伝言と言う名の死刑宣告を伝えられた

強制的に連れてかれて修行を休んだからつて時間無制限の魔法の回避特訓は酷いと思います。てか、反撃無しで全力の真祖の魔法を避け続けろつて無理でしょ！普通にえいんのひょうがとか避けられませんから！あんなん長距離の転移魔法以外でどう避けると！一応は死なない程度に手は抜いてくれるんだが、逆に死にます。あんなのただの酔り殺しです。

帰つてからのエヴァの御仕置きを想像して法えていると

「キヤー——ツ！」

「何だ？」

悲鳴の聞こえた方に向かう途中で

「ネギ先生！アスナ！近衛！」

「佑太」

「何があつたんだ？」

「わかんない私達もこのかに呼ばれて今向かつてるとこ」

そして、そこには

「誰か助けて〜」

「ま、またあのでかいの！」

「ゴーレムですよーーアスナさん！一緒に落ちてきたんだー

魔法の書の安置室にいたゴーレム（まあ、学園長が操つてるんだが）
がタオル一枚の佐々木を掴んでおり、同じくタオル一枚の長瀬とク
ーが対峙していた

とりあえずジジイよタイミングを考えろや

「つで、佑太！あんたは後ろ向いてなさい」

「はいよ

アスナに言われ俺一人後ろを向かされる

…しつかり網膜に焼きつけといたしいいだらう

「ほほ、僕の生徒をいじめたなー」レーヴィンでも許さないぞ…

ラス・テル マ・スキル

ちょ、ネギ！お前何を

「くらえ！魔力の矢」

あれ？

当たりが静寂に包まる

「咲」

「咲~のや……？」

あ、そういうこいつ自分で自分の魔法封じてたんだつけ？

「フオフオフオ、二二二から三三三は迷宮を二二二歩かなければ出られないで。もつ観念するのじや」

「み、二二二ー」

「それではテストに間に合わないアル」

「み、みんなあきらめないで」

「二二二と聞か驚いている姫に對してネギが励ます

「僕の魔法の杖で飛んでいけば一瞬だから……ハツ！」

「二二二、二二二、ネギー！」

「二二二本当に魔法を隠す気あんのか？」

「咲…咲~のつ~？」

「キヤ――――――何でもない何でもない」

必死でネギを庇うアスナ

「とにかく、私達は諦めないんだからねー明日の期末テストまでに絶対ここを抜け出してやるーとにかくみんな逃げながら出口を探すわよー」

「帰るん?みんなの荷物取り行かな」

「俺も行こつ」

アスナの言葉に荷物を取りに戻ることのかの後に続く

「長瀬、クー、じいには任せたぞ」

「OKアル

「二二二二」

あの一人なら大丈夫だろう

みんなの荷物と水浴びをしていた三人服を持ちこのかと共にみんなと合流する

「ほら、服だ。それとその本持ってるんだ?」

佐々木達に服を渡し何故クーがメルなんとかの書を持つているかを聞く

「ありがとうーさっきの『一レム?』の首のところあつたのを逃げるついでに取ったの」

やっぱ、バカレンジャーって身体のスペック高えな

「お、待つのじゃ～」

「あの慌てよつけたとおりかに地上への近道があります」

「うつむだー。うつむの滝の裏側に非常口がある

先頭に出てみんなを先導する

「うふ、あんた何で非常口なんて知ってるのよ」

「昨日見つけた」

「なり早く言こなせこよ―――」

「いや、綾瀬がここにいたいって言つたから

「それとこれとは話が別です」

いや、そんなにすねなくとも

「うるだ

話している間に非常口の前に着く

「ホントにこんなとこあつたんだ」

「あれ？扉になんか書いてある”問い合わせの過去分詞の発

音は？”これって問題？」「

「ええ～～つなにそれ」

「そんなこといきなり言われても」

問題がわからずアスナ達が戸惑つていると後ろで追いかけてきたゴーレムに蹴り飛ばしていたクーが

「ムム…これワタシコレわかるアルよ…答えは”red”アルね！」

正解の音と共に扉が開く

「ひ、開いた～」

「早く中へ

中へ入ると今度は天へと延びるかのように上へと向かう螺旋階段あつた。天辺は暗くてよく見えない

「コマ、上まで登るん？」

「しかないだろ？な。行くぞ」

階段を上っていくと壁を破つてゴーレムが追いかけてくる

「しつこいなーまだ追つてくるアルよー」

「ならぬ、本を返すのじゃー」

「ゴーレムの言葉に佐々木とクーがあかんべーとする

「わっ！また石の壁に問題が！」

その問題を今度は長瀬が答え扉が開く。その後もたびたび扉に書かれた問題が道を塞ぐが迷うことなく

答えていく

「あつー。」

「夕映ちゃん！」

しかし途中、夕映が木の根につまずき転んでしまつ

「うー、こんなとこりに木の根が……足をくじきました」

「ええ～～大丈夫？」

「先に行つてください、この本があれば最下位脱出が……」

「だ、駄目ですよ夕映さん」

夕映が本をネギに差し出し先に行くように囁つがネギは本を受け取らずアタフタしてゐ

ひょい

「わあー。」

「せ、せやつとこくわー後ろから『一レムが来てんだから

夕映を左肩に抱き走り出す

「お、おぶるなりしつかりとおぶるですー。」

「あ、右腕が動かねんだこれで我慢しろ」

「で、でも……は、恥ずかしいですか」

「気にするんな。おら、お前らも呆けてないで行くぞ

そのまま再び階段を上って行く

そのままじまじま歩いて行くと

「あ、携帯の電波が入りました地上が近いです」

携帯を握っていた夕映が圏外が消えた事を知らせて貰ると

「ああ、みなさん見てくださいー。」

ネギが指さす先には

「地上への直通エレベーターです！みんな、急いで乗ってくださいー。」

全員で掛け込むが

ブブー——ツー！

重量オーバーの表示が点灯しブザーが鳴る

そこで全員が騒ぎ出すがアスナが片足を出すだけでブザーが鳴りやむ事に気がつき

「みんな、持っている物とか服を脱いで！」

言葉にそれぞれが服を脱ぎだしきまいにはほぼ全裸の状態になるが

ブブー——ツ！

音は鳴りやまなかつた

「やつぱり駄目アル～」

「もう捨てる物ないよ～、後少しなのに

……さて、眼福もした事だしさつわと地上に戻るか…おつと鼻血が

「これ、捨てりゃいいじゃん」

Hレベーター内にある本をつかむ

「え？」

「ちよー..」

「それはー..」

۱۸۹۷-۱۸۷۰

その本メテ…なんだつけ?の書を外に投げると

「フォフォフォ・・・ぼお！」

偶然登つて来たゴーレムに当たり本と共にゴーレムは地下へと落ちていいくのを見ながらエレベーターの扉は閉まった

「あんた！何やってるのー！」

「せつかくの魔法の本が～」

「あ？ んなモンなくても何とかなんだろ。それにしつかり勉強したんだろ」

「それは…」

「そりだけど…」

「なら、魔法の本なんかに頼んなくとも大丈夫だろ。第一テストつてのは持ち込みできねえのに本がなきゃ解けないって時点でダメだ

۱۰۷

「あ」の「一」

気づいてなかつたのかよ

「まだ、時間はあるんだ、何とかなるさ」

全員の表情が柔らかくなる

「あ、どうぞ」

エレベーターの1Fの表示が光り扉が開く

「外に出れた――――！」

卷之三

「とりあえず、まずは誰かに連絡して服持つてきてもらえ」

アスナにおもいつくそ殴られました

その後の事を話そう。徹夜で勉強し一時間だけ寝るつもりが寝過ぎてしまい遅刻で別室で受ける事になった。途中、寝不足の俺達にネ

ギが魔法を使い眠気を飛ばしてくれた……終わったから寝よつと思つていたのに

そして数日後、クラス成績発表日、原作通り最初の発表で最下位だつたためネギが故郷に帰ろうと駅に向かつたのをアスナが追いかけ止める。その後に俺を含めた遅刻組がネギの元に集まる

学園長をもう一度説得しようと話していると学園長が登場。遅刻組の点数をクラス全体に合計し忘れたと言ひその場で全員の平均点を発表した

このか、富崎、ハルナの三人は何時も通り好成績、そしてバカレンジャーも大幅に平均点を上げていた。そして…

「最後に佐倉佑太なんじやが……お主、普通に試験を受けたんじやよな?」

「ああ、そうだが?」

「え、そ、そんなに悪いんですか?」

その場にいた全員の顔に不安が浮かぶ

「い、いや逆じやよ……おほん、では改めて佐倉佑太。平均点は… 9
4点じや」

「「…………はあ！－」「」

「な、なんで！佑太？！」

「いや、俺が苦手なのって英語だけだし」

「納得いかないわよ……。」

なんでこんなに攻められたなあやこけないんだよ

「まあ、あれを2・Aに合格すると2・Fを上回り2・Aがトッピングやー！」

「……やつた――――――――。」「

JJひして2・Aはクラス最下位から脱出し平均点も前回の試験よりも上回ったためネギとHリカさんは

4月から正式に教師となつた

十四時間田「地底図書室と期末試験」（後書き）

十四話目です。図書館島編が終わりました。この後春休みを挟んでエヴァ編へと突入です。次回の更新は決まってませんが来週までには一本書き上げるつもりです。それでは

十五時間田「とある春休みの日々 やの」（前書き）

遅くなりましたが十五話が書きあがりましたので投稿します

十五時間目「とある春休みの日々 もの」

色々あつたが無事に期末試験を終え終業式も済み春休みを迎えた

「…………ふむ」

「ど、どうかな?」

「?・?・?ああ、普通にうまいぞ」

「や、やつ…………よかつた」

俺達は今、女子寮管理人室…………つまり、俺の部屋?でアキラと一人朝食を食べていた

「しかし、別に何もできねえって訳じゃねえから、毎日来なくっても……」

「うひうん、私達が好きでやつてる事だから…………迷惑……かな?」

「んにゃ、助かってるよ。ありがとな」

「うふ」

期末試験の翌日、エヴァと茶々丸そしてアキラと裕奈が俺の様子を見に来た

エヴァは

「ふん、油断しているからそんな怪我をするんだ」

と、少しイライラしておつ、肩の治療を頼むが

「は？なぜ私がそこまで貴様の面倒を見なければいけないのだ？」

と呆れた田で見られた

茶々丸は

「ヒカリが塗り薬です」

茶々丸からは魔法薬の塗り薬の差し入れた。なんでかんだで心配してくれたようだ

アキラは

「それで、怪我の様子はどうなの？」

純粋に心配してくれ

裕奈は

「なんで私も連れってくれなかつたのよ～」

図書館島に一緒に行けなかつた事にブーたれてた

俺だつて無理矢理連れてかれたんだよ

その後、エヴァと茶々丸はすぐに帰つた。一応怪我が治るまで修行

は無じだやつだ。そして裕奈とアキラと三人で飯を食べる事になつたんだが

「何これ――――――!」

やべつ

「佑太、普段朝何食べてんの?」

ん?そりゃ

「コンビニ弁当かレトルト食品」

「却下――――――!」

十五時間目「とある春休みの一日 その一」

「やついや裕奈は?」

「休みだからまだ寝てるよ」

「やうかい」

それからという物、毎日アキラと裕奈の二人が飯を作りに来るようになった

「今日はどうするの？」

「とくに用事は……アキラは？」

「部活も無いし修行の方もエヴァちゃんが用事があるから今日無しだって」

一人で今日どうするかと話していると……

バンッ！

「テートしょーつ……アキラ！佑太！」

「「は？」」

突然、裕奈が部屋に入つて來た

「つまり、裕奈も部活が無いし暇だから出かけよう」と

「そうー！」

裕奈はけつこう育つた胸を張り言つが

「嫌だ」

俺はきつぱりと断る

「えええ～～～なんでも～～～！」

「こんな腕の状態で、出かけようとは思わん。それにせつかくの休みなんだしゆつくり休めや」

「嫌だよ や、アキラ部屋に戻つて準備してこよ」

裕奈はアキラの手を引っ張りドアへと向かつていく

「佑太も準備して30分後寮の前に集合だから、じゃ

そのまま一人は部屋を後にした・・・・だから、俺は行くとは言つてないんだが

30分後

「ああー行くわよー

「あははは・・・・・

「・・・・・・・

で、結局俺はここにいる。さすがに行かないと迎えに来そつだしな

はあ～、せっかくの休みが・・・・

アキラ side

「着いた～渋谷～」

私達三人は裕奈の提案で渋谷へと来ました

「何処に行くの？」

「ん～とりあえず服とかいろいろ見ようよ」

裕奈の提案に私は賛成だが・・・

「佑太君もそれでいい？」

今日は一人じゃないんだから佑太君にも聞こうと思った

「ん？・・・あ～その前に行きたいとこがあるんだがいいか？」

「ん？どう？」

「ケータイを買いたいんだ。この前の図書館島で水没したから

「あ～そういえばそんなこと書いてたね」

その時に夕映に勝ち誇った顔をされたつて言ってたしね

夕映曰く

『図書館島探検部として防水ケータイなんて初歩の初歩です。何が起こるかわからないのに普通のケータイを持ってくるなんてバカです』

と言つてた。実際にあの時にケータイを持つて来ていた人は佑太君を覗けばみんな防水だつたらしい

「それじゃ、まずはケータイショップにGOー！」

そしてケータイショップ

「見て見てアキラ！これかわいくない？」

「うん、色もきれいだね。新しい機種？」

「そつみみたい！あ～私も機種変しようかな～」

「ふふ。佑太君はどういうのがいいの？」

「俺は、できるだけシンプルなのでいい。余計な機能とか覚えんのがめんどいし」

そう言つと佑太君の視線は『超シンプルケータイ』と大きく書かれているコーナーを見ているが

「いや、佑太君」

「それはちょっと待つて……」

そこに「一ノ瀬の上には『お年寄りケータイ らくらくホン』と書かれていた

「覚えやすそうだからコレで」

「ダメ…………」

なんとか説得して再びケータイを選ぶ

「そうだ、いっそ私達と同じ機種とかどう?」

「そうだね、それなら教える事もできるし」

「そうなればいい、一緒にいらっしゃる時間が……その……ふ、増えるし

「それはいいが……お前ら一人とも機種別々じゃ?」

「…………あ」

そ、そ、そ、う、だ、つ、た、私、と、裕、奈、は、機、種、が、違、つ、た、ん、だ

「ま、まあそれでもどっちかと同じの方が結局は教えやすいから……」

・

「それもそうだが……一応それも考えに入れとくわ」

そう言い再びケータイを選び始める佑太君

結局、佑太君は私とも裕奈とも違う機種を買いました
ちょっと残念かな

side out

ケータイを購入し時間が少しかかるよつなのでケータイショップを
後にし三人で再び街に繰り出す

「じゃあ今度は服見に行こうよ」

「いいかな？」

「ああ。俺の用事は終わったから今度は一人に付き合つよ」

この言葉を俺はこの後少し後悔した

三時間後

「うそ、裕奈によく似合つと思つよ・・・・」

「いいじゃーアキラ似合つてるー」

「人は互いに選んだ服を評価し合い、俺はそれを遠目から見ていたが

「……女の買い物がここまで長いとは」

店に入つてから約三時間。一人は未だに服を選んでいる

そんな一人をボーッと見ていると

「あれ？ 佐倉君？」

「んあ？」

横から掛けられた声にそちらを見ると

「村田？」

俺が村田？の名を呼ぶと村田？はガクツとうなだれる

「村田って誰よ…私は村上。村上夏美だよ！」

「おお、そりか悪かつたな村上。で、何やつてんだ？」

「私達は服を買いにちよつとね。佐倉君は？」

「俺はアレの付添だ」

未だに服を見ている一人を指さす

「アレ？ …… 裕奈とアキラ？ 佐倉君て一人と仲良かつたんだ」

「まあ、ほどほどにな。村上は一人か？」

「ううん、私は・・「だれだ」

村上との会話の途中に急に視界が真っ暗になり後ろから声が聞こえた

「誰だ？」

なんとなく予想はつくが……おおう、背中が天国だ〜

「ふふ、ヒントはあなたの知り合いです」

「いや、普通見ず知らずの人にはこんなことはしないと思うが？あと、チチが当たつてんだが」

「それもそうね。そ・れ・と・それは当てるのよ」

とつとつ蠅れゐ

「もう少しこのまま」

「思考と実際の言葉が逆転してゐるわよ」

何と！俺とした事が

「お望み通りも「レッスン」のままです……」

「ち、ちづ姉えゝ何時までやつてるのゝ」

「あらあら、夏美つたらバーハンや面白くないじやない」

村上の言葉で背後にひつ付きながら俺に田隠しをしているのが那波千鶴と判明した

「とりあえずこの田隠しはハズしてくれないか？何もみないんで」

何時までも視界が真っ暗じゃ……危ない妄想しちゃいそう…

「いいけど、田隠しだけでいいの？」

「できれば背中の感触はもう少し……」

「これは止みつきだ

「そり、それじゃ」た~いめ~ん

「は？」

千鶴の田隠しが止め目に入ったのは田の光と……

「「二二二（怒）」」

笑顔が素敵な一人の般若でした

「佑太君？（怒）」

「何をしてるのかにやー（怒）」

「あ~~と」

この状況どうすんべ

などと呼んで云ふ

「えい」

ପ୍ରକାଶିତ

背中の柔らかな感触がさらに・・・つて

「那瀬さん何をなさいますですか？」

振り向かず千鶴に文句を言うか

たてで依太君が隠しハスして抱き合って来て

「言つてねえ！」田舎じハアして、中の感角はそのまゝで、言つたんすけど……あ」

— ケヌケヌケヌ —

アキラと裕奈の目元が前髪で暗くなつてゐるのに眼だけあやしく光つてゐる・・・・普通に怖いんですけど

スコシ〇 H A N A S I ショウカ」

わ
い
・
・
・
死
ん
だ
?

「村上達はもう帰るの？」

「ええ、寮であやかが待ってるから」

本当はいいんぢょも一緒に来ればよかつたけどこつもの病氣・・・
じやなかつた悪い癖が

「あやか？」

「いんぢょの事だよ」

「ああ、あのショタか」

佐倉君つて本当に人の名前覚えないんだね

「やう、そのショタ委員長が寮にいるから帰らなきやいけないのよ。
いつもびょ・・・じやなくつて
悪い癖が出てなきやいいけど」

ちづ姉は片手を頬に当てながらため息をつく。「とこかちづ
姉キツイつて

「やう、それじゃあたし達はもう少しお店回つてから帰るから

「え? まだ回るの?」

「またね那波さん、村上」

「おう！またなアキラ！裕奈！」

二つの間にか私の横で一人に向かい手を振つてゐる佐倉君

「佑太はこちだにや～」

そう言われ佐倉君は裕奈に襟を掴まれ引きずられていく・・・なんかドナドナが聞こえるよ

三人に向かい手を振り寮へと帰ろうとするが

「ちび姉？」

「ん？ どうしたの？ 夏美？」

一瞬、佐倉君達を見送るちび姉の顔が寂しそうだった？

「大丈夫？」

「へ～どうしたの、夏美いきなり？」

「いや、なんかちび姉が少し寂しそうだったから

「そんなことないわよ。まあ帰りましょ～か」

そう言つてちび姉は駅の方へと歩き出してしまつ

やつぱり少し変だ・・・やつぱれば今日のちび姉は少しこいつもと違つたような

少し子供っぽかったといつか何といつか……

甘えてた?

誰に?

でも朝は普通だった、ここに着いた時も

何時から?

買い物しててアキラ達を見つけた時から?

・・・・・あれ?

「ちび姉・・・もしかして佐倉君のこと・・・」

s i d e o u t

? ? ? s i d e

はじめまして私は麻帆良学園中等部2・A 出席番号7番 柿崎美砂です

私は今クラスメイトの釘宮円と椎名桜子の三人で渋谷に遊びに来て
います

春休み中なので思いっきり遊ぶぞ～！

と、考えていたんですが・・・

「ねえいっじゃ、俺達と遊ぼうぜ」

ナンパ男五人に引っかかっています

「いえ、いいです」

「そんなこと言わないでさあ～」

も～いつもなつたら

「しつこいな～彼氏がいるんで聞こ合ってますー！」

「でも、今日は一緒にないんでしょう？だったら今日は彼氏の事なんか忘れてさ、俺達と楽しもうぜ～」

ホントにしつこいな円と桜子も嫌がってる、面倒じゃないが、私は何度も似たような経験があるため少しは対処の仕方がわかるけど二人は慣れてないらしい早く何とかしないといこの手の男は

「いいから来いよ」

「あやー！」

腕を掴まれて引っ張られる

遅かった、ヤバいこのままじゃ・・・誰か！

「さすがに無理矢理はちと不味いと思つぞ」

私のそんな祈りは届いた様だ

「な、なんだテメエ」

「ん？俺か？」

私の腕を掴んでいる手をさらに掴む手、そして聞こえた声は「」最近は聞いてなかつたけどウチのクラスで一人だけいる男の子

「」このクラスメイトです

「あ、佐倉？」

なんで？

「どりあえず」このが痛がつてゐから離してやつてくれねえか？」

「いででででークッ！」

急に痛がつたと思つたらナンパ男が私の腕から手を離す。そして離れた腕を見ると佐倉が掴んでた場所が少し痣になつてゐる・・・どれだけの力で掴まれたんだろう

「」のガキ！どちら痛い目にあひてえらしいな・・・おい！」

どうやらこの人がリーダー格だったらしいこの男の声でさつきまで

巴と桜子にちよかい出してた人たちも集まつて来た

「覚悟はいいな！いく」「ちょい待ちー」「あ、？」

殴りかかるうとする男達を一声で止める。中途半端で止められた所
為か五人全員が佐倉を睨みつける

「なんだ、今更いの？」「いや、俺はあの人たちがあんたらに用がある
と言られて呼んで聞くれと頼まれただけだ」「何だと」「

佐倉の指差す先には・・・

「げ！」

「うわあー！」

「うわあー！」

金や黒の長い髪に赤いルージュひらひらしたスカートなどの服を着
たおっさんがいた

あれつて・・・何なんだろう？

「こんなガキの相手なんかしてないであの人たちのとこに行つた方
がいいんじゃないかな？」

いや、佐倉さすがにそれは無理があるつて・・・しかし

「そ、そうだな／＼／

「おい！早く行こうぜ見失つちまつ」

「ああ、小僧、殴りうとしたりして悪かつたな」

「行くぞ！」

そう言ってナンパ男達はその人たちの元に向かって行ってしまった

「いよいよ～～」

佐倉はハンカチを片手に男達を見送った

「ありがとう！佐倉君」

「助かったよ」

桜子と円の二人はナンパ男たちが去った事で安心したのか窮地を救つてくれた佐倉にお礼を言つている

・・・・あれ？この状況よく考えたら私達はの人たちに負けたつて事？

「もう生きていけない。」

「ん？どうしたの美砂？」

「きつと安心して腰が抜けたんだる」

「違うわ！」

「お、のんびりしてないで、わざわざこれから離れるんだ」

「お、のんびりしてないで、わざわざこれから離れるんだ」
そう言つて佐倉君はわざと歩いて行つてしまい、私達はその後を追いかけた

少しすると遠くから男の叫び声のような物が聞こえたような気がした

『いい悪夢見れたかよ』

「？なんか言つた？」

「いや、何も

その後、佐倉君と一緒に来ていたらしくアキラと一緒に流しそのまま行動を共にした

だけど、あの時の佐倉の言葉が私の中で引っかかる

『こんなガキの相手なんてしてないで』

その後、佐倉にさつきの事を聞いてみたら

「ん？あれかそのまんまの意味だが？チチもねえガキを相手にするわけねえだろ」

「私達がガキなんて……あなたも同じ年でしょうが

それに胸だつて……私は一般的にはフツ よ！」

まあ、その後ゆーなとアキラの二人に打たれていたけど・・・二人
つてあんなキャラだっけ？

とにかく！私をガキなんて・・・絶対に私の魅力をわからせてやる
んだから！

彼氏持ちをなめるなよ！

side out

十五時間田「とある春休みの日々 やの」（後書き）

やってしまった・・・。またフラグを立ててしまった。普通に回収できなくなりそうです。そして、お知らせです7月8月はリアルが多忙なため更新は不定期になります。空いた時間にコツコツと書くつもりですが、周一とか無理そうです。私めの未熟な小説を楽しみにしてくださっている方には申し訳ないと想います。

十六時間田「ひかる春休みの日々 やのい」（前書き）

だいぶ寂れましたがようやくかけたので投稿します。
今回まちゅっとやりすぎた感が・・・

十六時間目「とある春休みの日々 その1」

「…………眠い」

「どれだけ寝れば気が済むのかしらあなたは」

春の暖かな日差しの中、学園都市の展望台に一つの影がある

「だって、こんなにいい天気の日にゃ昼寝をしたいと思うのが普通だと思うのだが？」

「それは一部の怠け者と呼ばれる人たちだけよ。……変わらないのねあなたは、転生してもしなくとも」

まあ、言わずもながら俺とエリカさんなんだけど

「人間、そうそう変わりはしないぞ」

「普通は前世の記憶があったら少しば違つ生き方をしてみたいとか思わない？」

「…………十分にしてると思うけど？」

生まれた家系が魔法使いだつたり、魔法が使えず落ちこぼれと言われたり、師匠に無理矢理に修行の旅に連れてかれたり、男なのに女子中に転校させられたり、エヴァに殺されかけたり、エヴァにじごかれたり、別荘を借りる代わりに血を吸われたり……今のところの半分近くはエヴァがらみだな

「…………うう。でも、あなたのやの急け癖は変わつていてほしかつたわ」

そんなに呆れるより言わんでも

「ひやつて氣を抜いてないとやつていけないって……ふあ～～

あ～マジで睡魔が…・・・

卷之三

「あ？ どうしたそんな口どもつて？」

ひひじきくひらこなひかかしそわせ

「ひじや？」

噛んだのか

あ～あ、首まで真っ赤にしちゃつて

「ここから」ひびきで来なさいー！肩腕だと寝ずりこでしゃー！」

「あ」

無理矢理頭を掴まれ膝の上に置かれる

「～～～

エリカさんは妙に嬉しそうだが、俺は周りの田がすぐ気になつて
います展望台つて意外と人いるし、そこで十歳の女の子の膝枕つて。
・

意外とアリ?

・・・・・・・いや、俺は口づじやない・口づじやない・・・はず

しばりくせの状態でいると睡魔が・・・

「あれ? 佐倉君にエリカちゃん?」

「何やつてんのこことこんで」

「@+*#,%&,&%!-!」

「あで～!」

急に立ち上がったエリカさんの膝から落ちた地面に頭をぶつかる

・・・痛いし田え覚めちやつたよ

「ううう、アスナに近衛か？」

後頭部を抑えつつ起き上がり声を掛けてきた一人を見る

「で、何してんのよ」こんなところで

「ん？ エリカ先生とデート」

「「「な！／＼＼＼＼」」

アスナと近衛はわかるがエリカさんまで驚かんでも

「……」「冗談だ」

「……」

エリカさんにグーで頭をグリグリされた……痛い

「一人で学園を見て回ってたんですよ。ここに来てあまり経つていいませんからね」

「そんなら、ウチらが案内しよか？」

そりゃ嬉しいが……

「眠いからパ」「それではお願ひして貰つてもいいですか？近衛さん、

神楽坂さん「いや、俺は『それでは行きましょうか、佐倉くん』だから！」

俺の声を無視しヒリカさんは俺だけに見えるように

「ね！」

素敵な黒い笑顔でこちらを見る

一緒に行かないといつ選択肢は俺には無いらしい

「わかったよ」

俺も重い腰を上げるが

「ああ、ちょっと待つてもう一人来るから」

「？もう一人つて『ピンポンパンポーン、迷子のご案内です。中等部英語科のネギ・スプリングフィールド君。保護者の方が展望台近くでお待ちです』ネギか」

放送で呼び出すのかよ

しばらくすると半泣きのネギが来た

「アスナさん酷いです…つてヒリカに佐倉さん？」

「ようー。」

「」んにちむ兄さん

「『ジリット』一人とも『リリス』？」

「『リリス』にいたらアスナ達が来て学園を案内してくれるハシからネギを待つてた」

「『ルウ』なんですかー？」

「『ルウ』や、 わすがに一田じゅ学園内全部は案内しきれんえ」

『リリス』で広いんだ学園都市！

「三人とも『リリス』から見てみなよ」

「うーん、 風がとつても気持ちいいわあ」

アスナに呼ばれた方に行くと

「うわあ～」

「スゴイ・・・」

そこからは麻帆良学園都市が一望できた

『リリス』まで広いか学園都市！

いや、 広すぎだね！」

少しそこからの眺めを楽しんでいる（主にネギとヒリカさんが）と近衛とアスナが学園長に呼ばれたのでどうなるかと思つたがたまた

まそこを通りかかった鳴滝姉妹が変わり案内してくれる事になった

「いいですよ。学園の案内ですね」

「それならボクら散歩部にお任せあれー！」

「散歩部？どんな活動をつてお散歩をするクラブに決まりますよね」

あ～いいなそれほのぼのして・・・入るつかな散歩部

後ろで鳴滝姉妹がネギにハーブスポーツだのプロのスポーツ選手だの毎年死傷者が出るなど言つてるが嘘だろ、それ

最初に向かつたのは中等部専用の体育館

「ここでは21あるクラブが青春の汗を流していく感じ

「何やつてんのあんた？」

「ナレーションだ」

「その説明はわざとボクがしたよー！」

「やつほーーネギ君ーエリカちゃん！佑太！」

「あ、ゆーなさん」

「ここにちは」

「よー。」

話してくると部活中の裕奈がやつて来た

「どうしたの？」

「いや、風史が学園案内してくれたから」

「あとめんなあですかーー。」

一人纏められるのが嫌なのか後ろで騒いでる

「むへへ後で覚えてるよ~」

「はいはい」

とつあえず体育系の部活はドッヂボールやバレーそして、新体操の
よつな女っぽいのが強く、バスケ部は弱いらし

チラリと裕奈を見る

「?」

「バスケ部は弱いらし」

「ほつとナ———。」

「なるほど、スポーツをがんばっている女子生徒といつのはいいですね~」

そりゃ そりゃ そりゃ そりゃ そりゃ そりゃ そりゃ

「兄さん・・・」

「何か先生、発言がオヤジっぽい」

エリカさんは呆れ風香と史加は顔を赤らめ含み笑いをしている

「じゃあ、ネギ先生のじ期待の更衣室探検…いつとく?」

風香更衣室のドアを少し空けるとそこからまき絵が顔を出す

「な、なんでそーなるんですかー!」

ネギは顔を真っ赤にしながら叫ぶが、

「ネギ先生! 何事も経験は必要だ! だからこゝには更衣室探検を「
佑太?」」・・・しないで次のところに行こうか」

エリカさんと裕奈の殺意の籠つた視線に耐えられず先を急がせる・
・・ちくしょう!

次にやって来たのは室内プール

こゝでは水泳部が活動していた

そこにはもちろんアキラもいる

「アキラ~」

「い、こんにちは

「ちへす」

「ネギ先生、エリカ先生、佑太」

俺達の訪問により部活は一時中断しネギの周りに集まり雑談している

ネギは赤くなり田のやり場に困っていた

俺はそれを少し遠目に見ている

いや～、女子生徒の水着姿はいいなあ～・・・・・けど

「あのエリカさん？」

「何ですか？」

「なぜ、俺の背中に杖を突きつけているんですか？」

「そんなの決まってるじゃないですか　変質者から生徒を守っています」

俺は変質者扱いですか

つか、水泳部の人たちも何人か恥ずかしそうにこっちをチラチラ
見ている

彼女たちにも変質者だと思われているんだろうか・・・凹むぜ

時折、カツコイイなどと聞こえる

モテモテだなネギ先生！

次は、屋外の体育クラブのホールへと向かつた

そこではチア部が練習しており、クラスメイトの椎名、釣宮、柿崎
がいた

「あ、ネギ君。何しに来たの一見学？」

「…………のぞきまー..」

「いいよー、のぞいてきなー」

ついにはネギは黙つてしまい鳴滝姉妹はまたもや含み笑いをしていく

やつぱりまだまだガキだな

「セーベリーベリーフ似合つてゐるでしょ」

ネギを眺めていたら柿崎が声を掛けってきた

「？普通に似合つてると思つがそれがどうかしたか？」

「…………そ、そう……」

それだけ言つと柿崎は一歩散でその場から離れてしまった

遠くで普通にとか鈍感とか言つてゐる

・・・・俺、なんか変な事言つたかな?

結局、今日一日で部活を紹介しきれないといつ事なのでお茶をする事にした

鳴滝姉妹とエリカさんは幸せそつた顔でテガートを食べている

それを見ながらネギはクラス名簿に書き込みをしている

これを見る限りまだまだ色氣より食氣だな

ちなみに、最年長といつ事で俺が全て払いました・・・なんで?

そして最後はこの学園の象徴ともいえる世界樹へとやつて来た

みんなで登ひ登ひと叫びしているが

「片手でじつ登れとこりんだ?」

「え?かえで姉はピローンで飛ぶけど?」

「佑太できないの~」

「いや、普通できないかんな」

一応、できる事は出来るけど

あこいつ、忍びつての隠す氣ないだろ

「いいから、四人で登つてきな

「わかつたです」

「いーー、ネギ先生！」

「は、はー」

そうして三人はスルスルと登つて行く・・・三人？

「エリカさんは行かないの？」

横には俺と一緒に二人を見つめるエリカさんがいる

「誰かさんが一人じゃ寂しいと思つて」

「そつか・・・」

少し見づらいやここからでも夕焼けは綺麗に見える

「あなたはこれからどうするの？」

これからといふのは原作に關して、だらう

正直、戦うのは嫌いだ痛いし・・・だから俺は

「俺は、基本原作には関わる気はないよ。基本は静觀してるよ」

正直言うと最近はほとんどと言つていいくほど原作が思いだせないのだ

「そう、君のエリカさんは？」

逆に聞き返す。俺は仮とはいえ彼女の従者だ。エリカさんの行動次第で俺の動き方も変わってくるだろ？

だけどエリカさんの答えは

「私は…………まだわからないわ」

何かを思っているのかはわからないが俺が見た彼女の顔はは涙を堪えてるよに見えた

だから……

「ゆつくつでないこと思ひ出すよ」

「え？」

自分の道を、後悔のない道を選ぶのは

「時間はあるんだゆつくつ考えていくばよこと思ひ出すよ」

「佑太…………ありがと」

沈む夕日の中でエリカさん唇が頬に触れたのだった

十六時間田「とある春休みの日々 セリ」（後書き）

今回はエリカさん中心のお話でした。そして、タヤさんからの情報でエリカ・スプリングフィールドという名前が別の小説であるようですが、名前を変えずこのままで行こうと思います。タヤさん情報ありがとうございました。さて、今後ですが後一つほど話を挟んだ後、新学期に進もうと思っています

十七時間目「それぞれの春休み」（前書き）

十七話目投稿します。

今回佑太の出番はありません。キャラがかなり壊れています。ご了承ください。

十七時間目「それぞれの春休み」

～明石裕奈の一日～

「1月11日までにしましょ~」

「うふ、 ありがとう茶々丸さん」

「あっがとう♪ わーこまわ」

三学期も無事終わり春休みに入った

去年までなら部活ばっかりだったけど今年は違つ

部活の他にアキラと一緒に修行をやつてこる

事の始まりは一月前の夜だつた。私達は、漫画やテレビで見るような魔法使いや魔物の類と遭遇してしまい、今までの日常の裏の世界をかいしま見てしまつた

そこを彼に助けられ、その世界の事を詳しく聞き選択を迫られた

この事を忘れて日常に戻るか、覚えているかだ

そして私達はある決意のもと、忘れずにこの世界に関わる事を決めた

ぶつちやけホレちゃつたんだけどね

ピンチの時に颯爽と表れて助けてくれる

そんな、お伽話みたいな状況じゃホレちゃつてもむりないでしょ

それはアキラも同じようだ

それに、私はまったく無関係って訳じゃないみたいだけどね

後でお父さんを問い合わせなくっちゃ

お父さんも好きだけど、なんか今まで感じてた好きと変わっちゃ
やたんだよね~

今でも父親として、家族としては大好きだ!

でも、彼に對しての好きは違ひがする

「いや、本格的に惚れたなあ~

その彼は変に鈍いけど・・・・うん、頑張ろっ!~

「調子の方はどうだ?」

「あ、エヴァちゃん」

「誰がエヴァちんだ!~!~」

彼女がこの別荘の持ち主のエヴァちゃん

なんか昔は悪い魔法使いつてことで有名だったみたいでけど、そん
なイメージは全然ないんだよね~

「マスターお怪我が・・・」

「ああ、たいしたことは無い、あいつに一発貰つただけだ。じき治る」

「もうですか」

「ん？それで佑太は？」

「ああ、奴ならあそこだ」

エヴァちゃんの指差す先には大きな氷の塊がつて

「ゆ、ゆうた――――！」

なんとその氷の中にはあの時私達を守ってくれた思い人の姿が

いつもはあんな感じだけど、こぞつて時は頼りになるからそのギャップにキュンときちゃうんだよにゃー

～大河内アキラの部活～

今日は部活の日

「大河内さん最近調子いいわね、タイムが少しづつだけど前より縮んでるわ」

「あ、ありがとうございます」

「一チに褒められたが少し複雑だ

「おじいちゃんアキラ」

「なんかいい事でもあったの？」

「ん、どうだろ？」

「あはは、なにそれ～」

部活の友達も口々にいろいろとこうが私自身少し罪悪感が・・・

実際、最近の私は部活で手を抜きながらやっている

理由は簡単、本気を出すと軽く世界記録とか出しちゃうから

「普通の日常には戻れないぞ」

あの時の言葉が最近になつて身にしみるよになつてきた

エヴァちゃんの別荘での修行とアーティファクトの特性のおかげか、私には水の流れや重さに敏感になつている

水を操る力それが私のアーティファクトの特性。そして、体術の修

行もそれに合わせて流れに合わせるような感じでやっている

裕奈も裕奈で最近部活では動きを制限しているらしい

でもこのままじゃ、私達はいずれ部活をやめる事になるかもしれない

エヴァちゃんが私達に求めてるのそういうレベルだ

エヴァちゃん相手に自分の身を守れるレベルとなるとそれくらいだ
そうだ

それを聞き、ほんの少しだけ後悔した私は泳ぐのが好きだから

だけど、それ以上にそれほどの人たちに狙われるだろう佑太君が心配だった

彼の事が好きだから

ほっとけないから

それにはちらの世界に残り、彼と仮契約を交わした時に決めたから

彼を支えると

今はまだ無理だと思うけどいつかは彼の隣に立つて彼を守れるようになりたいから・・・・・いや、なるんだから

「大河内もう一本行こうつか！」

「はい！」

だから今は頑張り、強くなるために

楽しもう、この日常を

（那波千鶴の想い）

最近の私は少し変だ

自覚もあるし原因も解っている

原因はあの日の出来事だ

彼、佐倉佑太君が転校してきた翌日の出来事

突然天文部の部室に来た彼に、何を考えたのか私は迫り、押し倒し、
そして……

「／＼／＼……」

そつと唇に手を当てる

「キス……しちやつたんだ……」

「? なにしたのちづ姉?」

「……」

いきなり後ろから聞こえた声に驚いてしまつ

「どうしたのちづ姉？なんか変だよ」

「なんでもないわよ夏美」

いつものように頬笑みながら夏美に答える

今日は夏美と二人麻帆良外に買い物に来ている

あやかも誘つたんだけど

「今日はネギ先生と……」

といつもの「」とくあやかの病気がはじまつたので置いてきた

夏美と二人色々と見て回つてはいる

「あれ？あれつて佐倉君？」

夏美の指差す先にはベンチに一人腰かけボーッとしている彼がいた

・・・・・ そうだ

「夏美、あなた佑太に声を掛けてきなさい」

「ええ！なんで～」

「いいから行きなさい。私もすぐに行くから」

そして夏美を彼の元に行かせ私は彼の背後に回り隠しをする

この時自分の胸を押しつけるのも忘れない

結果は思った通り。大河内さんとゆーながヤキモチを焼くといつおまけ付き

そして少し話した後彼らとは別れた

待ちの中に消えていく彼女達を見ていいなと思つてしまつ

もし、彼の横にいるのが私だったら・・・・とやれと考えてしまつ

夏美の声で意識を戻し一人で帰り道を行く

今日、彼と話してみてわかつた

彼は、私があの時のこと忘れていると思つていて

最近、彼をよく見ているせいだろうか彼の人となりが少しあはわかつてきた

普段はどこか抜けていてボーッとしていてマイペース

だけど、一度だけ見たことのある彼の真剣な表情

決意の籠った瞳

頼りたくなるような背中

その一つ一つにドキドキしたのを覚えている

その時初めて自分の気持ちに気づいた

彼が好きなのだと

一度気づいてしまったら、もう止まらない

彼のそばにいたい

彼に甘えたい

彼に甘えられたい

なんだかこれでは自分が恋する乙女のようだ

恋をしているのは直覚してくるナビ

「私、こんなキャラじゃ無いはずなんだけどな」

私をこんなにしたんだから

「責任を取つて貰わなくつちや

（柿崎美砂の心情）

「私って魅力ないのかな～」

「どうしたの美砂？」

今、私は円と桜子と三人でお茶してる

「いや、この前佐倉達がチア部にきたじゃん」

「あ～ネギ君達と一緒に見学に来てたね」

「その時佐倉に迫つてみたんだけど普通に返された」

テーブルに突つ伏す

それなりに自分の姿には自信があつたのだが

ナンパしてきた男達は男に取られ

佐倉には子供扱いされ

その佐倉に迫つてみると素で返され逆に自分が照れてしまつ

「自信無くしそう」

「まあ～まあ～」

「佐倉君と言えばアキラとゆーながいつも一緒にね」

「那波さんともよく話している」

私との三人との違い・・・・

三人とも美人だけど私もそれなりにイケてるほうだ・・・・と思つ

スタイルは・・・・

那波さん・・・明らかに叶わないというかあの人と同じ年とは思えない

ゆーな・・・最近また成長していくようで負けてる気がする

アキラ・・・身長にあつた感じのスタイルで羨ましい

私・・・悪くは無いと思うが特別にいいといつわけでもない

結論・・・・

「やつぱり胸か・・・胸のか~~~!!」

なんかせりて凹む

「でも、エリカちゃんやエヴァちゃんとも中がいいよね

いや、エリカちゃんは年相応だが、エヴァちゃんは那波さんと逆の意味で同じ年とは思えないんですけど

でもそりなると佐倉つて口コロソン?

それはそれでなんか嫌ね

「てか、最近の美砂はそろばつかだね」

「うん、最近暇さえあればバービーすれば佐倉くんを誘惑できるかばっかじやない?」

言われてみればそりね

「やつこつのは彼氏にやつなつて。なんで佐倉くんにこだわるの?..

「だつて、なんか悔しいじゃない」

「なにが?」

「なにがつて・・・あれ?」

なにがそんなに悔しいんだやつ?..

ガキ扱いされたから?

迫つたのこいつ返されたから?

どれもしつくりこない

「なに、美砂つてば彼氏がいるのに浮気?..」

「そ、そんなんじゃないって」

そうだよ！私には一応彼氏がいるんだから

…………あれ？一応

「まさか、彼氏持ちなのに惚れたか」

「なつー！そ、そんなわけないじゃん！」

「そうだよー私はただ自分の魅力をあの鈍さんにわからせてやりたいだけなんだから

あー！そっか私は佐倉を見返してやりたいんだそれだけだ

決して惚れてるとか気にならるとかそんなんじゃないんだからね！

さて、次はどう迫つてやる？

（→Hヴァンジエリンの楽しみ）

私が氷漬けにしてやつた男の元に駆け寄る一人の女

「茶々丸、何分かかるとおもう？」

「おお～りへ～～4分ぐらこかと。明石さん次第です」

「それほどまでに成長したか」

茶々丸の言葉に笑みが浮かぶのがわかる

「はい、大河内さん、明石さん共にかなりの速度で成長しています」

「やうか、あいつとは大違いだな」

やうこつてあいつらの主である奴と比べてしまつ

「？佐倉さんはダメなんですか？」

「ああ、あいつに才能は無いよ」

数か月に及ぶ鍛錬であいつはほとんどの成長しなかつた

組み手をすればするほど動きはよくなる攻撃は鋭くなるし守りも固くなつてくる

おわりく今なら3対1でやつてもいい勝負ができるだらつ

ただし、それは成長では無い組み手を重ねる事で本来積み重ねてきたが動き戻つてきているだけだ

奴は魔法の才能が無い魔力はあるモノのタカミチと同じく呪文詠唱ができない

だから私は呪文詠唱の必要無い感卦法を奴に教えた元々氣を使えるあいつはとも簡単に感卦法を習得した

これには私も驚き僅かながらも才能があると思ったのだが感卦法と奴のアーティファクトは相性が悪く一回の力の倍増で感卦法の制御が崩れ消えてしまう

そんなことなら最初から使わない方がいいだろう

そして、こいつの何よりの欠点はスロースターターなのだ

本人いわく臆病だから逃げ脚には自信があるらしくこいつは大抵の相手なら逃げ切るか時間を稼ぐくらいはできる

こいつのその戦闘スタイルとアーティファクトの相性はいい

いや、もしかしたら本能的な部分でこいつはアーティファクトに合わせた戦闘スタイルを取っているのかもしれない

それに、いざとなつたら戦闘ように切り替えると言っているがそれでは遅い

もし、この先一撃必殺のすべを持つ相手と相対した時、勝負は一瞬で着くだろう

それでは私の気が済まない少しどはいえこの私が師事したのだ。簡単に死なれては困る

それに、あいつの考え方は私に近い

無駄に戦いたくないなどいってはいるが、いざとなつたら奴は完膚なきまでに己の敵を打ち碎くだろう

おそれらくそこに正義は無く他者よりも自分の仲間を守る、見知らぬ9を捨て知りつる1を救うタイプだ

だから、私はあいつがどう成長するのかが楽しみだそしてあいつの従者がどう変わっていくかが楽しみだ

「おっ！意外に早いな」

「はい、2分16秒です」

本当に楽しみだよ

失望させないでくれよ、佐倉佑太

十七時間目「それぞれの春休み」（後書き）

十七時間目です。今回はそれぞれの春休み中の心情を書かせてもらいましたが、キャラが壊れまくっています。特に千鶴さんは結構壊れた感がありますが私の小説ではこれで行きます。そしてアキラや裕奈の部活についての様子は私の想像で書きました。美砂は何気に彼氏と佑太との間で揺れ動いたり、エヴァは才能の無い佑太に楽しみを覚えたりなど結構話がぶつ飛んでます。そんな内容を書かせていただきました。

十八時間目「初めてのお見合い?」（前書き）

久しぶりの更新です

十八時間目「初めてのお見合い?」

ネギ side

いよいよ明日から新学期です！

この間の課題をこなした事で僕とエリカは正式に麻帆良学園の教員として採用されました。

ようやく先生に慣れたし、明日からの新学期がとても楽しみです
「お待たせネギ君。目玉焼きー、イギリス風ブレックファーストや
えー」

このかさんガ朝食を作つてくれたので「これから」飯です

「うふーおいしいですー！」のかさん

「やーうれしーわーネギ君」

このかさんガ料理はとてもおいしいので大好きです

「いっふえひまーふ」

アスナさんは今日もアルバイトがあるよつてすぐ食べて出かけてしまいます

「本当におこしこですー！」のかさん、素敵なお嫁さんになれますね

「 もう、ネギ君てば」

「のかさんは顔を赤くしながらトーンカチで突っ込んできます
何時も思つたですがこの突っ込みは少しハードだと思ひます
朝食の後、洗濯や掃除をするところでの居候としては手伝ひべきだ
と思い手伝います

このかさんはお料理は上手だし掃除に洗濯までこなし、なにより優
しくつていいな~と思ひます

怪力でガサツなアスナさんは大違ひです

「 ただいまーーちょっとネギネギ」

「うわあー、メンナサイ」

アスナさんが急に帰つて来た事に驚き考へた事がばれたかと思ひ
反射的に謝つてしましました

「 何あわててんのよ」

「 ど、どうかしたんですか?」

アスナさんは手に持つていた手紙を僕の方に向け小さな声で

「(ボソッ) イギリスからのエーメールに魔法学校つて書いてあ
るじゃないバレたらどうすんのよ。不用心ねえ~」

「（ボソッ）あ、本當だ」

手紙はお姉ちゃんからでした

内容は正式に先生になれた事のお祝いの言葉と氣を抜かず頑張れ
とのこと

そして、パートナーについてだった

僕にはまだ早いと思いますが、アスナさんはが聞いてきたので魔法
使いのパートナー、魔法使いの従者ミーティストル・マギについての事を話しました

結局、アスナさんには恋人探しに来たとしかにんしきされませんでした

間違つては無いんですけどね

「へーネギ君、実は恋人探しに日本に来たん? じゃあウチのクラス
の女の子だけでも30人やからよりどりみどりやな」

「わあーーーこのかわん!」

「木乃香…。」ついつから聞いて・・・

突然のこと驚きアスナさんと一緒に後ずさりしてしまいました

「途中からやけど?・・・みんな~ネギくん恋人探しに日本に來
たらしいえー」

「ち、違います本当に先生になるためですよ~」

「このかさんそんな大声で言わないで～～

「スマンスマン、冗談やネギ君。アスナ、おじこちやんが呼んでる
から行つてくるなあ～」

「え～またあの話?」

「やうや～」

あの話?

「それにしては今回は嬉しそうね」

「え～そんなんぢやうつへ～ほなな～」

そう言つてこのかさんは行つてしましました

それにしてもバレたかと思ひドキドキしました

side out

十八時間田 「初めてのお見合い?」「

「で、何の用ですかクソ爺（学園長）？」

「本音と建前が逆になつたるべ。まあよい、少し君に頼みたい事が
あつての」

俺はジジイに呼ばれ学園長室にやつて来た・・・つか、なんで教
えてないのに数日前に買った俺の携帯に連絡が来るんだ？

「まずはこれに着替えてくれんかの？」

渡されたのは黒のスーツ

「あなたの葬式に着ていいくためのか？」

「ワシ、いい加減泣くよ、泣いてもいいよね

「キモいからやめてくれ。いいからいい加減話を進めてくれ

「話を逸らしたのは君だったような気がしたのじゃが・・・まあ
よい、ただの顔合わせのようなものじやよ」

「顔合わせ？」

魔法先生と魔法生徒達とか？

「なら、別にスースーじゃなくて制服とかでもよくね？」

「特別な相手なんじやよ。場所も料亭でな顔合わせついでに一緒に

食事もあるのでそれなりの格好でないと、

ああ、そういう事……ん？ 待てよ

「おこじジジイ、一つ聞きたい事がある」

「? ……なつなんじや」

まさかとは思つが

「それって…………お！」つか？」

「ふおー!？」

「だから、その食事はタダで吃えるのかと聞いているんだー。」

そんな高嶺の店の支払いなんぞできません

「も、勿論ワシが場を用意したんじやから料金の方はワシ持ちじゃ
よ」

「な、う、う、すぐ着替えてくる」

急いで園服を出て着替えてくる

「バレたかと思つたぞい（ボソッ）」

その言葉は俺の耳には届かなかつた

「…………」

「 一一一 」

料亭の案内された一室には着物を着た綺麗な子・・・・まあ、この
かなんだが

「 やへ、綺麗やなんてウチ照れてしまつわ～」

「 声に出してたか？」

「うそ」

「まあ、実際に綺麗だし見とれてたからな」

「――――――

「ん? え? へ? た?」

「（ボンヤ）そなへあいつ言われたら反応に困るやん―――」

「なんだつて?」

なんか恥じてるみたいだけビートル聞けん

「なんでもあらへんよ」

「やつが」

「ワシ、忘れられてる?」

そういう学園長もいたな

「まあよい。後は一人で好きにせい。なんなら今日は帰らん」「な
ゆうてんねん、おじいちゃん」も、つ

爆弾発言しうとした学園長にしてのこのかのトンカチの突っ込みが入る

いい氣味だ

頭にできたたんじぶを抑えながら部屋を出てへ学園長と入れ替わり
に料理が運ばれてくる

それをこのかと向かい合つて雑談しながら料理を食べる

しかし、顔合わせの相手が学園長の孫のこのかだったとは……

あれ、このかが魔法の事知るのって修学旅行じゃなかつたつけ?

なら、この時期はまだ魔法の事は知らないはず……

それに、この状況つて……

「なんか、お見合いみたいだな」

「ん? なにゆうてん佐倉君?」

俺の呴きが聞こえたよつだ

「みたいやのつて、お見合ことやのモノやよ」

「…………は？」

「のトは今、なんて言つた？」

「せやから、今日はウチと佐倉君のお見合ことやで むじこちやんか
ら聞いてへんの？」

「…………あのジジイ～」

今に見てろよ。クツクツクツクツクツ・・・

「な、なんや笑顔が黒いで」

おつと

「氣にするな。まあ、せつかくだお見合ことつモノを楽しむか

「やうやね」

そのまま、一人で料亭の味を楽しんだ・・・「うまかつた～～

「喰いすぎたかな」

「佐倉君めつちや食べてたからな～」

さすがにちよつと喰いすぎたかな

「腹（はら）」なしにその辺歩くか

「わづやね

席から立ち上がり

「このか

このかに向け手を差し出す

「え？」

「」「いつ時は男がエスコートするもんだろ。それに……」

「それこっ？」

「一応はお見合いなんだからお互（たが）い名字じゃなくて名前で呼び合つ方がいいだろ」

「あ・・・うん／＼／＼

頬を赤く染めながら俺の差し出した手をしっかりと握り返してくる

そのまま一人で手をつないだまま外へ歩いて行く

いや、なんか手を繋いだはいいけど離すタイミングがなかったからそのまま繋いでいた

いつもして、春休み最終日をのんびりと過ごした

そのまま終わればよかつたの」元のまま問屋がおひそなかつた

「さて、弁解を聞いづか……あくまで聞くだけだが

「ナツだね、一応理由だけは聞きたいな」

「わやわやと呴こいた方が楽だと思ひよ～

「ふふふふふふふふふふふふ・・・・・

ど」で知ったのか俺がこのかと見合こをした事をエヴァ達が知り夜、
俺の部屋に押し掛けてきた

とこつか、那波さん？何故あなたまでいるんですか？

「　　「　　「あ、○ H A N A S H I じよつ　　」「　　」

・・・・・・助けてくださいー（セカチュウ風）

「ああ、マスターがあんなに楽しそう・・・・・・・

今日のお見合いはうまくいったの〜珍しくこのが乗り気じゃったしやはり、年が近い方が良いのかもしれんの〜

今のところ候補としてはネギ君と佐倉君の一人じゃな

ネギ君は言わずと知れたサウザンドマスターの息子じゃし佐倉君もあやつの孫じや

それに一人ともなかなか見どこりもあるしの

「あの、学園長先ほどこれが・・・」

「むつ、すまんのしづな先生」

これは、今日の料亭の請求書かどれどれ・・・なつ〜

「なつ、なんじやー」の請求額はー..」

いつもの額の倍、いや3倍は言つてゐるぞい

「ビ、ビツコハビトジヤ?」

請求書と一緒に入っていた金額の割り振りを見ると・・・

「あ、あ奴はどんだけ食べたんじゃ・・・」

追加という名前のようにフグやら伊勢海老やら高級食材のオムパレードの料理の名前と金額が記されていた

「・・・ネギ君に行つてもうべきじやつたかの?」

「うそでやかな仕返しは終わつていた

「いや、これ、全然わざやかじやないからのー。」

side out

木乃香 side

「 ～～～」

「今日は『機嫌ね』のか」

「ん~、そ~か~」

「それだけ顔がニヤケてればわかるわよ。はあ~こつちは一日大変
だつたつてのに」

アスナがため息をつきながらテーブルに突っ伏す

「「」「」」ねえなあこアスナわざ」

ネギ君も申し訳なあといふこと

なんや、今日はネギ君やヒリカちゃんが小国のお王女とお姫様なんて
噂が流れたみたいで一曰中追いかけてみたいや

アスナはなんやかんやめいでも心配でネギ君と一緒にいた見たいやつ

相変わらうか一人とも仲ええなあ～姉弟みたいや

ウチにひとつもネギ君が来てからは弟が出来たみたいで嬉しこんなやつ

それに、佑太君が来てからはお兄ちゃんができる見たいやと思つて
つたけど、なんやちよつ違う感じが
するんやよね

お兄ちゃんでもないのにこひない仮になれるやつはいいとせやつぱつ・・・

「――――――」

「へ.ゞうしたのこのが?」

「へ.」

「顔、赤いわよ」

「なんでもあらへんよ」

「～～～ウチは何を考えているんや～

「ナハ、なりいいけど」

明日から新学期やしちゃう少し積極的に話しかけてみてもええかな?

side out

十八時間目「初めてのお見合い?」（後書き）

いつも、H.C.です。7月8月はほとんど投稿できなくて私めの小説を楽しみにしていてくださつた方がいたら申し訳ありませんでした。9月からは以前よりは更新ペースが落ちるかもしれません徐々に戻して生きたいと思っています。

今回でようやく春休み編が終りました。次回からはいよいよエヴァ編です。主人公の立ち位置どうしよう・・・ではまた次回

人物紹介（前書き）

一段落しましたのでここでおリキキャラの設定を紹介しようと思います。

人物紹介

主人公 佐倉 佑太

佐倉愛衣の一つ年上の兄。魔法の才能がなく魔法学校にはいかなかつた。普通の生徒として生きていたがある日であった老人に（強制的に）連れられ、武術の修行を付けられ数年後麻帆良に連れてこられた。目を合わせた相手に一分間の幻影を見せる事ができる邪眼を持つている。

アーティファクト『赤龍帝の籠手』

始動キー：なし

得意魔法：なし

能力：赤龍帝の籠手、邪眼

仮契約者 エリカ・スプリングフィールド

明石 裕奈

大河内 アキラ

オリキャラ

エリカ・スプリングフィールド

佑太と同じく転生者。ネギの双子の妹。容姿は、顔や髪の色はネギそっくりだが髪が腰ほどもあるロングヘア。原作90時間目のネギの狐娘のようなイメージ。実は、転生前の世界では佑太の大学の

先輩。

始動キーボード：不明

得意魔法：不明

能力：不明

仮契約者 佐倉 佑太

今のところはこのようないい感じです。今後の更新で不明の部分を明らかにしていくつもりです。

人物紹介（後書き）

次回からいよいよ新学期・エヴァ編を始めようと思います

十九時間目「新学期と吸血鬼」（前書き）

新学期エヴァ編始まります

十九時間目「新学期と吸血鬼」

暗き闇の世界に一つの黒い影が走る

夜闇に浮かぶは満月

ハウツハウツハウツ

目の前には獲物足る少女が逃げ惑う

「ひつ！」

その少女はせまるる黒き影に驚き足を取られる

「あ・・・・・いや・・・・・

そしてその影は・・・

「いやああ～～～ん」

少女に襲いかかった

少女を襲つた黒い影が立ち上がりその傍らには少女が眠つていた

満月の光が黒い影を照らす

映し出されたのは少女の姿

(よひやべだ・・・・)

(よひやべ) の時がきた)

少女は夜空を見上げる

「 まぢは挨拶とこ」つか」

「 はじマスター」

傍らには縁の髪の少女の姿もある

(覚悟しておけよスプリングフィールドよ)

(長年あのバカにこにに閉じ込められた報いその身を持つて償つて
もいかない)

「 クツクツクツ・・・・ハツアハツハツハツハツハツハツ」

満月の夜空に少女のエヴァンジョンの笑い声が響いた

そして・・・・

「 いよいよ新学期・・・・・吸血鬼の襲来・・・・か

その姿を遠田から見つめる少年がいた

十九時間目「新学期と吸血鬼」

「「「三年！A組！」」

「「「ネギ先生——つ……」」

（バカどもが……） 長谷川千雨

（アホばっかです） 綾瀬夕映

相変わらずこのクラスの奴らテンションたけえ／＼なあ／＼

「えと……改めまして三年A組担任になりましたネギ・スプリングフィールドです」

「副担任のエリカ・スプリングフィールドです」

「「「これから来年の三月までの一年間よろしくお願ひします」」

「「「はい」」

「……」本当に中学校か？

「……エヴァ、そんなにネギを睨めつけんなって……」惚れたのか？」

「…………今日はいつも倍でいいのか？」

「すみませんでした」

「じょうがない四倍で勘弁してやるわ」

「いや、増えてないか？」

「ふんー。」

エヴァさん「機嫌ななめです

「で……なんでお前は俺の服を脱がそつとしてるんだ？風香
？」

「これから身体測定だからだよ」

「やうなのか？」

「ええ…………だから」

なんだ、この怒氣の籠った声は

声の聞こえた方を振り向くと

「やつれど玉山ハトセコネ（怒）」

ものつそこ笑顔で黒い霸氣を出してるヒリカさんでした

・・・・・わお

結局、教室から追い出されたので不貞寝しようと廊上に向かう

その途中

「およ？そんなに慌ててどうしたんだ亜子？」

廊下を懸命に走っている亜子を見つける

「あー佑太！」

ちなみに彼女、和泉亜子とはアキラ、裕奈との関係で比較的仲がいい

「それがまき絵がまき絵が！」

「落ち着け亜子！まき絵がどうしたって？」

「それが・・・」

場所は保健室、亜子から事情を聞いた俺はここの亜子はネギ達に知らせるために教室に向かった

保健室では亜子と同じく比較的仲の良い少女、佐々木まき絵が寝ていた

皿立つた外傷は無く桜通りで寝ているところを発見されたらしき

しかし、彼女からは少し魔力のような物を感じた

「まき絵さん」

亜子の知らせでネギと他のクラスメイト達がやつてきた

「佐倉さん」

「おうー・亜子から聞いたんだな

「佐倉さんも?」

「ああ、たまたま亜子と会つてな」

そして、ネギもまき絵の容体を確認し、俺と同じ結果に至つたらしき

結局その場はネギが貧血と判断しみんなを返した

さてと……

「俺も行くか」

「たいした演技だな」

昼休み、屋上に向かいその扉を開き目的地に着いたと同時に頭上から声がした

「どうじゅつもりだ」

「どうじゅつも無いわ、見ていたんだろ・・・・・・昨夜の事を」

「ああ」

あれは本当にたまたまだったんだがな

「しかし、クラスメイトが襲われる現場に居合わせながら見ているだけとは酷いやつだな」

「そのクラスメイトを襲ったクラスメイトは誰だ？・・・・エヴァ」

屋上のせりに上にある場に彼女はいた

見てるだけって・・・助けるにしても結構な距離あつたからどうにしろ間に合わなかつたし

「知らなかつたのか？私は悪い魔法使いだぞ」

「そうだつたな・・・・狙いはスプリングフィールドの一人か？」

「ああ」

「そして、その二人を試すために必要な魔力・・・いや、血を集めている」

「まつ・・・・・そこまでわかっているのか

わかつて”いる”といふか”知つてゐる”と言つた方が正しいか

「血が必要なら俺のを吸えよ」

「他に被害が及ばないよう自分自身の血を差し出すか・・・・やはりお前はおかしなやつだ」

赤の他人ならともかく一応はクラスメイトだからな

「それもいいが、今夜は貴様の手を少し借りたい」

「何をする気だ？」

「スプリングフィールドを誘き出すためある女を襲う。その後、その女を保護する」

「女、子供は手をださないんじゃ無かったのか？」

それがエヴァのポリシーだったハズだ

「殺しはしないさ。それと、あいつらは・・・・スプリングフィールドは別だが・・・・殺しはしないさ」

なるほど、こいつのポリシーは”殺さない”であつて”手を出さない”わけではないんだな

「・・・・・いいだろ？ 襲われた子を保護するだけだそれ以外は手は貸さない。それと・・・もし、お前がいきすぎた行動を取り

ば俺はお前を・・・

俺は、押さえている殺氣を少しだけ出し

「潰すからな」

エヴァを睨みつけるた

「・・・・いいだろ、貴様の境界線がどの程度か見せて貰うぞ」

エヴァ side

話が終わると奴はこの場を後にした

しかし・・・・『潰す』ときたか

あの時あいつの瞳

あれは決意を固めた者の目だ

久しぶりにゾクゾクしたな

やはりあいつは面白

これと言つて才能は無く、あるのは赤龍帝の力のみ

まあ、それも一種の才能と言えば才能なのだが

しかし、奴は時折とんでもない事をしでかす

だから、あいつは面白い

言葉通り見せて貰つぞ貴様の中の善惡の境目を・・・・

s i d e o u t

その日の夜

友人と別れた宮崎のどかは一人桜通りを歩いていた

「27番宮崎のどかか・・・・行くか」

「いってらっしゃい」

エヴァはそのまま宮崎の元へと向かい

俺はそこから少し離れたところにその様子を見ていた

エヴァが宮崎に襲いかかろうとした時、静止の声と共に杖で飛んできたネギが現れた

ネギはそのまま魔法の射手を放つが、エヴァはそれを魔法薬を使つ

た氷櫃で防いだ

ネギはその隙に富崎を抱きかかえる

しかし、ネギの魔法の余波までは防ぎきれずエヴァの帽子がそれへと舞いエヴァの顔がハツキリと見えた

それにより、ネギはエヴァがこの一見の犯人だとそして、自分のクラスの生徒に魔法使いがいた事に驚いていた

ネギがエヴァの行動の意味がわからず何故このような事をするのか問うが、エヴァの答えは・・・

「この世には、いい魔法使いと悪い魔法使いがいるんだよ、ネギ先生」

その言葉と

「氷結・武装解除」

魔法薬を用いた魔法だつた

その魔法をネギは片手を前に出し抵抗したが防ぎきれず前に出した腕の袖と抱きかかえていた富崎の服のほとんどが凍り砕けた

つまりは富崎は今、ほぼ裸だ！

すぐに駆け寄りたい衝動をどうにか抑え事の成り行きを見守る

ネギも富崎の姿に気づきアタフタしていると、そこニアスナとの

かがやつてきた

ネギと富崎の姿を見てアスナはまたかと思いながらネギを見る

このかは冗談か本気かわからんがネギを噂の吸血鬼かと誤解している

その様子を見ていたエヴァは巻きあがる砂煙に身を隠しながらその

その姿をとらえたネギは高崎をアスナとのかに任せエヴァの後を追う

アラナモネギが心配なのがこののはその場を任せてネギの巻を追うた

「ん～～～どな～いしょ～」

「どうかしたのか？」

偶然を装つてその場に近づく

「あ！佑太、助かつたわ！」

「あつ！み、見たらあか～～ん

顔を赤くし後ろを向く。もちろんしつかうと富崎の姿を網膜に焼き付けた後ですが

「と、とりあえずこれを見たるに富崎に着せろ」

着ていた上着を脱ぎ後ろにこるのかに渡す

「わかつたえ・・・・・・よし、もう大丈夫やよ

「そつか、とりあえず女子寮まで運ぶぞ」

振り返り富崎を浴に濡つお姫様だつこする

「（ボソッ）・・・・・ええなあ～

「行くぞ、このか」

聞こえないふりをして歩き始める

・・・・・あれ？」のまま女子寮に帰るとこの後の事見れないじやん

エヴァがやりすぎても止めらんない・・・・・・まつ、大丈夫
だろつ

そのまま富崎を抱えこのかと女子寮の方に帰った

余談だが、女子寮に着いた時、ちょうど玄関にいたエリカさんに富崎の姿を見られ、

「変態！信じたのにー。」

と言われ、涙目で平手打ちをいただきました

その後このかの説明で誤解と解り何とか涙を堪えてくれた

・・・・俺、何もしないのにorz

十九時間目「新学期と吸血鬼」（後書き）

今回、オリ主は基本傍観です。次回から少しづつ原作に介入させていくつもりです

「十時間田「俺の存在って何なのさ・・・」（前書き）

久しぶりの投稿です。ようやく一十話田です。

「十時間目」「俺の存在って何なのさ・・・・・」

「ふうん、茶々丸が魔法使いの従者リーステル・マギつてどこまでバラしたんだ」

「」の程度のことなら、あの坊やにバレてもたいした問題ではない・・・が

エヴァが富崎を襲つた翌日の昼休み、再び俺は屋上でエヴァと話していた

ついでに言つとエヴァは今日は学校には来ているが授業はサボりだ
そして、昨晩エヴァとやりあつたネギだが今朝教室でエヴァの姿がないことにホッとしていた

これは教師としてはどうなんだろう。

「神楽坂明日菜・・・・・

「ん? アスナがどうかしたのか?」

「蹴りを顔面にへじつた

「・・・・・・・・・・ふつ」

「・・・・・・・・・(怒)」

ドカツバキツボコツ・・・・・・・・・・じぱりくお待ちください

(一) 三

「あこつは私の魔法障壁をあつたつと破られた。それで紙のよつて
あつたつと・・・」

「それふあほうふふあひたのか?」

しゃべり辛いし鼻血が止まらん

「真祖の魔法障壁だぞーお前ならまだしも、ただの中学生のガキに
だ!」

「ふえ~」

俺の場合はベーステッヂ・ギアで2~3回倍増して普通にグーで砕
いた

「しかもあれは破られたといつよつも」

「”無効化”された・・・か?」

「ああ、やうだ。しかし、もう直ったのか?」

「その辺は気にすんなや

ギャグですか、

二十時間田「俺の存在って何なのぞ・・・」

「まあ、アスナだしな真祖のお前の魔法障壁を無効化したって不思議じゃないさ」

「へビリうごうことだ?」

「え? いやだつて、アスナは魔法無効化能力持つてるしマジックキャンセル」

「・・・・・・・

「・・・・・・・

あれ?

「もしかして・・・・・言つてなかつたか?」

「・・・・・ああ

あれ? これって言つたらまずかつたかな?

「ふふふふふふふふふ・・・・・

エヴァつたらそんなに素敵な笑顔を浮かべちゃつて~

「なぜそれを早く言わないとんでもないんだ~~~~~！」

「…………」

氷漬けにされた後のその日の記憶がないのでHロホロジンの登場イベントに立候えなかつた

まあ、別にいいけども

そしてその翌日

「ひいて、今回はHヴァ側に付くつもりだから」

「そうね、仮にもあなたは一応HヴァンジHリンクさんの弟子つてことになりますもんね」

Hリカさんと今回のことをついて話しあつてこた

「弟子つて言つか……オモチャ？」

「…………それ、自分で言つて悲しくない？」

「…………少し」

ほとんどが修行といひ名のイジメだけだね

「それにしても、エヴァンジエル・A・K・マクダウェルさんつたら……私のオモチャで遊ぶとはい度胸ね」

「いや、俺はあなたのオモチャになつた覚え！」「なんですか？ オモチャ 佑太？」
「え、なんでもないです（涙）」

あの、エリカさん？ 口調は丁寧んですけど……黒いものが体中から溢れていますって。その状態じゃ俺に拒否権なんて物はないな
「いいでしょ、どちらに佑太の所有権があるかハッキリさせる時 がきたようですね」

「いや、俺は物じや 〃 「なんですか佑太？」 物でいいですハイ

後日、エヴァにこの事を伝えると

「さうか、いいだろ？ エリカ・スプリングフィールド坊やがいれば 貴様など別にどうでもよかつたが佑太がかかつてているとなれば話は別だ！ 貴様を完膚なきまでに叩き潰してやるつ」

こうして、エヴァとエリカさんとの間で俺の所有権をかけた戦いが始まりうとしていた

俺の意思というものはないんですね

あれ、目から汗が……グスン

翌日

(ふうん、あのが、エロオロジヨのカモ何とかネギの助言者ねえ
なんか懐に隠れてるけど普通に見えてんんですけど)

そんなことを考えながら茶々丸の後を尾行?しているネギとアスナ
の姿を少しほなれたところから見ながら今朝のこと思い出す

・ · · · ·

「あれ? どこに行くんだエヴァ? もう授業始まるぞ!」

「フンッ! 何で私がボーヤの授業なんぞに出なければならんのだ?
当然サボりだ!」

腕を腰に当てて高らかと宣言するエヴァ

「んな堂々と宣言すんなよ·····(ボソ) んな貧相な胸張つて

ヒュウ!

「何が言ったか?」

首に断罪の剣^{エクスキューショナード}が突きつけられる

「イエ、ナンテモナイテス。ヒヴァサン」

「こんな堂々と魔法使つなよなあ～

「ちやんと認識阻害ぐらこしてる」

「そこですか」

心読まないでくださいって

「まあよい、それからネギ・スプリングフィールド、エリカスプリングフィールドに助言者がついたかも知れん。できるだけ私が茶々丸のそばにいる」

「助言者?」

「そうだ・・・・・オコジョだが」

・・・・・

(ん~今どこの普通に原作通りに進んでる。カモとネギが会いネギとアスナが仮契約をし仮のパートナーとなり、茶々丸を襲うために後をつけているつと)

茶々丸は一人で歩きながら風船が木に引っかかり泣いてる女の子の風船をとつてあげたり

階段を辛そうに上っているおばあさんをおぶつてあげたり

川に流されているダンボールに入ってる子猫を助けたり

野良猫に餌を上げたり・・・まあ、これは俺と交互に行っていたが

・・・・茶々丸って普通の人間より人間らしいよね

そして原作通り人目がなくなつたところでネギたちが襲い掛かつた
さすがの茶々丸も2対1では厳しい・・・いや、アスナの動きが思
つた以上によかつたのか、アスナの動きに不意をつかれネギの呪文
の詠唱を許してしまう

11のネギの魔法の射手が茶々丸向かいに放たれる

「ちつ！あのバカ！」

それを見ていや、ネギの表情を見て舌打ちをし駆け出す

原作通りなら茶々丸が避ける事を諦めたときの言葉でネギが魔法を
逸らそうとするが、あの目は

（あの目は完全にヤル気だ！クソッ！間に合つか！）

「よけきれません。すみませんマスター・・・佑太さん、もし私
が動かなくなつたら猫の餌を・・・」

（バカたれが！諦めんじゃ・・・）

「諦めてんじゃねえ~~~~~！」

ネギ side

「こじだためらつたらだめだ！」

アスナさんが茶々丸さんを引きつけてくれているうちに呪文を詠唱する

「光の精霊11柱…」

「こじだためらつたら今度はエリカが

思い浮かぶのは双子の妹、こじで僕が茶々丸さんを倒せばエリカに被害が行かなくなる

「集い来りて…」

だから僕は…

「魔法の射手 連弾・光の11矢！…」

手加減はしない！！

茶々丸さんに向かっていく魔法の矢

これでいいんだこれで・・・

「諦めてんじゃねえ〜〜〜〜！」

「え？」

魔法の矢が茶々丸さんに当たつた音に隠れて男の人の声が聞こえた
気がした

土煙が舞い僕からは茶々丸さんの姿は見えない

あの声には聞き覚えがあった

「ちょっと、ネギ！今の声って」

アスナさんが青い顔をして僕の方へと駆け寄つて来る

「やつたぜ！兄貴！」

カモ君が僕の頭の上で騒いでいるけど

二人の言葉が耳に入らない

あの声は空耳だ！あの人があこにいるわけがない

そうだ気のせいだ！彼がここにいるわけないじゃないか

徐々に土煙が薄っていく

「うすうす、と見えてきたのは黒い影が一つ

一つは呆然とその場に立ち尽くす茶々丸さん。そして、もう一つは・
・・・

「あ、あああ」

地面に横たわって・・・

「う、嘘よ・・・・・」

地面を真っ赤に染めている・・・

「佑太・・・さん・・・・・」

大量の血を流しぐつたりとしている、佐倉さんだった

side out

「十時間田」俺の存在って何なのさ・・・（後書き）

いやー、遅くなつましたがよしやく書き上げられました。そして、神威さん誤字脱字の報告ありがとうございました。今回の投稿時に修正いたしました。句読点の方は暇を見て直していきたいと思っています。そして、質問にあつた邪眼についてですが、これは後のストーリーで明らかにしていくつもりですのでその時にということです。他にも、ご意見ご感想をお待ちしております。

一一一 時間目「赤い夕暮れ」（前書き）

久しぶりの投稿です。ちょっと短いです。

一一一 時間目「赤い夕暮れ」

明日菜 side

赤く・・・

赤く・・・

地面が赤く染まつていく

時間は夕暮れ

夕日の色で地面が赤く染まつている・・・

違う・・・

あれは夕日の色じゃない・・・

”あの時”と同じ・・・

”あの時”と同じ色・・・

”あの時”と同じ匂い・・・

”の人”の服にこびりついていた・・・

”の人”の最後に見た姿に・・・

”あの人”の服を染めていた・・・

”血”・・・

そしてその血に染まっているのは”あの人”ではなく”ガトースン”

いつも寝てばかりで・・・

いつもしまりのない顔をしていて・・・

時折、まじめな顔もしてるけど・・・

たま～に優しい笑みを浮かべている・・・

「ゆう・・・た・・・」

佐倉佑太の姿だった・・・

side out

二十一時間目「赤い夕暮れ」

いつたい何が起きたのでしょうか

ネギ先生の魔法は確かに、私に向けられ撃たれたはず

そして、私は後ろにいた、猫たちが傷つかないよう

ネギ先生の魔法を避けず、その身に浴びよつとした

我なら、壊れても修理できるから・・・

マスターには、さびしい思いをさせてしまつかもしれない

あの人は優しく寂しがりやだから・・・

でも、今は大丈夫でしょう。佑太さんがいる

大河内さんや明石さんもいる

の人たちがいれば、マスターは大丈夫だ

だから、私が壊れても大丈夫だ

そのはずだつた・・・そのはずだつたのに・・・

目の前で起きている、この状況は何なのだろう

真っ青な顔をしているネギ先生

大声をあげながら、一いち方に走つてくる神楽坂さん

私は・・・

破損箇所・・・なし

正常稼動・・・確認

無傷?

そして目の前に横たわる人

認証開始・・・検索結果・・・該当あり

該当者・・・

「佑太・・・さん?」

そこに倒れているのは、佐倉佑太さんだ

何で、こんなところで寝てているんですか?

こんなところで寝ていては、風邪を引いてしまいますよ

佐倉佑太・・・負傷

状態・・・呼吸無し、出血多量

結果・・・重傷、生存確率0%

…どうして、こんな結果が出てくるのでしょうか？

佑太さんは寝てるだけですよ?

エラー エラー エラー エラー エラー エラー エラー エラー エラー エラー

何度もやつても、同じ結果が出てくる

私が無理やりテークを書き換えるよりもHマーク繰り返し出で
くる

『違う』

おかしい、何故、私はこの結果を変えようとしているのだろうか？

《遼》

やはり、私は先ほどのダメージで壊れてしまつたらしい

卷二

早急に葉加瀬に修理してもらわなければ…

『違う』

早く葉加瀬のところに行かなくては……

《違う！》

何が違うのだろう

『これは現実!』

現・・・実・・?

『私を庇つて・・・』

この状況が現実?

『彼は・・・』

佑太さんが、私を庇つて、倒れていることが

『佐倉佑太は・・・』

血を流し倒れている彼が・・・

『死亡・・・』

「佑太・・・さん」

私は足元に横たわっている彼を抱き上げた

s i d e o u t

ネギ side

わからない

いつたいどうなったのだろう？

僕の放つた魔法は確かに茶々丸さんに当たったハズだ

なのに茶々丸さんは呆然と立っている

どうしてたっているのだろう？

魔法は確かに当たったんだ！

そうか障壁だ！魔法障壁で防いだのか！

でも、茶々丸さんはロボットだって言つてたから、魔法は使えない
はず

じゃあ、何で無傷なんだ？

僕はその時、意図的に茶々丸の足元を見ないようにしていた

信じたくない

自分がした事を、認めたくないって

僕が魔法で一般人を・・・

自分の生徒を傷つけてしまったことを、信じたくないって

だけど・・・

何度も見直しても

何度も考へても

目の前の光景は変わらず

横たわる佐倉さんから止まることなく赤い血が流れ

漂つてくるのは、鉄っぽい血のにおい

「あ・・・・・ああ・・・・

やつぱり・・・・

「ア、アニキ」

間違いないんだ・・・

「あああ・・・・

「アニキ! しつかりしてくだせえ!」

これは、僕がやったんだ・・・

僕が・・・僕の魔法が!

彼を・・・佐倉さんを・・・

殺してしまったのだ
・
・
・

頭を抱えて、その場につづくまる

なんで！どうして！

佐倉さんを傷つけるつもりなんてなかつた

たのに！たのに！

僕は

「ジャスト一分だ」

「え？」

僕が殺してしまった人の声と共に

ピシッ!

目の前の光景にひびが入り

バリイイイイイイイン!!

ガラスのように砕けた

そしてその先には、茶々丸さんともう一人

「よう、ネギ先生」

僕が殺してしまつたばずの

「悪夢は見れたかよ。」

佐倉さんが平然と立っていた

sideout

一一一 時間目「赤い夕暮れ」（後書き）

正直、今回のオチは、大半の人が予想できただと思う。前回のあとがきで邪眼に関して触れちゃつてたからな。次回はセツキヨウの時間です！できるだけ早く書き上げるようにしたいと思っています。ご意見、ご感想、誤字脱字などありましたら、お待ちしています。

一一一|時聞田「やつあわでや」（前書き）

遅くなりましたが投稿します。今回は難産だした。独自解釈やアンチ気味ですので少し読みにくいかも知れません

一一一時間田「やつすせいでか」

ネギ side

世界にひびが入り碎ける

認めたくない

とんでもない」とをしてしまった

そんな、世界が粉々に崩れしていく

田の前には元気な彼の姿が

ああ、よかつた

あれは夢だったんだ

僕は何もしていない

何も起きなかつたんだ・・・・・

一一一時間田「やつすせいでか」

「いつまで呆けているつもりだ？」

「え？」

その声は、とても冷たく

「ゆ、佑太？ ぶ、無事なの？」

「ああ、だから・・・・・構えろよ、ネギ・スプリングフィールド、
神楽坂明日菜」

とても、怖かつた

「か、構えろって・・・・・あんた何言つて・・・」

次の瞬間、佑太さんの姿が消え、風が吹く・・・

「次は・・・」

次に聞こえた声は背後からで・・・・

「・・・・・当てるぞ」

「え？」

その手には僕のメガネと

「な、何が…・・」

アスナさんの制服のリボンが握られていた

二
怖い

ああああああああああああああああああ！ ラス・テル・マ・スキル

無意識で訪唱を始め

魔法の射手!!連弾・光の37矢!!

再び彼に魔法の射手を撃つ

—そひた 来し

佑太さんは、そう咳いたと思うと、僕の魔法を簡単に交わしながら近づいてくる

「ちよ、ネギ！佑太も！いい加減に」

怖い・怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い

「ああ、雷精、風の精！雷を纏いて吹きすぎ、南洋の嵐！」

今の僕の最大呪文！これなら佑太さんだって

いかず・・・それは、少し危険だな」つ！「

いつの間にか佑太さんは目の前に迫っていた

「え？」

次の瞬間、僕の体は浮遊感に包まれ

「あぐっー！」

背中から地面に叩きつけられた

「ネギ！ 佑太・・・なんで・・・」

なんで・・・僕は佑太さんと戦ってるんだろう

「何でか・・・か」

ネギ side out

佑太 side

「何でか・・・か」

「いいつらはわかっていないんだろうな

「逆に聞こへ、お前らこそ、何やつてんだ

「え？」

「何をやつてんだ、と聞いてるんだ」

「やー」「

「それは・・・」

ネギとアスナが黙ると

「やじてめえー!」

「あ?」

足元から声がした

「テメハ! 何モンド! なんの理由あつて兄貴の邪魔をしやがるんでい!」

足元を見ると白いイタチがいた

「あいつは真祖の吸血鬼のパートナーで兄貴の敵なんだ! そいつを今ボロッてるところだ・・・ほつーつか! てめえ! 奴の仲間だな!」

ほう

「いい勘してんじゃねえか、イタチ

「な!」

「そんな・・・」

ネギもアスナも驚いてる

「少なくとも、自分の教え子や、クラスメートを平氣で襲える奴らの仲間では無いわな」

「「うーー。」

ネギとアスナが一瞬こわばる

「別に、お前らを攻めていいわけじゃない。自分が襲われたんだ、やり返したといひで文句は言わんや」

「な、なら」「だが」「・?・」

安堵した二人が何か言おうとしたが止まる

そつだ、やられたら、やり返す

戦う者、戦闘者ならそれでもいい……だが

「それなら、やつをと教師を辞めてくれ」

「え？」

「どんな理由があろうとも、ここでは君は教師だ。その教師が生徒をましては自分のクラスの教え子を襲うなんて事はしてはいけないことだ」

「そ、それは……」

「何より、君は一度とはいえ俺を殺したんだ」

「あ・・・」

「で、でも、あれは幻で、実際に佑太は生きてるじゃない!」

「幻・・・か・・・」

「確かに、あれは俺が邪眼で見せた夢だ・・・だが、もし、あれが夢ではなかつたら?」

「え?」

「確かに、今回は偶然にも俺が見せた夢だ。だが、

「もし、俺が邪眼も無いただの人間だつたら?それでも俺はああし
たと思ひぜ」

「・・・・・・」

あの出来事が必ずしも無いとは言い切れない

本来、人払いの結界や周囲の確認はしてるのだろうが、もしかして
つといふこともある

だからこそ、

「ネギ・・・俺は君に知つてほしいんだ、力を持つことの意味を・
・力を持つ者の責任を・・・」

「意味・・・・責任・・・・?」

知つてほしい

「何故、君は力を振るひ?」

「僕は・・・・」

力を振るう理由を

「その力は何のためにある」

何のために力を・・・魔法を使うのか

「魔法の射手ですら普通の人間にとつては拳銃と同じレベルの威力があるんだ、そんな物をその力を一般人に振るえはどうなる?」

100%つてわけじゃ無いがあたりどこかが悪ければ簡単に人を殺めることができる

「や、それは・・・」

「力を持つ者はそれなりの責務を負ひ。今のネギと同じだ」

「同じ?」

その力を無闇に振るえば

「やられたから、やり返す」

「あ・・・・」

それは無限の連鎖

「そうされても仕方が無い」

「し、仕方が無いって・・・」

どちらかが死ぬまで・・・いや、死んだとしても、その連鎖は止まらない

「それが、力を持つ者の責任の一つだ。ハンムラビ法典にもあったる、『目には目を歯には歯を』って。法律としてはおかしいが、力の世界、戦場なんか当たり前のことだ」

「・・・・・」

二人は黙ってしまう

「ネギ・スプリングフィールドー君は何を思つて魔法を使う?」

「え?」

「魔法は所詮、道具でしかない。その人の心や思いによつて初めて意味ある力、意味ある魔法となる」

道具に意味なんて無い。使う人しだいで、それは善にも悪にもなる

「心・・・・」

「君は今、どういいうつもりで、魔法を使つた？どういいう気持ちで、茶々丸に魔法を向けた？」

「僕は……」

ネギは考え込んでしまつ、「のうなりに、思つ」とがあつたのだろう……だが、

「さつきの行動に、自分自身で間違つてなかつたと胸を張つていえるのか？」

考え込んでしまつてる時点で

「迷いがあるということは、心が決まってない、決意が無いのと同じだ！」

迷つてゐるのと同じだ

「心なき力、決意なき力は、ただの暴力でしかない！」

「つー」

「怖いか……自分の力が、人を殺めることのできる力が……」

「…………」

「そして、神楽坂もだ！」

「え？」

ここにも、解つてないようだな

「本来、お前はネギを止める立場だ。そのイタチに何を吹き込まれたかは知らないが、間違ったことを、起じやつとしているしていと分かっているのに、何故止めなかつた」

「そ、それは……」

解つてなかつたのか？それとも……

「間違つてゐる思わなかつたのか？」

「ち、違つわ」なら、お前はぶん殴つてでも止めるべきだつたんだよ」・・・・・「ごめん」

「謝つたところで、結果は変わらん」

「・・・・・」

「最後にネギ、迷いがあるなら戦つなー決意なき者が戦つたところで、死ぬだけだ！」

言いたい事は言つた……後はあこひり血肉の問題だ

「行け、茶々丸

茶々丸の元に歩み寄り帰ろうとするが

「ですが……」

まだ、二人の事が心配なのだろう。本当に優しい奴だ

「後はあいつら自身の問題だ……それと最後に言つておく

歩き出した足を止め振り返る

「もし、次に事を構えることがあるのなら今度は本気で行くぞ!」

「？」

俺の視線に怯え、二人は視線を逸らす

「帰るぞ茶々丸」

「……はい」

茶々丸に掴まりその場を飛び去る

後はあいつらしだいだが……少しやりすぎたかな?

大丈夫だ!あいつらなら立ち直れる……よな?

しつかし

「(ボソッ) これで、俺がエヴァの仲間と認識されたか

と、これで終わればよかつたんだが・・・・・

エヴァンジルン宅

「いひてててて

「やつすきです・・・・・佑太さん」

エヴァの家に戻った俺たちは家に入ったとたん茶々丸に頬をつねられた

「反省してるんですか？」

「ひてふ、ひてふはら、ふあなふいへふへ〜」

「反省が足りません」

今度は両頬を引っ張られる

「ひや、ひやめふえふへつへ、ひやひやふあふ～」

「…………本当に…………心配したんですよ…………」

茶々丸の手が頬から離れ胸元に置かれる

「茶々丸？」

「「」無事で…………よかったです…………」

「すまん…………心配かけたな」

やばい…………ぐつと来た

茶々丸かわええ～～～

「…………こつまでやつてゐつもつだ…………貴様ら～」

つたぐ、コメカミなんかヒクつかせちゃつて～

「まったく、エヴァつたら野暮だぞ」

「マスター、空氣を呼んでください」

「私が！私が悪いのか！？」

せつかく、いい雰囲気だったのに

「ヒュア、茶々丸を嫁にくれ！」

「やるか！」

「マスター今までお世話をになりました」

「何でお前も、嫁に行く気になれるんだ！？」

「なぜー茶々丸もその気なのに・・・あつそりか！」

「もしかして、妬いてるのか？」

「妬いてるんですか、マスター？」

「なー／＼／＼

あらま、顔を真っ赤にしちゃって・・・もしかして、マジで妬
いてた？

「・・・・・ふふふつ ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
た氷漬けになりたいようだな」

「ヤベ」

や、やつすぎた～

そして、地獄の鬼ごっこヒュアの別荘が再び開催され、数時間
後、一つの氷像が完成されたそうだ

その途中、

「ああ、マスターがあんなに楽しそうに・・・・・佑太さんの逃げ回る姿も素敵です！」

とりあえず茶々丸、眼科に行こうぜ

一一一|時間田「やつすけですか」（後書き）

力や魔法に関してですが、これは私自身の考え方なので、納得できない人もいるかもしれません、その辺は多めに見てやってください。そして、やはり私はシリアルスを書くのが少々苦手です。よって最後にギャグを入れました。相変わらずのフラグ乱立です。・・・
・回収しきれるかな?
では、また次回

一一三時間目「学園都市大停電・前編」（前書き）

長くなつたので一つに分けました

〔 〕・・・念話時の会話のカツコです

あれから数日がたつた

ネギは原作通り？かは、わからないが、長瀬やアスナ、エリカさんのおかげで立ち直つたらしい

翌日に、俺にも頭を下げに来た

俺の言いたいことが少しはわかつたよつて、その上でエヴァや俺に対して勝負を挑むようだ

エヴァは、その日に風邪で弱つていたが、ネギと茶々丸の看病と、俺のちょっとした嫌がらせのおかげで、翌日に全快し、翌日からは授業に参加し始めたが、逆に俺が風邪を引き一日ほど休んだ

いや～、わざわざ寝ているエヴァの横でエヴァの好物の菓子を堂々と食つたり、エヴァの未プレイのゲームをやってたら、そらキレるわな

風邪が治つたのと同時に、別荘で数日氷漬けにされりや、風邪も引くよな～

実際、風邪引いたらエヴァと茶々丸、ついにはアキラや裕奈にまで

「「「佑太（貴様）でも風邪を引くんだな」」」

と、言われた

お前らは俺を何だと思つてるんだよ・・・ちくしょー！

二十三時間目「学園都市大停電・前編」

ついに、この日が来た

今日の夜、麻帆良学園都市の大停電の日

原作では今夜、エヴァとネギが対決する・・・・まあ、対決といつても、実際はじじい（学園長）が裏で糸を引き、ネギに本当の実戦を体験させるつもりなんだろうが・

「なんで、俺も行かなきゃいけないんだ？」

「貴様だけではない、貴様の従者一人も連れて来い」

「おい、あいつらを今回のことにつき込むな」

「心配するな、大河内アキラと明石裕奈は佐々木まき絵と泉亜子と共に操られボウヤを誘い出すだけだ。危害は加えさせんよ」

「…………変なところで優しいよな、キティって」

「その名で呼ぶな！」

胸倉を掴まれガクガクされた……あ、酔った

「と、言つこじらしー」

Hヴァと決めたことを仮契約カードの念話でアキラに伝えてくる

「わかった、私と裕奈はその後どうすればいい？」

「泉と佐々木を保護して寝てていこさ」

「…………無理、しないでね」

「ああ、わかってるよ」

「何かあつたら、絶対に私たちを呼んでよー私たちだって戦えるんだからー！」

「わかった、ありがとな」

念話を終え、空を見上げる

「…………こよこよか

空に月が浮かんでいる

「（）ひらは放送部です。学園内はこれより停電となります」

放送部からの、停電の知らせが響くのと同時に

「佑太、時間だ来い」

「はいよ」

エヴァから呼び出しの念話が届いた

場所は大浴場・・・・・大浴場？

俺って入つていいのか？

そんな考えを頭の片隅に置きながら大浴場に着くと、そこにはメイド服を着た裕奈、アキラ、泉、佐々木、茶々丸がいた

そして、その中央には黒のボンテージみたいた服を着た金髪の妙齢の美女が・・・・つて

「あんた、誰だ？」

俺の言葉に金髪美女がズッコケた

「茶々丸、エヴァはまだ来てないのか？」

「あの・・・佑太さん

「まったく、人を呼び出しておいて遅刻とは、なんてガキだ！」

「「Jの方が、マスターです」

「へ？」

ボンツと音と共に白い煙が上がり金髪美女が金髪幼女になつた

「誰が幼女だ！？」

なつ！心の声を読まれた！

「佑太さん、声に出てました」

「あれ？」

「…………後で覚えておけよ／＼／＼／＼

エヴァさん、何故にキレながら頬を染める

「マスターは佑太さんに美女と言われて嬉しかったようです。これは照れ隠しです」

「なつ、何を言つてるんだ、茶々丸」

「あ～」

美女って言われてドキッとしたのか……初心だな

「貴様も、何を納得している！へつ、「Jのボケ口ボメ！」

「あ、マスターいけませんそんなに巻いては……」

エヴァは照れ隠しなのだろうか茶々丸のネジを巻いている

あ～なんか、和むわ～

と、和んでいると

「ぶつ！」

いきなり顔面に衝撃がきた

「いっ……」

足元を見ると、そこにはバスケットボールが・・・・・?

バスケといえば裕奈だよな

と思い裕奈たちの方を見ると

「「・・・・・」」

目が虚ろながらも「立腹の裕奈とアキラの姿が・・・・・あれ、
お一人は操られてるんですね？」

「ハアハアハア・・・・おい！貴様もいつまでそこにいる…さっさ
とこっちに来い！そろそろ、ボーヤ
がここに来る！」

「あいよ」

いつの間にか「コントは終わってたよ」で俺はエヴァの後ろ、茶々丸の隣に立ちネギが来るのを待つ

エヴァは再び大人モードになつた

数分後

「エヴァンジエリンさん…どうですか…まき絵さんを話してください

い

完全武装した、ネギが大浴場へとやつてきた

「ふふ・・・・」だよボーヤ

月の光がタイミングよく俺たち七人を映し出す・・・・てか、タイミングいいな

「パートナーはどうした? 一人で来るのは、見上げた勇気だな」

「あ、あなたは…」

「フ・・・・・」

あ〜、エヴァは自分の姿を見て驚いたとでも思つたんだろうな

けど、たぶんあれは・・・・・

「ど、どなたですか?」

本日二度目のエヴァのズッコケ

「私だ！私／＼／＼つ」

「あ――――！」

子供モードに戻ったエヴァを見てようやく誰かわかつたらしい

卷之三

笑いそうなのを何とか我慢する

自分がやるのより、他人がやらかしたほうが笑えるな

「まあたゞ、ボーヤと云ふのはいい。まあいい」

何とか立て直したエヴァ

「満月の前で悪いが、今夜ここで、決着をつけて、ボーヤの血を、存分に吸わしてもらうよ」

「…・・・わかりました」

エヴァの言葉に、ネギは覚悟を決めたようだ

「でも、やつはさせませんよ。僕が勝つて、悪いコトするのやめてもういます！」

そうか・・・・・見せてみるよ、ネギ・スプリングフィールド！

君のその覚悟を！

「それはどうかな……行け！」

エヴァの指示で、アキラ、裕奈、佐々木、泉の四人がネギの元へと向かった

「ひ、卑怯ですよー。クラスメートを操るなんてー！」

「卑怯？ 言つたはズだ……私は悪い魔法使いだと」

ネギと四人の距離がだんだんと詰まつていく

さあ、どうする！ 操られてるとはいえ、彼女たちは君の生徒だ……
・また、魔法の射手で蹴散らすか？

「一人で来たことを後悔させてやります……やれ、我が下僕達よ

エヴァの命令で四人がネギに襲い掛かる……襲い掛かるって言つてもネギが装備してきた魔法具の類を奪つて捨てるだけだが

「はう・・・くつー」

ネギが液体の入った試験管みたいなのを中に投げる。あれは……

「フランス エクサルマティオ
風花・武装解除」

空中で液体が反応しアキラと泉の服が弾け飛ぶ

やつぱり、あれはエヴァがよく使つてゐる魔法薬か

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル 大気よ水よ（アーエール・エト・アクア）白霧となれ（ファクトイ・ネブラ）彼の者等に（イリース・ソンヌム）一時の安息を（ブレウェム）」

ネギは四人の包囲網から抜けながらも詠唱をしている

「眠りの霧！」
ネフラ・ヒュブノーテイカ

裕奈と佐々木は避けたが、アキラと泉が眠りの霧を受け眠ってしまう
催眠系の魔法で寝かせ無効化するか相手を傷付けず無効化するには
いい手だな

「フ・・・やるではないか。では本番と行こうかボーヤ。茶々丸！
佑太！」

「ハイ」

「おう」

エヴァの言葉で俺と茶々丸が駆け出す

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック！！」

「失礼します、ネギ先生」

「構えろよ、ネギ！アデアツト」

駆けながらアーティファクト、赤龍帝の籠手を出す

なんか、久々に使う気がするのは気のせいいか?

「！」

後ろで詠唱をしているエヴァに気がつきネギは後退していく

ここでは狭いと判断したんだろう

「喰らえ！ 魔法の射^{サギタ・マジカ}手連弾・氷の17矢」^{グラキアーリス}

エヴァの魔法の射手が大浴場の窓ガラスを打ち破り、ネギもそこから外へと落ちていく

しかし、ネギは空中で体勢を立て直し杖にまたがり飛ぶ

そして、背後から迫つてくるエヴァの魔法の射手を手にしていた魔法銃で撃ち落していく

エヴァはネギの持つ魔法銃に興味がわいたようだ。茶々丸曰く、ネギは骨董魔法具のコレクターだ

そうだ

ちなみに、俺は飛べないので茶々丸に抱きかかえられている

「～～～」

心なしか、茶々丸は嬉しそうだ

「少しは考えてきたようだな」

エヴァは、このことに関しては無視のようだ

「まあ、ほんと脱がされたみたいだけな」

俺達はネギを後ろから追うが、裕奈と佐々木は先回りさせている

先回りしていた佐々木はネギの杖の上に乗り、見事なバランスで蹴りを繰り出し、裕奈は何故かバスケットボールをドリブルしながら空中にいる一人に投げつけた

ボールは見事に一人に当たったが、佐々木は少し回復が遅かつたらしく、ネギはその好きに佐々木を校旗の旗に当て佐々木と裕奈を同士討ちさせた

「アハハハハ、本当によくやるじゃないか。あのボーヤ

「茶々丸、残り時間は?」

俺は、停電復旧時間が気になり茶々丸に問う

「停電復旧まで後7分21秒です」

「そうか、エヴァ！」

「わかつているーそもそも、決着をつけてやろうー。」

エヴァは詠唱を始める

「ニウイス・カース
氷爆！！」

「あつひ

ネギは魔法障壁でエヴァの魔法を防ぐ

なんか変だ

「エガア、なんかあの橋に誘われてる気がするんだが

「ああ、おれらへトラップでも仕掛けたるんだろ？」「う

「どうしますかマスター？」

「いいだろ？、誘われてやるつじやないか

「おこおこ

「いれる大地」
クニコ・スタニザティイオー・テルストリス

今度は防ぎきれず魔法の余波でネギは橋の上に投げ出される

「なるほど、この橋は学園都市の端。私は呪いで外には出れない。ピンチになれば学園の外に逃げればいいか

エヴァが橋に下り続いて茶々丸と抱きかかえられた俺も下りる

「意外にせいい作戦じゃないか　え？先生」

ゆづくとネギに向かい歩いていく

「」それで決着だ

そして、そのまま数歩進むと

「」「」「」

足元が光だし魔方陣が浮かび上がる

「なつこれは！」

魔方陣から光の紐のようなものが現れ

「・・・・・！」

俺たちに絡み付いてくる

「捕縛の結界だな」

俺達は捕縛された

「やつたー！ひつかかりましたね、HヴァンジHコンセイ

自分の作戦がうまく言つたことに喜ぶネギ

「もう動きませんよHヴァンジHコンセイ」これで僕の勝ちですー。」

しかし、ネギよ

「わあ、おとなしく観念して、悪こじとも、もつやめへだせこね

「…………やるなあ、サツヤ。感心したよ」

詰めが甘いぜ

「ふ・・・・・アハハハハ」

「何がおかしいんですか！御存知のよつこ、この結界にハマれば簡単に抜け出れないんですよ」

「せうだな、本来ならこじで私の負けだろうが……佑太！」

「え？ 僕？ 茶々丸じゃなくて？」

「お前はまだ何もしてないだろ？ 少しごらりと働け！ 時間は十分与えただろう！」

「はあ～わかった……よーー！」

捕縛の結界を力任せに砕く

「な・・えええ！ー！」

さすがのネギも驚きだろ？

なんせ、力任せで結界を壊したんだから

「本来なら、茶々丸の結界解除プログラムがあつたのだが、たまにはこいつにも働いてもらおうと思つてな」

話しながらも捕縛していた光の紐が粉々に崩れしていく

「えつ！そんな、ウソするい！」

いや、エヴァは15年間、この類の呪いを受けてたんだから研究や対処ぐらいはしてるだろう

慌ててネギが魔法を使おうとするが茶々丸がネギから杖を奪いエヴァに渡す

エヴァはその杖をあっさりと捨てる

あの杖はネギの父親、サウザンド・マスターの杖だ

それを捨てられたことで、ネギはすでに半泣きだ

そんなネギを捕まえ血を吸おうとする

「ひひ――――――」

学園側の橋の方から二つの影がこちらに向って走ってくる

「フン、来たか。ボーヤのパートナー神楽坂明日菜とボーヤの妹であるエリカ・スプリングフィールド」

「茶々丸！佑太！」

「ハイ」

「あいよ」

迎撃すべく俺と茶々丸が一人に向かい駆け出しが

「カモー。」

「合点！姐さん！」

まづい！あれば

「オーデジヨ フラーツ シュ」

マグネシウムとライターの火で閃光を起こす

「『めん茶々丸さん佑太』

だが、

「なめるなよ、アスナ！」

目を閉じて閃光を交わした俺はアスナを足止めをしようとするも

「甘いのはあなたよ佑太」

後ろから杖でなぎ払つてくるヒリカさんの姿が

「くつ」

避けるのは無理だと判断して籠手で杖を受け止めるも

「はあつー。」

続けざまに放たれた蹴りを腹に受けダメージを逃がすために後ろに飛ぶ

「ぐつ」

あ、エヴァもアスナから蹴りを貰つたらしい・・・あいつ、俺が言つたこと忘れたな

一瞬、目を切りエヴァを見た隙にネギ達の姿を見失う

「くつー・ビード！」

辺りを見回していると柱の影から光があふれる

「そこか！」

さて、いよいよ本番か・・・

一一三時間目「学園都市大停電・前編」（後書き）

次回は久しぶりの戦闘・・・上手く書けるかな・・・

一二十四時間目「学園都市大停電・後編」（前書き）

だいぶ時間が空けてしましましたが新年一発目の投稿です。

一十四時間目「学園都市大停電・後編」

日は落ち、欠けた月が真祖の吸血鬼の少女とその従者+1を照らす

相対するのは幼き魔法使いの兄妹とその従者

ここは、学園都市の端に位置する大きな橋

そこで、一組は相対し決着の時が迫る

二十四時間目「学園都市大停電・後編」

エリカ side

「勝負は開始から十秒・・・いえ、二十秒以内に決めないとこちら
が圧倒的に不利ね」

「二十秒ってエリカちゃん」

「いくらなんでも、きつよいエリカ」

「いや、ヒリカの姉さんの言つてることとは、あながち間違つちやいねえ」

カモは多少はわかってるみたいね

「相手は、なんてつたつて吸血鬼の真祖つづ化け物クラスだ。長引けば長引くほど、経験の差が出ちまう」

さすがに、何百年と生きてきた吸血鬼の真祖、それに比べ、相手が油断してくれているとはい、十年そこそこしか生きてない私たち。しかも、まともに戦闘をしたことがない私たちじゃ戦闘経験値に圧倒的な差がある

「それもせうだけど、さうに厄介なのがコウタよ」

「佐倉さんが？」

「ええ、彼の武器は十秒ごとに自分の力が倍になるの

「？なにか問題があるの？」

「最初はまだいいのよ、ただ、時間が経つごとに1の力が2に、2の力が4に、倍々に上がつていき、そのうちパンチ一発で建物が壊せるようになるのよ」

「……え、マジ……」「

さすがに驚くか……でも、

「ほんとうに嘘言つてもしようがないでしょ。まあ、さすがに建物を壊せるようになるまでには、少し時間が必要だと思ひけど」

「少しつて？」

うーん、平均的な男子生徒の力なら、だいたい一分からない位だから・・・大目に見て

「一分くらいくらい？」

「なら、遅くとも三〇秒にカタをつけらるしかないですかぜ、兄貴！ 姉さん」

「う、うん…」

「わ、わ…」

さすがに齧しそぎたかしら？でも「れぐりー」の緊張感は必要よね！
うん…

「でも、なんでエリカはそこまで佑太さんのことを知ってるの？」

れすがに、ここまで詳しきつたら氣にはなるわよね

「そえれは、今回のことが終わったら、ちやんと説明するわ。よし
行きましょう兄さん、
アスナさん…」

「うん…」「

「ちよ、ヒリカ姉さん！オレたちの事忘れてる…」

気にしないでカモ、わざとだから

そして私たちはエヴァちゃん、茶々丸さん、佑太の前に立ちふさがつた

佑太 side

「よひやくでてきたか」

柱の影からあふれた光がやみ少しした後三人が姿を現す

「ふふつ、どうしたぼーや、お姉ちゃんや妹が助けに来ててくれて、ホツと一息か？」

「うぐっ」

エヴァの言葉に赤面するネギ

「何言ひてるのよーこれで3対3の正々堂々互角の勝負でしょ…！」

「そうだな、双方パートナーと協力者が揃い、ようやく正当な決闘といつわけだ」

中に飛んでいたエヴァと茶々丸が橋に下りてくる

え？俺？飛べないから元から下にいたけど？

「だが互角かな？坊やは杖が無く、貴様は戦いについて、まったくの素人。まともに相手ができそつなのは、譲ちゃんだけだろうが」

「（ボソッ）茶々丸、アスナは戦いは素人でも運動神経は無駄にいいから、気をつけたほうがいい。それとエヴァ、エリカさんの相手は俺がする。彼女は魔法より体術が主だ。俺が相手の方がいい」

「いいだろ？」

「はい、佑太さん」

「行くぞ。私を生徒だということは忘れ、本気で来るがいい。ネギ・スプリングフィールド、エリカ・スプリングフィールド」

「「…………はい（ええ）！」」

そして、決闘が始まる

一陣の風が吹く

「契約執行 90秒!! ネギの従者『神楽坂明日菜』!!」

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック!!」

エヴァの詠唱の声をスタートに茶々丸と俺が駆け出す

「ブーステッド・ギア!!」

『Dragon booster!!』

体に力が漲りスピードが上がる

「ラス・テル マ・スキル・マギスキル」

ネギの詠唱を止めるために軽めのパンチを繰り出すが

「ふつー。」

俺とネギの間に現れたエリカさんの杖により、力の向きを変えられ流される。と同時に突きが繰り出される

「はあつー。」

「つひとー。」

それをわつきと同じように、今度は俺が突きの力の向きを変え流すが、流された勢いのままに、今度は下から上に向かい切り上げてくる。それを体を半身にして交わすも、今度は横薙ぎが襲ってくる。それを両手を交差して受け威力を軽減させるために後ろへ飛ぶ

その途中に周りの状況を確認

茶々丸・・・アスナと相打ち？でアスナは額を押さえしゃがみこみ、茶々丸は軽くフラッとしている

エヴァア・・・ネギと同じく詠唱が終わり魔法を打ち合いつてる

ヒュッ

「ー。」

風切り音と同時に横払いで杖が迫る。片腕で防御するために腕を上げるも、内心多少のダメージを覚悟していたところに

『Boost!..』

タイミングよく一度田の倍化が訪れダメージ無く横払いを防げた。

「くっ！」

防がれたため、杖を引くも

「遅え！」

渾身の力を込めた拳を杖に叩き込む

バキッ！

音と共に真っ二つに折れる杖

「あ・・・」

そして、反対の拳をエリカさんの眼前で止める

「俺の・・・勝ちだな」

「・・・・ええ、私の負けよ」

勝負が決したので拳を引き他の戦いに田を向ける

茶々丸とアスナはネギとエヴァの戦いを見てい

そして、空中では同種の魔法、雷の暴風と闇の吹雪を打ち合つネギとエヴァの姿が

「終わりが近いわね」

「ああ」

エリカさんは、俺の横に並び同じよう二人の戦いを見ている
少しの間、互いの魔法は互角かに見えたが自力で勝つてエヴァの
闇の吹雪が押し始めた時だつた

最後の一手は唐突にやってきた

「は・・・・・ハックシュン！」

ネギのくしゃみによつて生まれた魔力によりネギの雷の暴風がエヴァ
アの闇の吹雪を押し返した

「・・・・・なんつーか」

「・・・・・兄さんらしいわ、魔力の暴発で打ち勝つちやうなん
て」

打ち返されたことにより生じた光がやみ、そこにいたのは服が全て
吹き飛ばされたエヴァの姿

ネギもエヴァの姿を見て赤面してなにか言ひ合つてゐるが、口には
一言

「お~い、エヴァー！風邪引くぞ~！」

「 「 「 そういうことじゃないだろー！後、見んな！」」

エヴァとアスナから突っ込みを隣にいたエリカさんからはアップバーを貰いました

いや、そんな子と言われても

「いや、ガキにや興味ないから」

と言つたら

「 「 殺す！！」

とエヴァさん・・・ついでに横にいたエリカさんから殺氣の籠もつた目でにらまれた

あれ？ フオローしたつもりだつたんだけど？

「佑太さん、それは・・・・・・！ いけないマスター！ 戻つて！」

橋の上の外灯に光が点る

「予定より7分27秒も停電の復旧が早い！マスター！」

電気が復旧するって事はエヴァの呪いも、ちつ！

俺は急ぎ駆け出す

「ちつ、ええい、いい加減な仕事をしあつて！」

くそー。

「 もち んー。」

ヒヅアの体が空中で電気を受けたよつて弾かれ、そのままヒヅアは湖へ落ちていく

なうー。

橋から飛び、何とか空中でヒヅアを捕まえる」とはできただが

「・・・俺、飛べないんだつたああああああああああ

「アホか！貴様！何しに来たんだ！」

「ヒヅアを助けに来たに決まつてんだろ？がー。」

「なつ・・・／＼一緒に落ちていては説得力が無いわー。」

「うひせえー！

やつべ、どひしつ

「・・・・・バカが／＼／

なんかヒヅアが小声で囁つてけじょく聞こえねえや

おー上空にネギと茶々丸の姿が・・・・・よしー。

「ネギ！エヴァを連れて、すぐにここから離れろ！茶々丸もだ！」

抱きしめていたエヴァをネギの方へと投げる

ネギの方が近かつたからな

「なつー！」

「えつー！」

エヴァは投げられたこと、ネギは俺の行動に対して驚きの声を上げる

ネギが無事、エヴァを抱えた

そこまで見て今度は水面の方に向く

うお、もつすべっこかよー！

「佑太ー！」

『Boostー..』

・・・・タイミングは一瞬

そこを見逃すな

後、2m・・・1・5・・・1・・・0・5ー

こだ

「はあー。」

『Exploratio...』

ブーステッド・ギアから響く声と同時に水面を殴りつける

殴られた衝撃で跳ね上がる水に包まれ俺は湖の中へと消えていった

一十四時間目「学園都市大停電・後編」（後書き）

一月以上更新が止まつてしまつていたことを、まずはお詫びします。就活、卒研、pcの故障などいろいろと年末に重なつてしまい。小説を書くことが出来ませんでした。ようやく、時間が出来ましたので再び更新を再開いたしました。こんな作者ですがこれからも温かい目で見てやってください
i_c

一十五時間目「学園都市大停電・裏」（前書き）

投稿します

一十五時間目「学園都市大停電・裏」

これは、エヴァとネギとの決闘が行われていた話の裏側

学園都市の停電により封印が弱まつたのはエヴァだけではなかつた。

同時に魔帆良学園に張つてある結界も弱まり、魔帆良の守りが最も弱まる日

それにより、もつとも敵の襲撃がある日

そのため、学園に存在する魔法先生、生徒はその襲撃から学園を守るために戦つていた

そして、ここにも学園を守るため奮闘している魔法生徒たちがいた

一十五時間目「学園都市大停電・裏」

私、佐倉愛衣は今、大変な状況にいます。

学園都市のメンテナンスの日で、魔帆良学園の結界がなくなる日

年に2度あるらしいんですが、私は今年が始めての参加です。

パートナーはいつもと同じく、高音・ロ・グッドマン先輩。

私がお姉様と慕っているお方です。

最初は、いつもやっている夜の警備の延長かと思いましたが、出鼻からまったく違うと痛感されました。

だつて・・・

「くっ、数が多くさますわ！百の影槍！！」
〔ケントウム・ランケアエ・ウンフラー〕

「魔法の射手炎の九矢！サギタ・マギカ セリエス・イグニス後数分で学園の結界が戻ります。がんばりましょー！お姉様」

こんなに、たくさん魔物が襲撃してくるなんて、思つても無かつたよ～（涙）

「やうね愛衣！」

お姉様と私は励ましあいながら、次々と魔物を消していく

数は減つてゐるけど、このままじゃ・・・

「学園の防衛に当たつている全魔法教師ならびに魔法生徒に連絡じや。少々早いが30秒後に学園の結界を復活させる。厳しいと思うがそれまで耐えてくれ」

学園長からの念話が聞こえた！

「お姉様！」

「ええ、私にも聞こえましたわ。気を引き締めなさい、愛衣。ここは絶対に守るわよー！」

「はいー。」

負けられない、こんなところで挫けてちゃ、立派な魔法使いになんてなれない。

それに・・・会うんだ！もう一度お兄ちゃんにー！

絶対に見つけるんだ！

「メイプル・ネイブル・アラモード ものみな（オムネ）焼き尽くす（フランマ NS）淨北の炎破壊の王に（ドミネー エクスティンク）して（ティオーニス）再生の（エト シグヌム） 徵よ（レゲネラティオーニス）我が手に宿りて（イン メアー マヌー エンス）敵を喰らえ（イーミークム エダット）紅き焰ー！」

私が今、唱えられる呪文の中で一番威力のある魔法！

爆炎がこの場にいた魔物全てを包み込んだ

「結界を発動した！これ以上の増援は無いじゃー！」

よかつた、さつきのでもう魔力が無くなっちゃつただよね

「お疲れ様、愛衣。よくやつたわね」

「えへへ／＼」

お姉さまに褒められた。嬉しいな～

「でわ、この場はもう、大丈夫でしょう。学園長に報告に行きますわよ」

「はい」

立ち上がりお姉様の後を追う・・・・・が、

「なんだよ、いきなり呼び出されたと思えば、こんなチンチクリンのガキしかいねえじやねえかよ」

「「...」」

いきなり背後から聞こえた声に振り向くとそこには黒いスーツを着た男性

「つづたぐ、せっかく神滅具の気配がしたから来たのに、いたのは乳臭いガキが一匹」

「なつー」

「ち、乳臭いですって！」

私たちは男の言葉にカチンしました

「ま、いいや。おい、ガキ共！」

しかし、そんな怒りは、次の瞬間

「…………暇つぶしに付きたくても」

男から漏れ出した魔力により

「つー」

「あつあつ・・・・」

恐怖に支配された

「いかん！逃げるのじゃー高音君、佐倉君！そ奴は上位の悪魔じやー！」

「じょ、上位の悪魔・・・」

「すぐに、タカミチを・・・」

そんな、中位の悪魔でさえ私にはギリギリなのに、上位なんて

「ちつ、ひめせえな、邪魔だよ」

男から一瞬、強い魔力が感じたと思つたら

「学園長？学園長ー」

「悪いが、ここへいらっしゃったいに妨害の結界を張った、念話はもう使
えねえよ」

「そんな…」

「うひうひうひ、念話が使えない」と学園長に状況を報告できない

「くつくつくつ、いいねえ、その絶望した顔…。やめるぜ」

「くつー私を甘く見ないでくださいー。愛衣あなたは離れて休んでい
なさい」

「そんな、お姉様！」

一人で上位悪魔に挑むなんて！

「あなた、さつきの魔法で魔力が無いのでしょうか？」

「あつ」

「そうだ、最後に唱えた紅き焰で私の魔力は…。

「休んでいいわい。高畠先生が来るまで何とか持ちこたえて見せま
すわ！」

「そうだ、学園長もこの事に気づいて高畠先生に連絡して来てもらひ
つて

「いいねいいね、姉妹愛つてやつ？僕は感動しちゃったよ～」

男はワザとらしく涙を拭くフリなんしてる

「その気持ちに賞賛して、もし僕に一撃でもくらわせられたら、見逃してやるよ」

「なんですって・・・」

「まあ、無理だと思うけど・・・ね！」

その言葉と共に足元から次々に現れる鬼

「さあ、この食人鬼グールを倒して僕に一撃与えてみな」

その数は数十匹。ただでさえ戦いの後なのにこれじゃ・・・

「愛衣、諦めてはダメよー行きますわー黒衣の夜想曲!
ノクトウルナ・ニグレー ディニス

お姉様の背後に巨大な黒衣の仮面を付けた使い魔が現れる

お姉様の最強奥義

「行きなさい!」

使い魔の背後から多数の影の槍が変幻自在に繰り出され次々とグループ達を貫き倒していく

「はあああ!」

お姉様の攻撃は止まらない休む暇無く続いている

「・・・・ふむ」

いい感じだこれなら・・・

「これで・・・・ラスト!」

最後のグールを倒したお姉様はそのまま、男に向かっていく

「さあ、あなたを守る兵はいなくなりましたわーこれで・・・」

このまま行けば

「終わりですわ!」

十数本の影の槍を一つの大きな槍に変化させ、突っ込むが

「こ」の程度か

それをあっさり掻む

「な!」

「そんな

あれを受け止めるなんて

「拍子抜けだ」

そういうと男はお姉様を放り投げ

「燃えぬきな

青白い炎をお姉様に向かつて放つた

「え？ ひーあやああああ 「

「お姉様！」

投げ飛ばされたお姉様は私の目の前まで来ていた

炎は幸いにも使い魔の服のおかげで制服が燃えぬきのだけですんだ

「お姉様！ しつかり！」

「ひひ・・・・・愛衣・・・ひー」

体を強く打つたことによるダメージもあるらしく顔をしかめている

「逃げなさい愛衣

「え・・・」

「私を置いて早く！」から逃げなさい」

「そんな！」

お姉様を見捨てられて事！

「お兄さんを探すのでしょ・・・・でしたら、早く！」から逃げな
れこ

「お姉様・・・・・」

「こんな時今まで、私のことを思ってくれるなんて・・・・・でも

「逃げません」

「愛衣・・・・」

「私はお姉様を見捨てるなんてできません。それに・・・・・」

もしも、お兄ちゃんなら

「私の大切な人を見捨てるなんて事、絶対にしない・・・」

だよね、お兄ちゃん！

お姉様を横に寝かせ、男の正面に立つ

「愛衣・・・・」

「私は諦めない！今度は私が相手です！アーティスト！」

アーティファクトを呼び出し構える

「・・・・・・・・・一度はいいぞ・・・・・けどな

男の姿が歪む

「一度も、人間の馴れ合いなんざ、見せんじゃねえええーーー！」

背中から黒い大きな蝙蝠のような翼が頭の左右からは捩れた角、腕は太く巨大に、身長は先ほどの倍くらいにまでになった

人の姿から悪魔の姿へ

「殺してやるよーー一人まとめてなあー。」

悪魔の姿が消えたと思つと全身に衝撃が走り続いて背後に何かがぶつかつた、

「かはー！」

そのまま地面に座り込む

そして、ようやく自分が殴り飛ばされ木にぶつかったことがわかつた

「愛衣ー！」

お姉様の声が聞こえる

顔を上げると悪魔が目の前にいて、腕を振り上げている

「死ねよー。」

「くつーふ、紅き焰ーー。」

フランティア・ルビカシス

無詠唱で魔法を唱える

「つまー。」

悪魔が炎に包まれるが

「やつぱり、この程度の炎しか出せないのか？」

何事も無かつたようにたたずんでいる

再び拳が迫る

ああ、私、死ぬのか・・・・・

助けて

涙がこぼれ、今までの事が走馬灯のように頭の中を駆け巡る

助けてよ

お姉様、友達、両親、そして・・・

もう一度・・・会いたかたな

お願い

お兄ちゃん

「助けて！おにいちゃんやあああん！…！」

田をつぶり助けを求め叫ぶ

奇跡を信じて

私の・・・

最愛の人の名前を叫んだ

そして・・・

その声は・・・

「うちの妹に何してくれようとしてんだ」

届いた

何かを殴り飛ばす音が聞こえ目を開くと

「よう！無事か？」

大好きな人が

あの頃と変わらない優しい笑顔で

「愛衣」

そこに立っていた

一十五時間目「学園都市大停電・裏」（後書き）

エヴァ編まだ続きます

一十六時間目「再会した兄妹」（前書き）

久々の投稿です

一十六時間目「再会した兄妹」

「じつかし、あの高さから落ちて、よく無事だったわね」

アスナが不思議そうに呟く

「こぐら下が湖だつて、普通は死ぬ高さですよ」

エリカさんが呆れたように呟く

「佑太さんってすごいんですね！」

ネギが憧れを抱くような目で見つめるのはいいが、いつの間に呼び方が変わったんだ？

「じる無事で何よりです。じゅ・・・佑太さん」

茶々丸が安心した声で・・・・今、なんて言おうとした？

「やはり、バカなんだろう・・・・フンッ」

エヴァさんやそんな半泣きの状態で言われたら・・・

「いや、誰かさんと違つて俺は力ナズチじゃないし、ちゃんと考え合つての行動だから。誰かとは違うんだよ、誰かとはーー！」

弄りたくなっちゃうじゃないか

「まつ・・・・・よほび、氷像になりたいようだな・・・」

エヴァの右手に魔力が溜まる

「あ、あの、エヴァさん？ あなた封印の呪いで魔法が使えないはず
じゃ・・・」

「何故だらうな？ 貴様に対しても、自然と使えるんだ」

「いや、わすがにびしょ濡れの状態でエヴァの氷雪系の魔法喰いつ
たら・・・」

「うん、芯まで凍りつくだらうな」

あらま、かわいい笑顔です」と

うん、俺、おわたわヽ(×_×)ノ

・・・・・『お兄けやん!』

「――」

今の声って・・・・

〔エヴァー緊急事態じや一手を貸してくれ〕

「ん？」「何か用かジジイ？」

エヴァが念話を始めたが相手はわからない・・・しかし、なんであ
いつの声がしたんだ？ あいつはアメリカにいるはずじゃ・・・けど、

なんでこんなにいやな予感がするんだ？

「上位悪魔が魔帆良に侵入した！生徒が一人遭遇し、その後に念話妨害の結界が張られた！」

厄介とか？？？何だ？あっちから禍々しい気配がする・・・

「何だと？？」

だめだ、いやな予感が止まらない

「ヤレから2キロほど西じゃー高音君と佐倉君が担当の場所だ！」

「西か・・・しかし、よつによつてあいつらとは・・・」「ヒガア、悪い！ちょっと行つてくるー」「あ、おーーー」

いやな予感が止まらないんだ！

『Dragon booster!!』

ブーステッド・ギアを発動し、駆け出す！

早く、速く！

カードを出し、額に貼り付ける

「裕奈ー・アキラー！」

俺のパートナーの一人に呼びかける

「え？ 佑太？」

「ど、どうしたの？ 急に？」

よかつた、まだ起きてたか

「「緊急事態だー下手したら、一人を呼ぶかもしれないー。」」

「「え？」」

「「心の準備だけはしどこでくれ」」

「「わかつたー。」」

念話を終えたらスピーディーを上げるー。

全速力で走りながらも遅いと感じてしまつー。

見えたー！

「ーなんで、ここにいるんだよー。」

早くないか？いや、新学期を向かえたから時期的にはどうでもいいのか

「へやつー。」

あいつの泣いてる顔が頭に浮かぶ

決めたんだ！

守ると！

泣いてるんだ、俺を呼んでるんだ！

だから・・・

大切な！

「うちの妹に何してくれようとしてんだ」

妹に、愛衣を泣かすんじゃねえーー！

愛衣に迫る黒い脅威に

『Explanation!』

全力の拳を叩き込む！

吹つ飛ぶ姿を確認した後

「よつー無事か？」

数年ぶりに会った妹に

「愛衣」

数年ぶりに笑いかけた

「お、お兄・・・ちやん?」

瞳に涙を浮かべ、上から見ている

やべえ、普通に可愛いんですけど

「ああ、久しぶりだな」

「お兄・・・ちやん・・・」

愛衣の顔がクシャリと崩れる

「大きくなつたな」

しゃがみこみ、愛衣をそつと抱き寄せる

「お兄ちやん!...」

かると、愛衣も俺に抱きつき泣き始める

「お兄ちやん!お兄ちやんお兄ちやんお兄ちやんお兄ちやんお兄ちやん・・・
・」

「つたく、大きくなつても泣き虫なのは変わらないな

「だつで、やつど・・・やつど、あ、え、だんだほん

あ～あ、鼻水まで垂らしちゃって

「そつか

出来るだけ優しい笑みを浮かべ、頭を撫でてやる

「う、ん！」

わらじキック抱きついてくる愛衣

あ~~~~~癒されるなあ~

「避けなさい！」

「「~」」

突如聞こえた声に反応し、咄嗟に愛衣を抱えたまま横に飛ぶと、瞬間、先ほどまでいた空間を炎が支配した

「つたぐ、折角の兄妹の再開だつてのに・・・・空氣読めよな、脱げ女！」

と、相手を警戒しながら少し離れた所で少し体を起こしている服を着てない女に向かつて言つ

「ぬ、脱げ女つて・・・・危険を知らせてあげたと言つの・・・・つて、こいつを見ないでくださいーー！」

「まつたぐ、その年で、露出に田観めるのせじつかと思ひつい

愛衣を抱えたまま脱げ女・・・もと、高音に近づく

「み、見ないでください」

愛衣と離れ、上着を脱ぎ

「ほい、少し濡れてるから冷たいと感づが、着てね。田のせり場に困る」

ぬげ・・高音に渡す

あじかと

ま、しきり脳内メモリーには保存してけどな

卷之三

下品な笑い声が響く

あーた！あーた！ホントはあーた！」

・何か目的で来たかは知らなえが、二七の妹を泣かしやがて……
・ぶつ飛ばす！」

Dragon booster!!

愛衣と高音を後ろに庇いながら、再びブーステッヂ・ギアを起動させ倍化を始める

「はははあああ・・・・俺を呼んだ奴の目的なら、魔帆良に進入することだつたらしいぜ、まあ俺がすでに殺したからどうでもいいが

な。そして、俺の目的ってのは・・・・・「

言葉を区切り視線を俺に・・・いや、俺の腕に向けた

「へりへりへ・・・、本物はあるとは思つても見なかつたがな・・・。
なあ、くれよ」

おれが、こいつの目的ってのは

「くれよ、それを・・・・・神滅具を! 赤龍帝の籠手をよおおおおお

叫びと共に地中から數十匹のグールがでてくる！

こいつの目的は、俺のアーティファクト・赤龍帝の籠手か！

「誰がやるか、バカたれ」

ゲールの集団に向かい駆けだす

ふつ飛ばす！！

再開は突然だつた

探していた人は、会いたかつた人は、近くにいた

会いたくて会いたくて、想い続けた人は魔帆良^{マハラ}にいたんだ

お兄ちゃんが行方不明になつて数年、やつと会えたお兄ちゃんは昔よりも背が大きく、昔よりもカッコよくなつていたけど・・・

私に向けたあの笑顔は・・・

抱きしめてくれた時感じた、あの温もりは・・・

「・・・変わつてないな」

大好きなお兄ちゃんのままだつた

「ぶつ飛ばす！！」

大量のグールに向かっていくお兄ちゃん

その姿に・・・

その背中に・・・

私は目が離せなかつた

危ない！と叫ぶつもりだつた

お兄ちゃんは魔法が使えないのだから

一般人と変わらないのだから

が、その言葉を飲み込んでしまった

大量のグールが宙に舞っているのだ

たとえるなら風がグール達の集団を吹き飛ばしているように

そして、その中心には魔法が使えないはずのお兄ちゃんがいる

「す、じ、い、・、・、・」

お姉様も、お兄ちゃんの姿に目を奪われている

殴り、蹴り飛ばす

その勢いは止まらず、まっすぐに悪魔に向かつて進んでいく

「ち、つ、・、・、・、燃、え、な、」

悪魔は再び青い炎をお兄ちゃんに向かい放つ

「く、つ、ー、」

お兄ちゃんはそれを正面から受けてしまつ

「お兄ちゃんー、」

魔法が使えないといつ事は魔法に対する防御も使えないと叫び

そんなお兄ちゃんがあんなモノを貰ひたの

「…………あいつこわー！」

何事も無かつたように出でてきた・・・・・つて

「ええええええええ！」

おもわず驚きの声を挙げてしまつ

そして、何事も無かつたかのようにグール達を倒し始めた

「・・・・・髪衣」

「・・・・・はー」

「あなたのね兄さんは、魔法を使えないはずではなかつたのですか

?」

「そのはず・・・・なんですか？」

もう、訳がわからなによ

でも・・・・

「かつ」・・・・・

「え?」

お姉様？

「あ、ち、す、すゞいわね、あなたのお兄さん」

「あ、はい」

お姉様、まさかお兄ちゃんに・・・まさかね

「だへー・ひとおじい!」

お兄ちゃんがグールの集団から抜け出し私達のそばに戻ってきた

「もう終わりかい?」

「ひっせえ、ちょっと休憩だ」

たしかに、お兄ちゃんは強いつてわかったけど、相手が多すぎるよ

「はあー仕方ない」

お兄ちゃんはポケットから一枚のカードを取り出し額に当てる。あれって・・・

「準備はいいな!」

カードが空中に舞う

「召喚!! 佑太の従者 明石 裕奈! 大河内 アキラ!」

二つの魔方陣が描かれ光が溢れる

お兄ちゃん・・・仮契約してたんだ・・・後で、

A

S I しなきゃ

O H A N

s i d e E N D

一十六時間目「再会した兄妹」（後書き）

だいぶ空けてしまい申し訳ありませんでした m (ーー)m

一十七時間目「トランク一戦」（前書き）

長い間更新できずにしてしませんでした。
短めですが書きあがつたので投稿します

一十七時間目「テレヒュー戦」

いや～、一人で何とかなるかなって思つてたけど

「だ～～～うつとおじい～～」

多すぎるんだよ！クソッ たれ

グールの群れから一時離脱した

「もう終わりかい？」

「うつせえ、ちょっと休憩だ」

倒すたんびにホイホイ召喚しやがつて！

「はあ～仕方ない」

本当は一人でカタつけるつもりだつたんだがな
「準備はいいな！」

「〔えつ、ちよ、ちよつと待つて～〕」

悪いな緊急事態だ

「召喚！～佑太の従者 明石 裕奈！大河内 アキラ！」

田の前に魔方陣が二つ描かれる

後に思ひ、「この時少しでも待つてやればこんなことにはならなかつたんだ

魔方陣が一際強く輝くと、そこには俺の従者でありクラスメートの大河内アキラと明石裕奈が現れた・・・

「…………メイドさん?」

「…………メイドですわね」

メイド服を着て

「…………だから、待つてって言つたのに」

「うつうつ——」

「戦うメイドかあ…………アリだな!」

「…………無いわよ!」

「…………終わったか？」

悪魔がイラついた様子でこちらを睨んでいる

あ～あ、あんなにイラつこちゅうって

じこは・・・・

「もうチョイ待って！ 裕奈、一人にあれを」

「りょーかい！ アデアツト！」

裕奈の手に双銃が現れ、それを高音と愛衣に向ける

タタン！ ！

「きやー！」

「くづー！」

撃つた！

「お、お兄ちゃん……なんで・・・

「つ、ビリーッつつもりですか」

愛衣は呆然と、高音は睨みつけるよつて俺たちを見るが・・

「どうしても何も、回復させてるんだが、痛くは無いだろ?」

「え？・・・・あれ？」

「本当に痛くありませんわ」

「それが私のアーティファクト、嵐の双銃の力だよ。複数の種類の弾丸が撃てるの！今一人に撃つたのは活性の効果が付与された魔弾、肉体を活性させて自己回復力を上げてるんだ！」

まあ、いきなり撃たれたら、あんな反応するわな。しかし、嵐に活性とは、他の効果もなんとなく
わかりそうだな

あらり、我慢できずに殴りかかってきやがった

「アキラ」

「うん」

アキラが俺達の前に立つ

「アテアツト！」

アキラの周りに水色の羽衣が現れる

「まずは小娘！てめえからかあああーーー！」

悪魔が拳に魔力を込めてアキラに殴りかかる！

「・・・・・　流水」

アキラが呟くと同時に悪魔の拳がアキラの横の空を切る

「…！」

「チャンス！」

己の拳が当たらなかつたことに驚愕している悪魔の隙を突き、裕奈が銃を乱射する

「ちつい！」

それをギリギリで交わし元いた場所、大量のグールを挟んだ反対側に戻つた

「・・・・・　どういうことだ、俺の拳は確かにそこの小娘を殴りつけたはずだ。それなのに、何故！」

「これが、私のアーティファクト、流水の羽衣の力。水と流れを操る能力」

「水と流れ・・・だと？」

そう、アキラのアーティファクトは水を操れるだけでなく、流れも操れる

今のは単純にアイツの力の流れを逸らしただけ……ある意味、

絶対防御じゃね？

「ぐつ、グール共！！」

「」「」「」「あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、」

大量のグール達が襲い掛かつてきた

「ここに任せていいか？」

「うん」

「わかった！親玉は任せたよ」

つたく、初戦闘のはずなのに、まったく緊張して無いし

「こんな奴ら、いつも佑太をお仕置きしてるトヴァちゃんに比べたら何でも無いし……」

「うん」

アキラまで・・・・・・・・・・・・・・・・・・あれ、何だろう田から汗が出てきた

怖くないわけが無かつた

佑太に呼ばれて来て最初に見たのは、たくさんのゾンビみたいな鬼とその後ろでこちらを二タニタと薄気味悪い笑みを浮かべた大きな悪魔

怖かつた、逃げたかつた・・・・けど

「こつら任せていいか?」

佑太の言葉が、佑太に頼られた事が・・・

「わかった! 親玉は任せたよ」

私の中から恐怖を取り除いてくれた

やばいな、顔がにやけちゃうよ~

だから、

「こんな奴ら、いつも佑太をお仕置きしてるエヴァちゃんに比べたら何でも無いし!...」

照れ隠しに軽口を叩く

よ~し~! 裕奈ちゃんのデビュー戦しつかり見ててね

高音 side

最初は啞然としてしまった

あの方、愛衣のお兄さんが呼んだ従者がメイド服を着て現れたのだから

彼ほどの実力者がどのような人達と仮契約してゐるか気にもなりました

しかし、現れたのは彼と同じ年くらいのメイド服を着た少女達

おそらく、最近仮契約をしたばかりなのだと思い、すこし落胆してしまいましたが、その考えはすぐに書き換えられました

裕奈さんは、グール達の中に飛び込んだかと思つと両手に握つた銃で次々とグールを撃ち

抜く姿は、嵐のようで、アキラさんは歩くような速さでグールの密集地帯に入つていつたと思うとヒラヒラと攻撃をかわしながら同士討ちを誘つていく、その姿は流水のようだ

「すごい」

私はその姿に目を奪われてしまつた

「あ～ん！もう、埒が明かない！アキラ！」

「うん」

二人は一度下がると裕奈さんがアキラさんに向かい銃を向ける

「一気に決めるよー」

その言葉と共に黄色の魔弾を一発アキラさんに撃つた

すると、アキラさんから感じる魔力が急激に上がり彼女の周りが青く光っている

「つーーーーーーーよしー佑太君、裕奈下がつて」

彼と裕奈さんが私達の田の前まで下がつてくる

一人その場に残つたアキラさんにグールの群れが襲い掛かつてくる

「・・・・水鞭」

アキラさんを中心に大量の水の鞭が現れグール達を切り裂いていった

私の影槍の水バージョンつてところかしら、まだ完全に制御が出来ないらしく鞭の動きがランダムだ

それでも、相手は知能の無いグール闇雲に向かつて来るだけなので、結果グール達は全滅

アキラさんはその場に座り込んでしまう

「ちよつと、無理しそぎちやつたかな」

力を使い果たしてしまったようだ

その事に悪魔も氣づきアキラさんに狙いをさだめ、

「死ねえ！小娘つええ！」

炎を放つが

「させると思つか」

私の横にいたはずの彼がアキラさんに向かってきました炎に突っ込む

「お兄ちゃん！」

「あなた！」

私と愛衣は声を上げてしまつ

さつきは大丈夫だったとはいへ、次も平氣とは思えないが

炎は彼に当たる直前に破裂してしまつた

「何故！」

悪魔も驚いてるようだ

「俺が何のためにてめえをいつつかせて時間を稼いでいたと思つへ？」

『Boost...』

彼の両手の籠手が赤く光り輝いている

「正解だ！」

■ Exploration! ■

光が収縮し彼の拳が赤く輝く！

「ぶつ飛びやがれ！！」

「アサヒ！」

拳が顔面に当たり悪魔が木々をなぎ倒しながら吹っ飛んで行く

「ふうへ一著上がりつてか」

振り向いた彼の顔は笑顔で月光に照らされたその笑みに

• • • • • / / / /

私は見惚れてしましました

一十七時間目「トランマー戦」（後書き）

就職やら引っ越しやらで更新できずすいませんでした。
久々に書くのがいきなり戦闘シーンだったので、なんか中途半端な
無いようになってしまいました。次回の更新は未定です

まずは長期にわたって更新できず申し訳ござりませんでした。

大変かつてながら、本小説の更新を停止させingいただきます。

「私」ときの小説の更新をお待ちしていただいた方々には、大変申し訳なく思っています。

今後、「この小説をどうするかはハッキリとは決まっていません。

考えとしては、設定や内容を一掃し書き直すか、「このまま本小説を削除するかになります。

このまま、続きを書く可能性もありますが、確立はかなり低いです。

今後の活動としては、オリ主である彼の能力を変更し、他の作品の二次小説をリハビリとして書いてみようとも考えています。

最後に、「私」ときの小説を読んでいただいた皆様に感謝と謝罪の言葉を申し上げます。

私の小説を読んでいただきありがとうございました。

そして、更新をお待ちしていた皆様、大変申し訳ござりませんでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8056k/>

魔法先生ネギま！～麻帆良に現れし赤龍帝～

2011年10月4日20時23分発行